貝塚市埋蔵文化財調査報告　第~~45~~47集

三ケ山西遺跡発掘調査概要

1999.3.31

貝塚市教育委員会

三ケ山西遺跡発掘調査概要

1999.3.31

貝塚市教育委員会

はじめに

本市の山間部にあたる木島谷は多くの文化財が残る地域であります。蕎原川と秬谷川の合流点に位置する水間寺は大阪府下で唯一の三重塔をはじめ、多くの建造物が現存しています。平成9年度に本堂、三重塔、護摩堂、行基堂、弁財天宮殿、本堂棟札を市の建築文化財として指定を行いました。また孝恩寺には国宝に指定されている観音堂や本尊阿弥陀如来をはじめとする重要文化財の仏像群が安置されています。

三ケ山西遺跡は近木川右岸の丘陵部に位置し、中世の遺物散布地として位置付けられています。本市の調査、（財）大阪府埋蔵文化財協会の調査で古代から中世の遺構、遺物が数多く確認されています。今回、本遺跡範囲がさらに山手側にひろがることが確認されました。本地域の歴史を明らかにするうえでまことに有意義なことと考えています。

本調査報告書の刊行が、皆様の文化財に対するご理解を深めていただくとともに、文化財の保護・保存・研究の一助となれば幸いに存じます。

なお、調査並びに本書作成にあたり、関係各位には多大なご協力を頂き、ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後とも本市における文化財保護行政に対する一層のご理解とご支援をお願いいたします。

貝塚市教育委員会

教育長　福　井　昱　彦

例　　言

1．本書は貝塚市水道部工務課の依頼により、大阪府貝塚市三ツ松107-3番地に所在する三ケ山西遺跡において実施した（仮称）三ツ松受水場建設に伴う事前発掘調査の概要報告である。

2．調査は確認調査を平成8年10月28・29日にかけて、本格的発掘調査を平成9年9月16日より平成10年2月16日にかけて実施した。なお、内業調査については平成10年9月30日に終了した。

3．調査にあたっては、市水道部工務課・業務課より多大な理解と協力を得た。記して感謝の意を表す。

4．発掘調査は貝塚市教育委員会社会教育課、吏員木嶋崇晴が担当した。
現地・内業調査および本書作成にかかる諸作業については、下記の諸氏の参加を得て実施したものである。
南明美　溝端美也子　永橋祥行　藤谷和人　田中明美　西出安芸子　文野雅歳　楠本真紀
大鹿倫子

5．本書の執筆編集は木嶋が行った。

6．遺物写真撮影は米子が行った。

7．出土遺物、調査記録は貝塚市教育委員会において保管している。

目　　次

はじめに

例　言

目　次　（本文目次、図版目次、挿図目次）

第１章　調査に至る経過 ---------- 1

第２章　位置と環境 ---------- 2

第３章　調査成果 ---------- 5

1.調査の概要 ---------- 5

2.基本層序 ---------- 5

3.検出遺構 ---------- 6

(1)第２遺構面 ---------- 6

(2)第３遺構面 ---------- 6

(3)第４遺構面 ---------- 24

(4)第５遺構面 ---------- 25

(5)第６遺構面 ---------- 25

4.出土遺物 ---------- 28

(1)遺構出土遺物 ---------- 28

(2)第２層出土遺物 ---------- 29

(3)第３層出土遺物 ---------- 29

(4)第４層出土遺物 ---------- 29

(5)第５層出土遺物 ---------- 31

(6)第６層出土遺物 ---------- 31

(7)第６層出土縄文土器 ---------- 34

(8)第６層出土石器 ---------- 35

第４章　まとめ ---------- 38

図版目次

図版１　検出遺構
　調査区全景
図版２　検出遺構
　１.北壁（Ｆ－２区）
　２.同上（Ｅ－２区）
図版３　検出遺構
　１．第１遺構面
　２．第２遺構面
図版４　検出遺構
　１．ＳＤ－203･204･221･236
　２．ＳＤ－243～246
図版５　検出遺構
　１．ＳＤ－302･303･321～326
　２．ＳＤ－301･309･316～318
図版６　検出遺構
　１．第３遺構面
　２．ＳＸ－301西側
図版７　検出遺構
　１．ＳＸ－301、ＳＤ－115～117
　２．ＳＸ－301
図版８　検出遺構
　１．ＳＸ－301完掘状況
　２．同上
図版９　検出遺構
　１．ＳＸ－301
　２．同上土層断面
図版10　検出遺構
　１.第４遺構面
　２.第５遺構面
図版11　検出遺構
　１.ＳＤ－401
　２．同上
図版12　検出遺構
　１.ＳＤ－609検出状況

２．同上完掘状況
図版13　検出遺構
１.ＳＸ－609
２．第６遺構面北部
図版14　検出遺構
１.ＳＤ－603・608検出状況
２．同上完掘状況
図版15　検出遺構
１.ＳＤ－603・608
２．同上
図版16　検出遺構
１.ＳＤ－603 焼土群
２．同上
図版17　検出遺構
１．自然木根（Ｄ－７区）
２．同上　　（Ｃ－３区）
図版18　検出遺構
１．自然流路
２．同上
図版19　検出遺構
１．自然流路
２．同上土層南・西断面
図版20　出土遺物
ＳＤ－109・201・202・209、ＳＸ－301出土遺物
図版21　出土遺物
包含層第２層出土遺物
図版22　出土遺物
ＳＤ－302、包含層第２層・第３層出土遺物
図版23　出土遺物
ＳＤ－219、包含層第３層出土遺物
図版24　出土遺物
側溝、試掘トレンチ、包含層第２層・第４～６層出土遺物
図版25　出土遺物
包含層第４～６層出土遺物
図版26　出土遺物

カクラン、包含層第３層・第５層・第６層出土遺物
図版27　出土遺物
包含層第６層出土遺物
図版28　出土遺物
包含層第６層出土遺物
図版29　出土遺物
包含層第６層出土遺物
図版30　出土遺物
包含層第６層出土遺物
図版31　出土遺物
縄文土器
図版32　出土遺物
縄文土器、包含層第５層出土遺物
図版33　出土遺物
石器
図版34　出土遺物
石鏃

挿版目次

図１　貝塚市遺跡分布図
図２　調査地位置図
図３　調査区地区割図
図４　土層断面図（東壁）
図５　土層断面図（西壁）
図６　土層断面図（北壁・南壁）
図７　遺構配置図（第２遺構面）
図８　遺構配置図（第３遺構面）
図９　遺構配置図（第４遺構面）
図10　遺構配置図（第５遺構面）
図11　遺構配置図（第６遺構面）
図12　ＳＸ－301断面図
図13　包含層遺構出土遺物
図14　包含層第２～５層出土遺物
図15　包含層第６層出土遺物
図16　包含層第６層出土遺物
図17　縄文土器

第１章　調査に至る経過

貝塚市では、貝塚市三ツ松107-3番地において平成10年度事業として（仮）三ツ松受水場建設計画がもちあがり、貝塚市水道部工務課から埋蔵文化財の取り扱いについて協議の申し入れがあった。

予定地は中世の遺物散布地として周知されている三ケ山西遺跡の範囲内に一部含まれており、さらに遺跡範囲外にも及んでいた。また予定地の西側では、平成3･6年度に国道170号線道路建設工事に伴い、（財）大阪府埋蔵文化財協会によって発掘調査が行われている。調査で古代から中世の遺物包含層、古墳時代の竪穴住居、６世紀末～７世紀初頭の掘立柱建物などの遺構が明らかとなっている。さらに過去の調査から遺跡範囲が広がる可能性が想定された。今回の予定地も遺跡の存在が充分予想される地点であった。

そこで貝塚市教育委員会は水道部工務課に対して発掘通知書の提出を求めた。水道部工務課と教育委員会との間で協議を行い、試掘調査を行うこととなった。

平成８年10月28・29日に教育委員会が試掘調査を実施した。予定地の現状は傾斜地につくられた耕作地であり、東から西に一段下がっていた。

調査は２×15mのトレンチを東西に各２カ所、計４カ所（120㎡）設定した。試掘調査の結果、当該地は弥生から中世にかけての遺物を含む良好な包含層を確認した。遺物として縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、白磁、染付碗、サヌカイトなどが出土した。その多くは灰色粘土層からの出土であった。

この調査結果から、遺跡の範囲が広がることが判明したため、平成８年貝教社306号にて遺跡発見通知書を文化庁に提出し、三ケ山西遺跡の拡大登録を行った。

建設計画では受水槽を設けるため、包含層の破壊が免れないことが明らかであった。そこで水道部工務課との協議を重ねた結果、建設によって破壊をうける1450㎡について発掘調査を実施することで合意した。調査期間は平成９年９月16日から平成10年２月16日にかけてである。

17.水間寺遺跡 37.集原池遺跡 39.森城跡 40.森Ｂ遺跡 41.森ノ大池遺跡 42.森Ａ遺跡 44.千石堀城跡 45.水間墓地 46.三ケ山城跡 47.片山墓地 63.孝恩寺観音堂 68.三ヶ山遺跡 69.三ヶ山西遺跡 74.木積遺跡 81.三ヶ山オニ谷遺跡 83.森下代遺跡 84.三ツ松北垣外遺跡 85.薬師池西遺跡 92.橋池遺跡 99.織部池遺跡 101.白地谷遺跡 104.嫁ヶ池北遺跡 105.キヨモ池遺跡 106.新池遺跡 107.浅池ノ奥遺跡

図１　貝塚市遺跡分布図

第2章　位置と環境

三ケ山西遺跡は貝塚市の山間部にあたる三ツ松に所在する。近木川の北側にあたる標高70mの段丘上に立地する遺跡である。本遺跡は中世の遺物散布地として推定されている。調査地は水間鉄道の終点水間駅より徒歩で北方向へ約10分、また河内長野から泉佐野方面に至る国道170号線と貝塚中央線との交差点付近に位置する。調査地の現状は耕作地である。

周辺の遺跡としては、北は中世から近世の遺物散布地である新池遺跡・浅池ノ奥遺跡、西に平安時代後期から中世にかけての集落が存在した可能性のある三ケ山オニ谷遺跡、東に平安時代から中世の散布地である橘池遺跡がある。森B遺跡からは8世紀前半の溝が検出され、大規模な耕地開発を物語る。

三ケ山オニ谷遺跡は山間部において平安時代後期から中世の遺構が検出された。検出した土坑からは黒色土器や土師器小皿が重なった状態で出土したものや焼土、炭を多く含むものがあった。時期は10世紀ごろ、何らかの祭祀にかかわりのある遺構と考えられる。またピットを検出しており、掘立柱建物が存在した可能性も考えられている。

葛城山麓に位置する木積観音寺跡からは溝、井戸などの木積観音寺と関係が考えられる遺構が検出されている。天平時代の創建と伝えられる観音寺は14世紀にその寺域を拡大させていったことが明らかになった。現在、鎌倉後期の観音堂や平安時代の仏像が残されている。この寺は応仁の乱、根来征伐の時に兵火にあっている。

調査区の南方向には観音信仰で知られる水間寺が所在する。開創年代については和銅元（718）年とする説と天平16（744）年また天平年間とする説がある。最盛期には七堂伽藍と多くの僧坊をもっており、現在の寺域よりも広大であった。天正13（1585）年、秀吉軍進攻に際して根来方についたために焼き打ちにあっている。

この他、三ケ山城跡・蛇谷城跡・根福寺城跡・蕎原城跡・槍ケ谷城跡など多くの中世山城が築かれている。また三ッ松の旧家には、中世の土地売買に関する古文書が残されている。

中世末には根来寺を中心とする紀州勢力が進出し、貝塚市域も紀州根来の勢力下に入る。近木川の地形を利用して根来衆の城砦である森城跡・千石堀城跡・積善寺城跡などが配置され、紀州根来征伐で出陣してきた豊臣軍との間で城砦を中心に戦闘が行われた。

平成3・6年度に国道170号線道路建設工事に伴い、（財）大阪府埋蔵文化財協会が発掘調査を行っている。その成果としては古墳時代の竪穴住居3棟、中世の耕作地跡が検出されている。鎌倉時代を中心とした遺物が出土しており、この時期に荘園開発が行われたと考えられる。

平成3年度調査

第1調査区からは溝2条が検出されている。第2調査区では掘立柱建物2×2間と1×3間の

2棟が検出された。時期は6世紀末から7世紀初頭にかけてのものと考えられる。また同時期の溝と土坑が検出されている。出土遺物は瓦器が最も多く、その時期は12世紀後半から13世紀後半までのものである。

平成6年度調査

A区内には段丘崖があり、その西側は谷状地形で、谷底には自然流路が流れている。調査区東端にも段丘面を侵食する自然流路があり、両流路とも南から北へ水が流れていた。溝は西側の谷に向かっており、排水に使われた形跡がある。

B･C区からは中世の溝と不定形の落ち込み状遺構が検出されている。

D区からは6世紀末から7世紀初頭と考えられる竪穴住居3棟が検出された。いずれも方形で1辺約5mを測る。中世の耕作地の境界溝と小溝群が検出されている。小溝群は東西方向で大きさはバラバラであるが、方向はそろっていることから、耕作土の上から掘られた畝溝と推測されている。

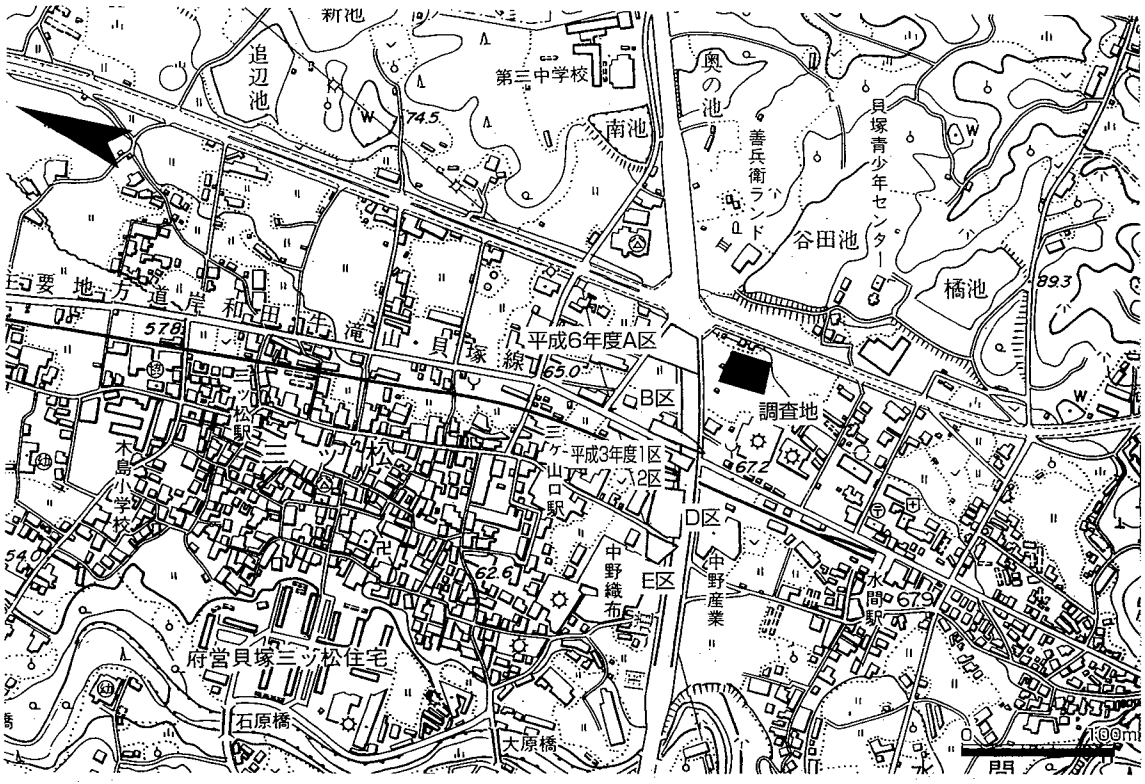


図2　調査地位置図

第３章　調査成果

１．調査の概要

調査は建設計画に基づき南北約54m・東西約26m、面積1450㎡を調査区として設定した。調査区は国家座標基準値Ｘ＝－177.015・Ｙ＝－56.085を基準にして５ｍ×５ｍに区画し、西に８区を設け（Ａ～Ｈ）、南に12区を設けた（１～12）。

調査区は緩斜面上にあり、２筆の耕作地にまたがり、段が存在する。

調査は段部分を境として、一段高い東側を「１段面」、西側を「２段面」として調査区を分け、層を掘り下げていった。この段部分は調査区北からＥ－２～４、Ｄ－５～９、Ｃ－９～12の各区である。１段面と２段面との比高は約0.4ｍを測る。

２．基本層序

調査区の基本層序は１段面、２段面の第１～４･６層はほぼ対応すると考えられる。第５層は２段面（Ｅ－２～５、Ｆ－６～11区）から西方向に落ち込む層である。また第６層は下層が上層に比べやや砂質ぎみであったため、上・下層に分けて掘削を行った。

基本層序は第１層が耕作土（層厚約0.2m）、第２層は黄褐色土（層厚約0.1m）、第３･４層は灰オリーブ色土（各層厚約0.2m）、第５層は灰黄色粘質土（層厚約0.2m）、第６層は灰色粘土（層厚約0.3m）、第７層は黄灰色土（地山）である。調査は第７層上面まで行った。

また調査区１段面南部は第３層まで削平されていた。

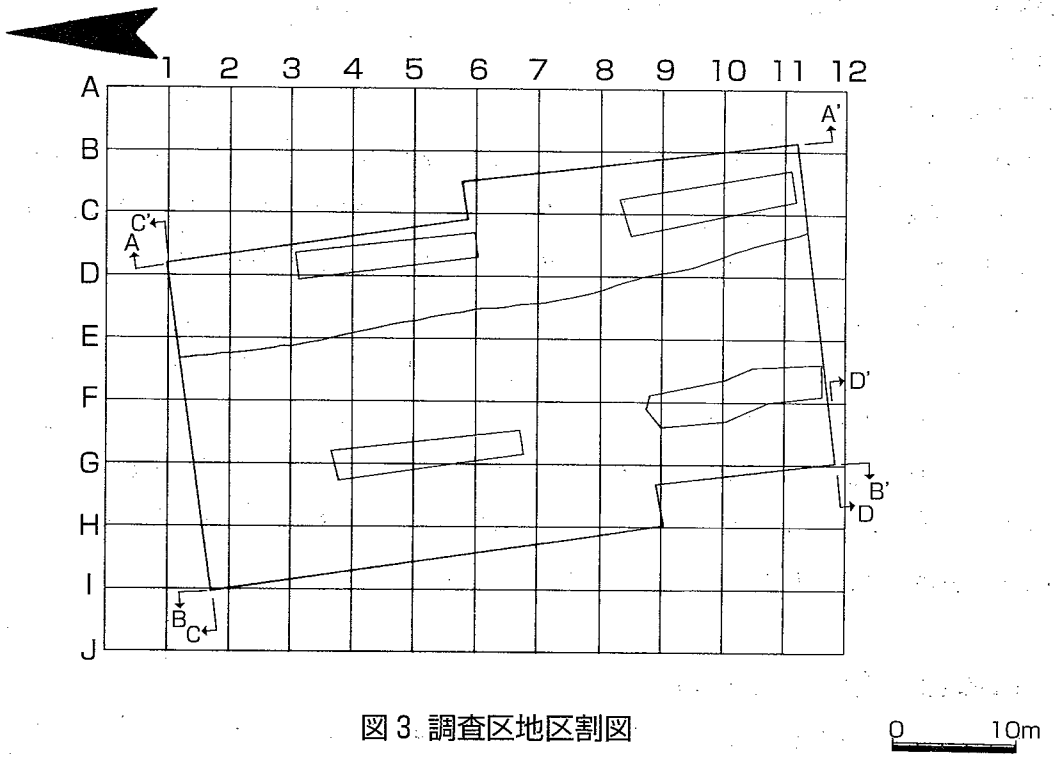


図３ 調査区地区割図

3．検出遺構

第1・2遺構面では鋤溝群、溝、第3遺構面では鋤溝群、溝、粘土採掘土坑、第4遺構面では鋤溝群、溝、第5遺構面では土坑、第6遺構面では溝、土坑、自然流路の一部、落ち込みを検出した。第1遺構面は現代の耕作痕と混在し、時期も近代以降と考えられることから、この面の説明は省略する。

以下主な遺構について詳述する。

第2遺構面　（図7、図版3）

第3層上面で検出を行った。遺構面1段面は調査区南側から中央付近にかけて約0.1m傾斜する。2段面は調査区中央付近から北方向に向かって0.05m傾斜する。本遺構面では鋤溝、区画溝などを検出した。

鋤溝群

調査区全域で鋤溝群を検出した。検出長1.6～14m、幅0.12～0.7m、深さ0.02～0.04mを測る。埋土は大きく分けて、1段面北側は黄褐色砂質土、同南側は灰黄褐色土、2段面は灰オリーブ色土である。方向は座標北に対して西に10°振る。遺物はＳＤ－209から瀬戸・美濃系の陶器（図版20－18）、ＳＤ－219から青花（図版23－4）、他の鋤溝から土師器、瓦器、須恵器、瓦、陶磁器が出土した。

ＳＤ－243～246　（図版4）

これらはＢ・Ｃ・Ｄ－7区で検出した溝である。検出長2.6～0.65m、幅0.2～0.5m、深さ0.03mを測る。埋土は灰色土である。方向は座標北に対して東に80°振る。遺物は土師器、瓦器、陶磁器が出土した。

ＳＤ－216

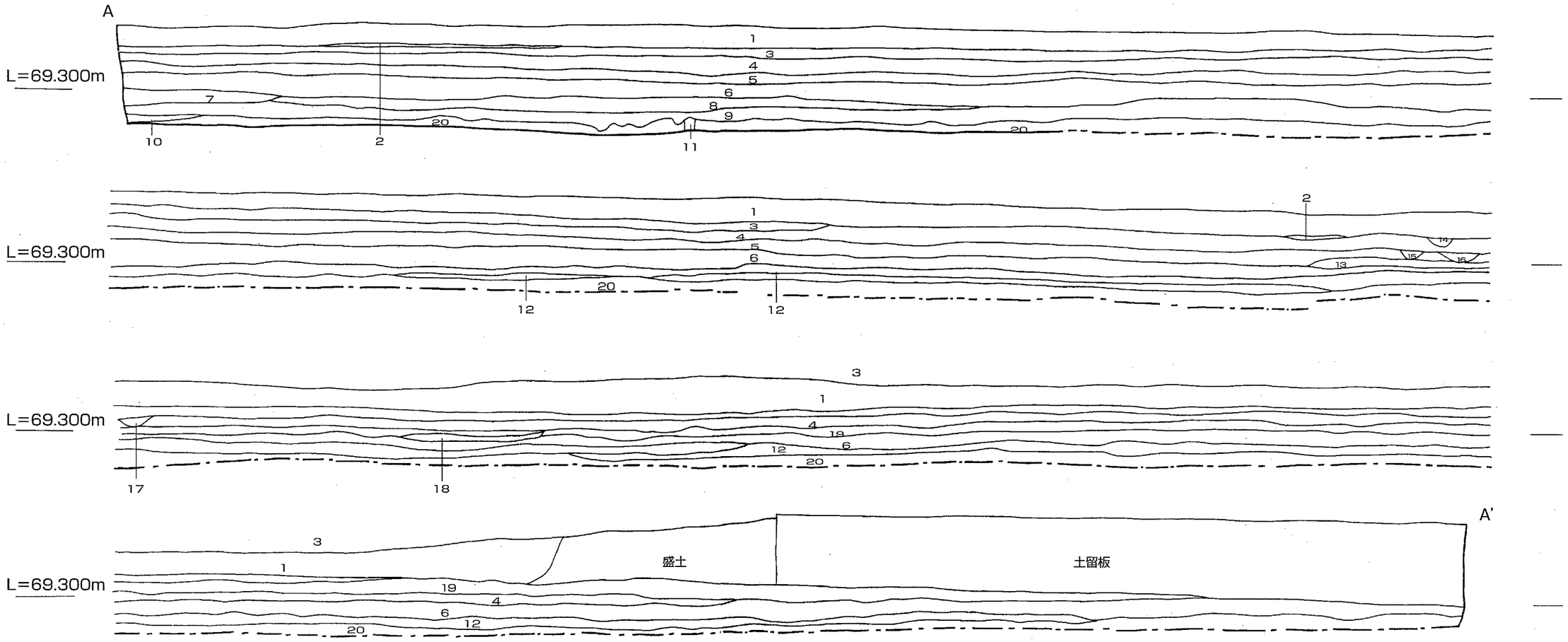
これらはＤ・Ｅ・Ｆ・Ｇ－7、Ｇ－8区で検出した溝である。検出長17.2m、幅0.4～0.8m、深さ0.05mを測る。埋土は灰色砂質土である。方向は1段面と同じ座標北に対して東に80°振る。遺物は土師器が出土した。これらＳＤ－243～246・216は耕作地を東西に区分する区画溝と考えられる。

ＳＤ－203・204・221・236

これらはＨ－2～8、Ｇ－7～9、Ｆ－11・12区で検出した溝である。検出長1.5～14m、幅0.2～0.4m、深さ0.07～0.18mを測る。ＳＤ－203の埋土は灰黄色砂質土、ＳＤ－204は灰色土、ＳＤ－221・236は灰オリーブ色砂質土である。またＳＤ－203の底部は灰白色シルトが薄く堆積していた。方向は座標北に対して西に10°振る。時期は近世後半と考えられる。これらは耕作地を南北に区分する区画溝と考えられる。

第3遺構面　（図8、図版6）

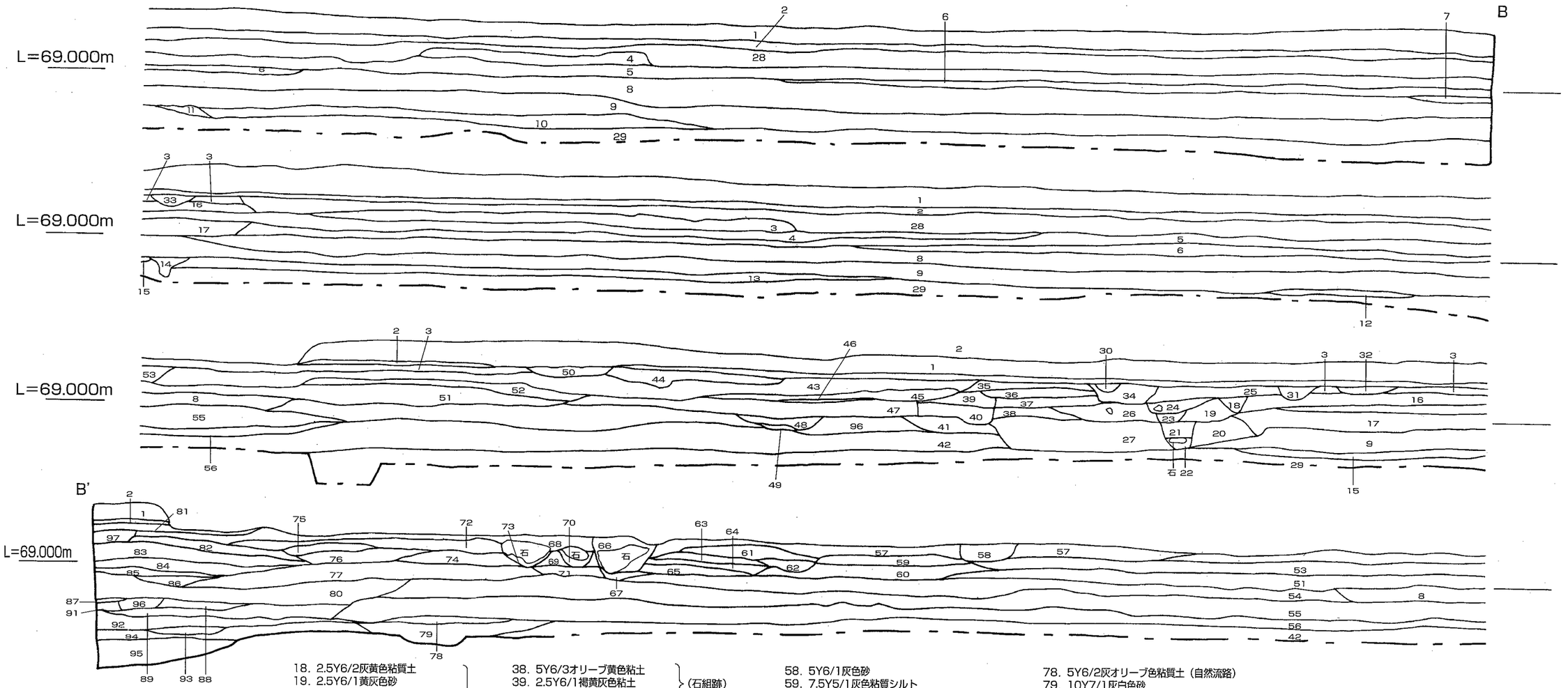
第4層上面で検出を行った。遺構面1段面は東から西方向へ0.1m傾斜する。2段面も東から西方向へ0.1m傾斜する。本遺構面では鋤溝、東西・南北方向溝、ＳＸ－301を検出した。



1. 現代耕作土
2. 10YR5/4にぶい黄褐色土（第2層）
3. 2.5Y6/2灰黄色粘質土（第3層）
4. 5Y5/2灰オリーブ色土（第4層）
5. 2.5Y5/2暗灰黄色粘質土（第4層）
6. 5Y6/1灰色粘質土（第6層上層）
7. 7.5Y6/1灰色粘質土（第6層下層）
8. 5Y5/1灰色粘質土（第6層下層）
9. 5Y4/1灰色粘質土、マンガンを含む（第6層下層）
10. 2.5Y7/2灰黄色砂質土
11. 2.5Y6/1黄灰色粘質土
12. 2.5Y7/1灰白色粘質土（第6層下層）
13. 2.5Y6/3にぶい黄色砂質土、粗砂が混じる
14. 5Y7/1灰白色砂
15. 5Y6/1灰色砂（SD−243）
16. 7.5Y6/1灰色砂、15よりも砂の粒子が粗い（SD−244）
17. 7.5Y6/1灰色砂
18. N6/0灰色粗砂
19. N6/0灰色粗砂、10YR6/6明黄褐色粘土ブロックが混じる
20. 10YR7/1灰白色砂質、マンガンを含む（第7層）

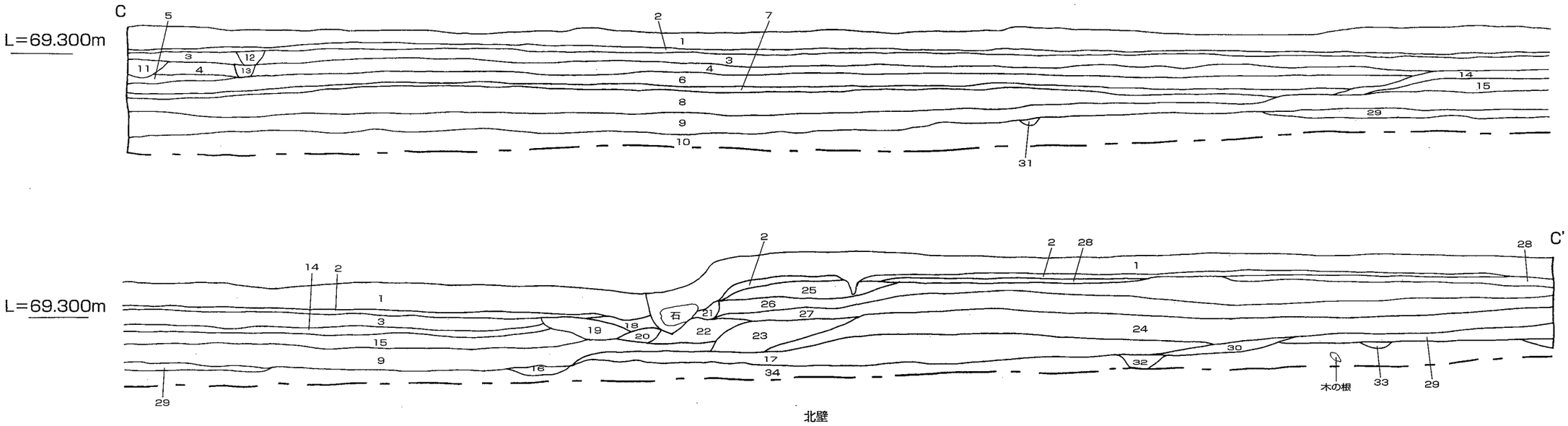
0 2.5m

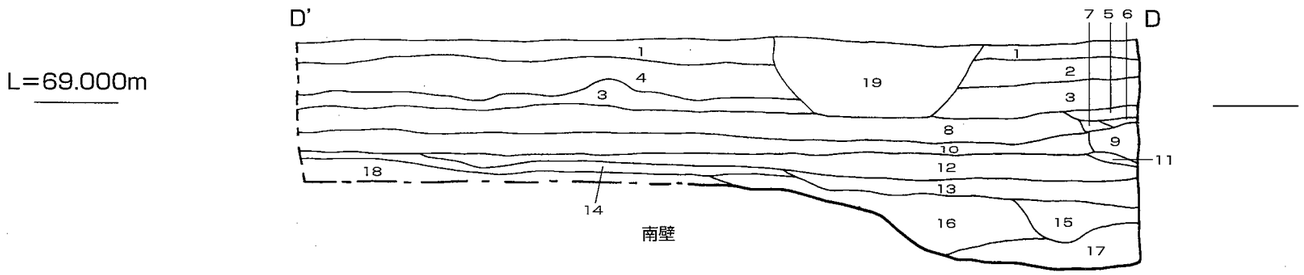
図4　東壁土層断面図



1. 現代耕作土（第1層）
2. 10YR5/4にぶい黄褐色土（第2層）
3. 5Y5/3灰オリーブ色土（第3層）
4. 5Y5/4灰オリーブ色土（第4層）
5. 2.5Y5/3黄褐色土（第5層）
6. 2.5Y5/2灰黄褐色粘質土（第5層）
7. 10YR5/2灰黄褐色粘質土（第5層）
8. 5Y6/1灰色粘土（第6層上層）
9. 2.5Y7/1灰白色粘土（第6層下層）
10. 7.5Y7/1灰白色粘質土
11. 5Y7/1灰白色粘土
12. 10YR5/1灰色粘土
13. 7.5Y7/1灰白色砂質土（落ち込み2）
14. 2.5Y6/1黄灰色粘土
15. 7.5Y7/1灰白色粘質土（落ち込み2）
16. 5Y5/3灰オリーブ色粘質土、砂が混じる（第4層）
17. 10YR6/3にぶい黄橙色粘土
18. 2.5Y6/2灰黄色粘質土
19. 2.5Y6/1黄灰色砂
20. 7.5Y7/1灰白色粘土
21. 10Y6/1灰色砂
22. 10Y6/1灰色粘質砂
23. 2.5Y7/2灰黄色粘土
24. 5Y5/1灰色粘質砂土
25. 5Y5/1灰色粘土
26. 2.5Y7/3浅黄色粘土、粘質強い
27. 10YR6/1褐灰色粘土、粘質強い
（石組跡）
28. 7.5Y6/2灰オリーブ色土
29. 10Y7/1灰白色砂質土、マンガンを含む
30. 5Y6/2灰オリーブ色細砂
31. 5Y5/1灰色細砂
32. 5Y5/2灰オリーブ色細砂
33. 5Y5/1灰色細砂
34. 5Y7/1灰白色シルト
35. 7.5Y7/1灰白色粘土
36. 5Y6/2灰オリーブ色粘土
37. 5Y7/2灰白色粘土
（石組跡）
38. 5Y6/3オリーブ黄色粘土
39. 2.5Y6/1褐黄灰色粘土
40. 2.5Y6/2灰黄色粘土、粘質強い
（石組跡）
41. 5Y5/1灰色粘土
42. 10YR5/1褐灰色粘土、マンガンを含む（第7層）
43. 7.5Y7/2灰白色粘土
44. 5Y6/2灰オリーブ色粘土
45. 10Y6/1灰オリーブ色粘土
46. 10Y7/1灰白色粘土
47. 2.5GY6/1オリーブ灰色粘土
48. 7.5Y5/1灰色粘質シルト
49. 2.5Y6/2灰黄色砂
50. 7.5Y6/1灰色シルト
51. 10Y6/1灰色粘土
52. 2.5Y7/3浅黄色粘土、粘土ブロックが混じる
53. 2.5Y5/2暗灰黄色土（第4層）
54. 2.5Y6/1黄灰色粘質土（第6層上層）
55. 2.5Y5/1黄灰色粘質土、マンガンを含む（第6層下層）
56. 5Y6/1灰色粘土（落ち込み3）
57. 5Y5/2灰オリーブ色土（第3層）
58. 5Y6/1灰色砂
59. 7.5Y5/1灰色粘質シルト
60. 7.5Y6/1灰色シルト
61. 2.5Y5/3黄褐色砂質土
62. 5Y7/1灰白色粗砂
63. 2.5Y5/2暗灰黄色砂質土
64. 10YR5/2灰黄褐色砂質土
65. 2.5Y5/2暗灰黄色砂質土
66. 2.5Y6/3にぶい黄色粘土（石組跡）
67. 2.5Y7/1灰白色砂質土、マンガンを含む（石組跡）
68. 2.5Y6/1黄灰色砂質土
69. 10YR6/1褐灰色粘土
70. 10YR5/3にぶい褐灰色砂質土
71. 7.5Y6/1灰色土
72. 5Y6/2灰オリーブ色粘土
73. 10YR5/3にぶい黄褐色砂質土
74. 2.5Y7/3浅黄色細砂
75. 2.5Y7/2灰黄色粘土
76. 2.5Y6/1黄灰色砂
（石組跡）
77. 10YR6/1褐灰色粘土
78. 5Y6/2灰オリーブ色粘質土（自然流路）
79. 10Y7/1灰白色砂
80. 2.5Y6/1黄灰色粘土（第6層下層）
81. 5Y6/2灰オリーブ色土（第3層）
82. 5Y6/2灰オリーブ色粘土（石組跡）
83. 5Y5/1灰色粘質土（第6層上層）
84. 7.5Y6/1灰色砂質土
85. 2.5Y7/1灰白色砂
86. 10Y6/1灰色細砂
87. N6/0灰色粘土
88. 10Y7/1灰白色砂質粘土
89. 5Y6/2灰オリーブ色粘土
90. 5Y5/1灰色粘土
91. 7.5Y6/1灰色粘土
92. N7/0灰白色砂（自然流路）
93. 5Y7/2灰白色砂（自然流路）
94. N7/0灰白色砂（自然流路）
95. N6/0灰色砂、3～4cm程度の礫堆積
96. 5Y5/1灰色粘質土
97. 2.5Y7/3浅黄色シルト（石組跡）

図5　西壁土層断面図





1. 5Y6/2灰オリーブ色土（第3層）
2. 2.5Y7/3浅黄色シルト
3. 5Y5/1灰色粘質土（第6層上層）
4. 2.5Y6/2灰黄色砂（SX−301）
5. N6/0灰色粘土
6. 2.5Y7/1灰白色砂
7. 5Y6/2灰オリーブ色砂質土
8. 2.5Y5/1黄灰色粘土（第6層下層）
9. 2.5Y6/1黄灰色粘土（第6層下層）
10. 5Y6/1灰白粘土（落ち込み）
11. N6/0灰色粘土
12. 7.5Y6/1灰色粘土（落ち込み）
13. N7/0灰白色砂、14よりも砂の粒子が細かい（自然流路）
14. N7/0灰白色砂（自然流路）
15. N7/0灰白色砂、13よりも砂の粒子が細かい
16. N6/0灰色砂、14よりも砂の粒子が粗い
17. N6/0灰色砂、3〜4㎝程の礫の堆積
（自然流路）
18. 10YR5/1褐灰色粘土（第7層）
19. カクラン

1. 現代耕作土（第1層）
2. 10YR5/4にぶい黄褐色土（第2層）
3. 5Y5/3灰オリーブ色土、マンガンを含む（第3層）
4. 5Y5/2灰オリーブ色土、マンガンを含む（第4層）
5. 2.5Y5/3黄褐色土、マンガンを含む
6. 2.5Y5/2暗灰黄色土、マンガンを含む
7. 10YR5/2灰黄褐色粘質土、マンガンを含む
（第5層）
8. 5Y6/1灰色粘土（第6層上層）
9. 2.5Y7/1灰白色粘土（第6層下層）
10. 5Y7/2灰白色砂質土（第7層）
11. 2.5Y6/1黄灰色砂質土（SD−230）
12. 5Y5/2灰オリーブ色砂質土
13. 5Y5/2灰オリーブ色砂質土
14. 2.5Y6/3にぶい黄色粘質土
15. 2.5Y6/2灰黄色土（第4層）
16. 5Y7/1灰白色砂
17. 10YR5/1褐灰色粘土、マンガンを多く含む
18. 2.5Y6/1黄灰色粘土、にぶい黄褐色土が混じる
19. 2.5Y5/1灰色粘土（SD−201）
20. 5Y6/1灰色粘土
21. 5Y6/1灰色粘質土
22. 2.5Y6/2灰黄色粘土
23. 7.5Y7/1灰白色土、マンガンを多く含む
24. 7.5Y6/1灰色粘質土、マンガンを多く含む
25. 2.5Y5/4黄褐色砂質土
26. 5Y5/2灰オリーブ色土（第4層）
27. 2.5Y5/2暗灰黄色粘質土（第6層上層）
28. 2.5Y6/2灰黄色砂質土（第3層）
29. 7.5Y6/1灰色粘質土（第6層下層）
30. 2.5Y7/1灰白色粘土
31. 5Y7/1灰白色粘土
32. 5Y5/1灰色粘土、
5Y7/2灰白色ブロックが混じる
33. 10YR6/1褐灰色砂質土

0 2.5m

図6　北壁・南壁土層断面図

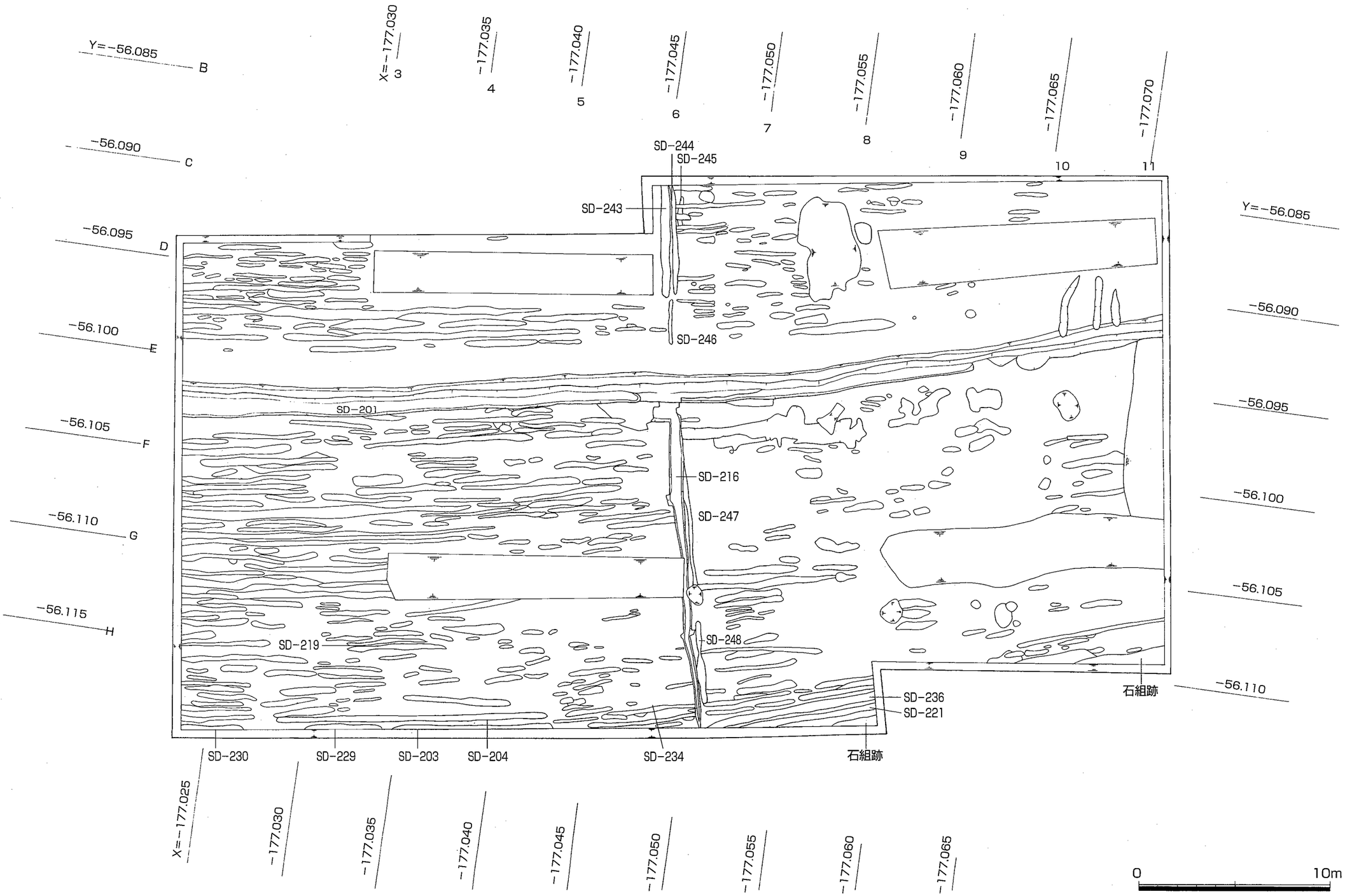

Y=-56.085
B
-56.090
C
-56.095
D
-56.100
E
-56.105
F
-56.110
G
-56.115
H
X=-177.030
3
-177.035
4
-177.040
5
-177.045
6
-177.050
7
-177.055
8
-177.060
9
-177.065
10
-177.070
11
SD-244
SD-245
SD-243
SD-246
SD-201
SD-216
SD-247
SD-248
SD-219
SD-236
SD-221
石組跡
SD-230
SD-229
SD-203
SD-204
SD-234
石組跡
X=-177.025
-177.030
-177.035
-177.040
-177.045
-177.050
-177.055
-177.060
-177.065
0
10m

図7　第2面 遺構配置図

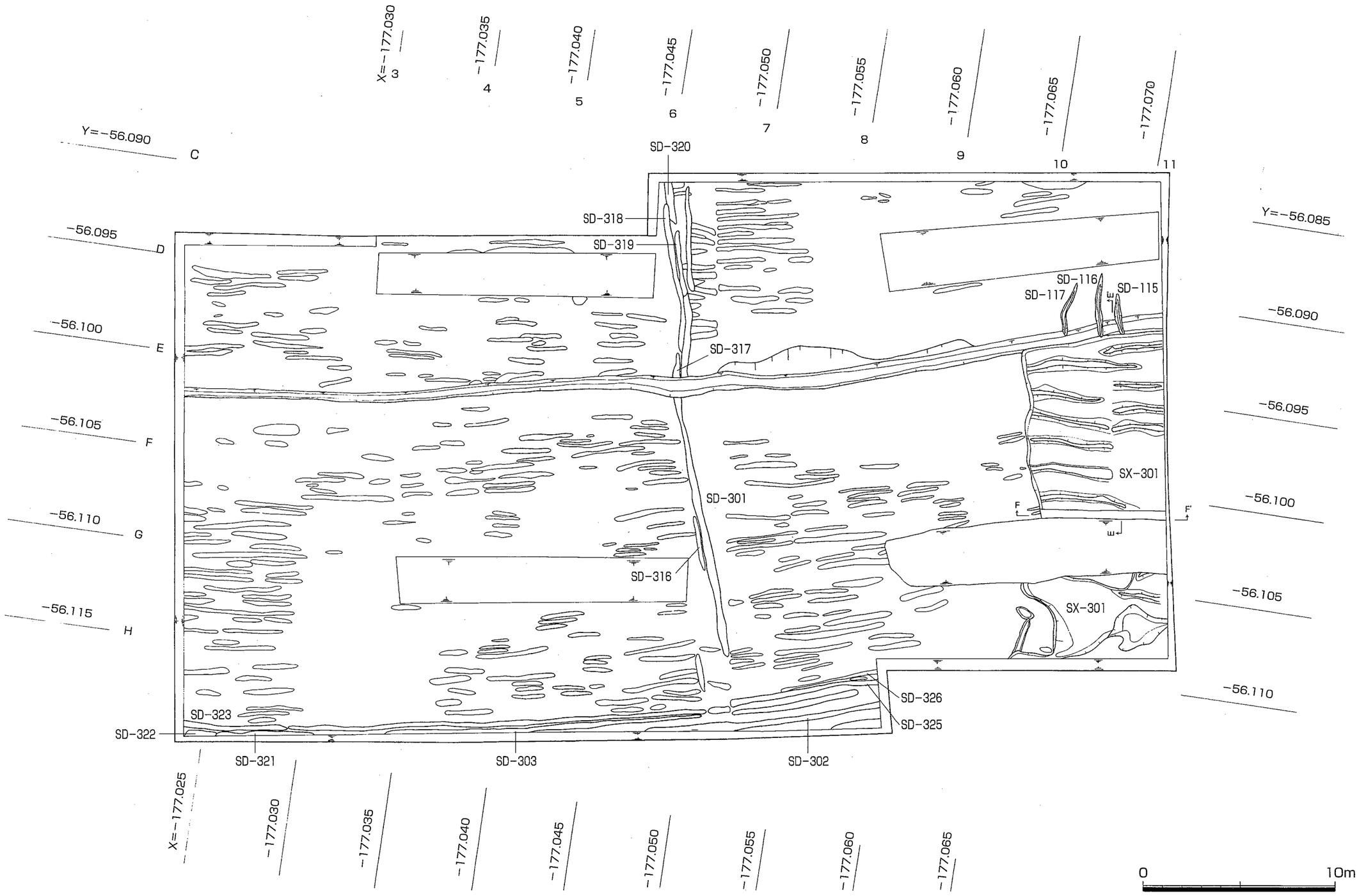

X=−177.030
−177.035
−177.040
−177.045
−177.050
−177.055
−177.060
−177.065
−177.070
3
4
5
6
7
8
9
10
11
Y=−56.090
C
−56.095
D
−56.100
E
−56.105
F
−56.110
G
−56.115
H
Y=−56.085
−56.090
−56.095
−56.100
−56.105
−56.110
SD-320
SD-318
SD-319
SD-317
SD-116
SD-117
SD-115
E
E'
SD-301
SX-301
F
F'
SD-316
SX-301
SD-326
SD-325
SD-323
SD-322
SD-321
SD-303
SD-302
X=−177.025
−177.030
−177.035
−177.040
−177.045
−177.050
−177.055
−177.060
−177.065
0
10m

図8　第3面 遺構配置図

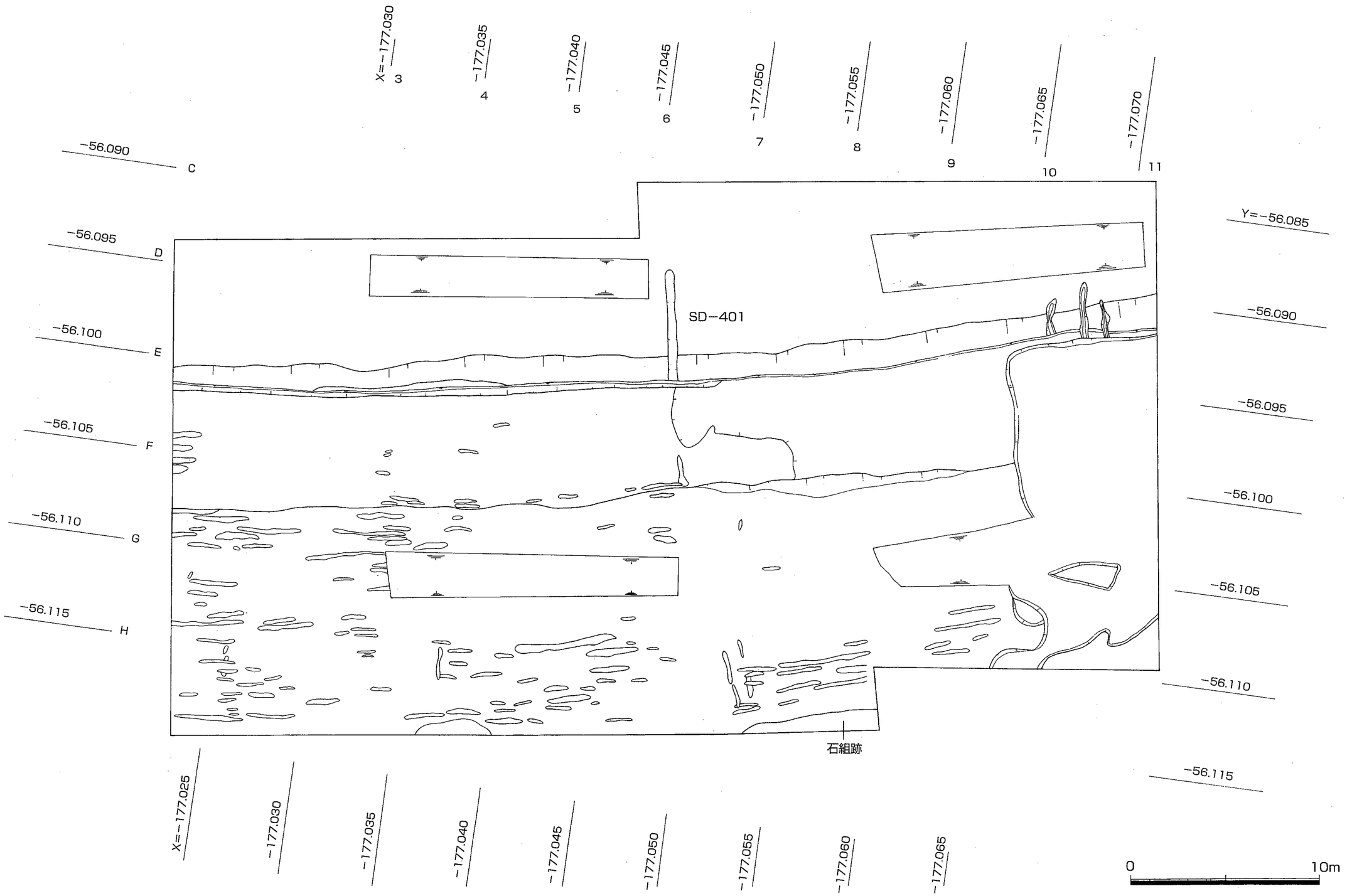

X=−177.030
3
−177.035
4
−177.040
5
−177.045
6
−177.050
7
−177.055
8
−177.060
9
−177.065
10
−177.070
11
−56.090
C
−56.095
D
−56.100
E
−56.105
F
−56.110
G
−56.115
H
Y=−56.085
−56.090
−56.095
−56.100
−56.105
−56.110
−56.115
SD−401
石組跡
X=−177.025
−177.030
−177.035
−177.040
−177.045
−177.050
−177.055
−177.060
−177.065
0
10m

図9　第4面 遺構配置図

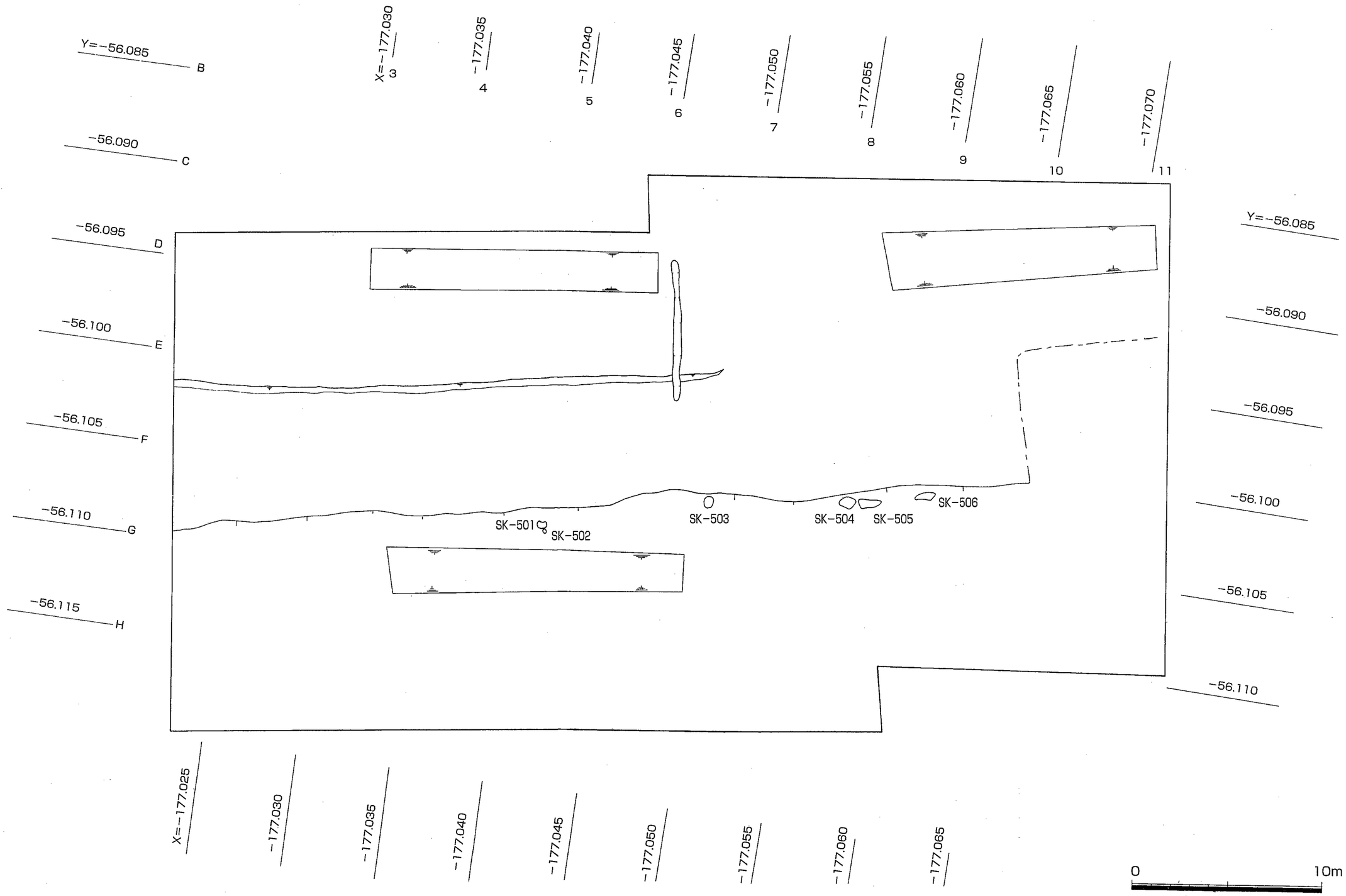


図10　第5面 遺構配置図

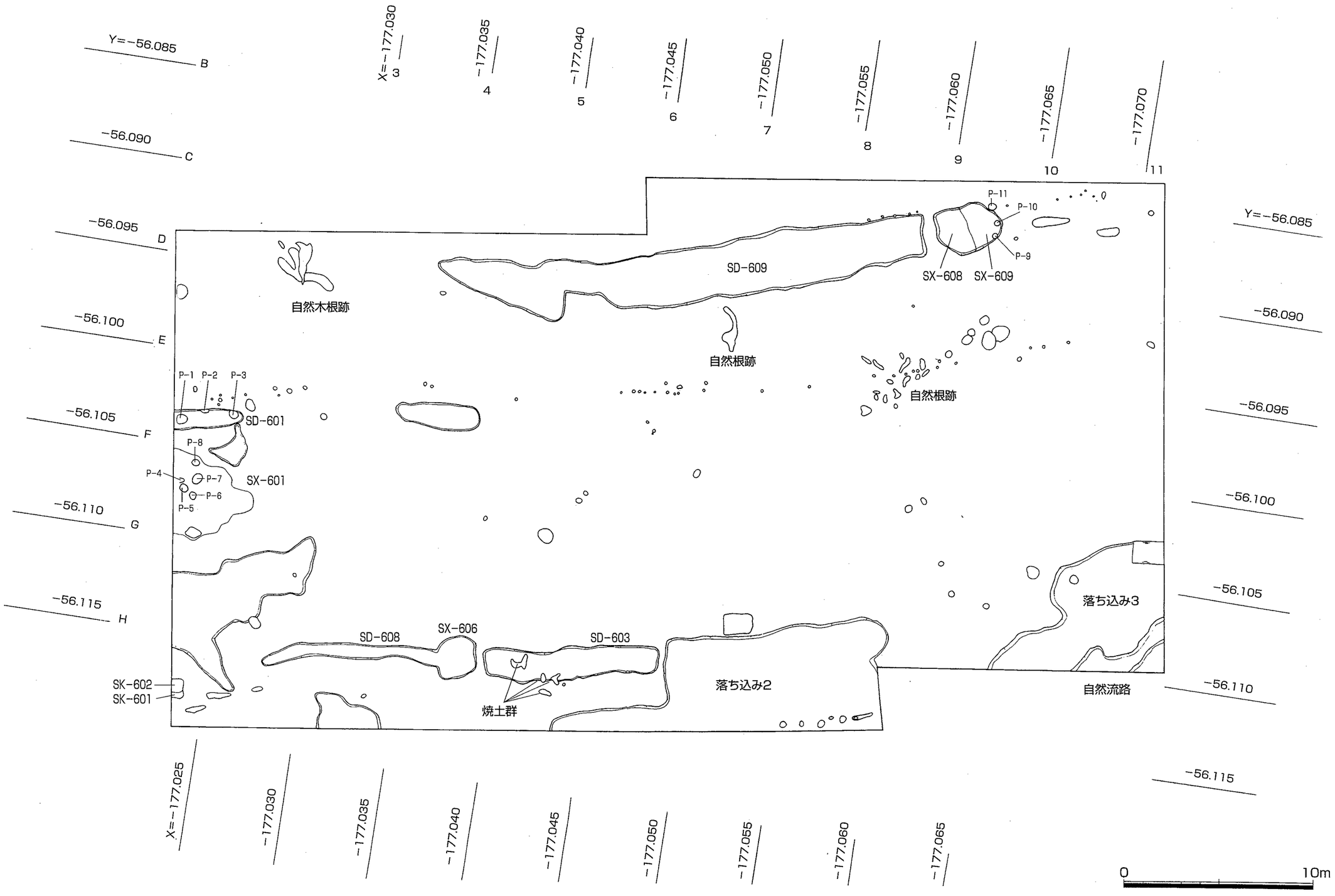


図11　第6面 遺構配置図

鋤溝群

調査区全域で鋤溝を検出した。検出長0.8～７ｍ、幅0.16～0.4m、深さ約0.02～0.07を測る。埋土は大きく分けて、１段面は暗灰黄色粘質土、２段面は灰オリーブ色粘質土である。方向は座標北に対して西に10～15°振る。遺物は土師器、瓦器、瓦質土器、陶磁器が出土した。

ＳＤ－309・317・319・320　（図版５）

これらはＢ・Ｃ・Ｄ－７区で検出した溝である。検出長1.3～7.7m、幅0.1～0.4m、深さ0.05mを測る。埋土は黄灰色砂質土と暗灰黄色砂質土である。方向は座標北に対して東に70～80°振る。遺物はＳＤ－309から土師器が出土した。これらは耕作地を東西に区分する区画溝と考えられる。

ＳＤ－301・316～318　（図版５）

これらはＤ・Ｅ・Ｆ－７、Ｆ・Ｇ－８区で検出した溝である。検出長2.9～13.7m、幅0.2～0.4m、深さ約0.05mを測る。埋土は灰色細砂である。方向は座標北に対して東に70～80°振る。遺物はＳＤ－301から土師器、瓦器椀が出土した。これらは耕作地を東西に区分する区画溝と考えられる。ＳＤ－301とＳＤ－317は対応する。

ＳＤ－302・303・321～326　（図版５）

これらはＨ－２～８、Ｇ－７～９区で検出した南北方向の溝である。検出長1.7～21.7m、幅約0.3m、深さ0.02～0.11mを測る。ＳＤ－302の埋土は灰色土、ＳＤ－303は灰オリーブ粘質土である。方向は座標北に対して西に10°振る。遺物はＳＤ－302から青花（図版22－19）、土師器、瓦器が出土した。これらは耕作地を南北に区分する区画溝と考えられる。

ＳＸ－301　（図版６～９）

本遺構はＤ・Ｅ・Ｆ－11・12区で検出した土坑である。検出長南北約７ｍ、東西約16m、深さ約0.09mを測る。本遺構は調査区外にも広がるため全体の規模は不明である。埋土は灰白色砂であり、オリーブ色砂と黄褐色粘土ブロックが混じる。また面的に細砂と粗砂部分とに分けられ、大半は粗砂であるが遺構の東端は細砂である。粗砂には拳大の礫も若干含まれていた。
底面は畝状になっており、0.5～１m間隔で８条検出した。畝の方向は座標北に対して西に０～５°振る。遺物は土師器、瓦器、瓦質土器、須恵器が出土した。（図13－６・８、図版20－６・８、14～16）

これは粘土採掘土坑と考えられ、第６層にあたる粘土層を南北方向に向かって筋状に採掘していたものと推測される。また第３遺構面で検出した鋤溝と切合関係にあり、本遺構の方が新しい。検出土層から16世紀以降のものと考えられる。

ＳＤ－115～117　（図版７）

これらはＣ－11区で検出した３条の溝である。検出長はＳＤ－115では1.5m、ＳＤ－116は2.5m、ＳＤ－117は３ｍ、幅0.3～0.4m、深さ約0.23～0.26mを測る。埋土は灰白色砂に黄褐色粘土ブロックが混じる。これらの遺構は第１遺構面で検出したものであるが、Ｃ－11区付近は削平をうけていた。 遺構の埋土と採掘土坑の埋土は同じ粘土ブロックが混入した砂であり、採掘土坑とつながっていることを確認したことから粘土を採掘した後、東側の溝から水を流し込んでいたと考えら

れる。

3条の溝の埋土は前述したように黄色粘土ブロックを含む砂であるが、この埋土中に2層ほどの薄い粘質土層の堆積が交互に認められた。またＳＸ－301の上面は層厚0.04～0.05mの灰褐色粘質土が堆積していた。この層に薄い砂がかんでおり、ＳＸ－301が埋没後、灰褐色粘質土が堆積し、その後砂が再び堆積したと考えられる。またＳＸ－301は2段面南端の全域に及んでいる。試掘トレンチのため削られているが、一部分中洲状に掘り残されている。これを境に東西に分けて観察してみると、東側は南北に筋状に採掘され、方形状に掘り込まれているが西側端は東側に比べ、粗雑な掘り込み方という印象がある。

第4遺構面　（図9、図版10）

調査区2段面は第5層灰黄色粘土層上面で検出を行った。本遺構面では鋤溝、溝を検出した。1段面は第6層灰色粘土層上面で検出を行ったが、ＳＤ－401以外に遺構は検出できなかった。

ＳＤ－401　（図版11）

本遺構はＣ・Ｄ－6区で検出した溝である。検出長7.5m、幅約0.4m、深さ0.03mを測る。埋土はにぶい橙黄色土である。方向は座標北に対して東に80°振る。底部比高は最大で0.3mを測り、水は東から西方向に流れていたと考えられる。遺物は出土していない。これは耕作地に伴なう水路と考えられる。

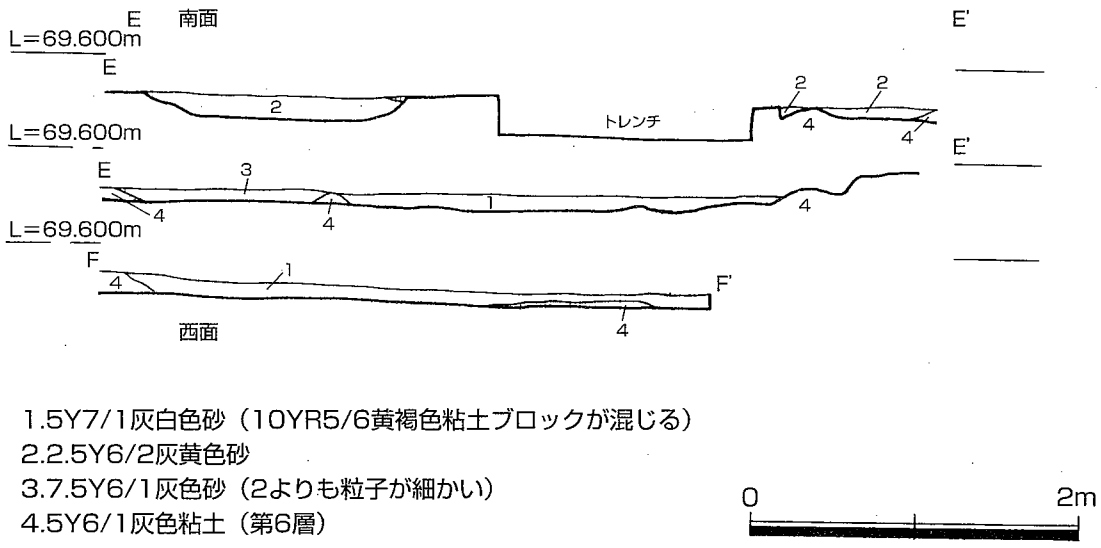


図12　ＳＸ－301　南面・西面 断面図

鋤溝群

調査区２段面で直行する鋤溝を検出した。検出長1.2～3.6m、幅0.08～0.4m、深さ0.03～0.05mを測る。南北方向の埋土は灰オリーブ色粘質土、東西方向は暗灰黄色粘質土である。前者の方向は座標北に対して西に10～15°振る。後者は西に120°振る。遺物は土師質土器、瓦器椀、瓦質土器が出土した。時期は15世紀後半と推定される。これらの鋤溝は一段低い調査区西側で検出した。

第５遺構面　（図10、図版10）

調査区２段面の中央付近（Ｅ－２～５、Ｆ－６～11区）から西方向へ0.1m落ち込む層を確認し、この層の下層第６層上面で遺構確認を行った。

ＳＫ－501～506

ＳＫ－501・502はＦ－６区、ＳＫ－503はＦ－７区、ＳＫ－504・505はＥ－９区、ＳＫ－506はＥ－10区でそれぞれ検出した土坑である。検出長南北0.3～１m、東西0.25～0.5m、深さ0.02～0.05mを測る。平面形状は不整形である。埋土は灰黄色砂質土である。遺物は出土していない。これらの土坑の性格は不明である。時期は15世紀後半と考えられる。

第６遺構面　（図11、図版12～19）

第７層上面で確認を行った。遺構面は東から西へ最大約0.3m傾斜している。また自然の落ち込みを数箇所で確認した。遺構面からは大溝、溝、土坑、自然流路の一部、落ち込みを検出した。

ＳＤ－601

本遺構はＥ－２区で検出した溝である。検出長3.45m、幅１m、深さ0.03mを測る。埋土は灰白色粘質土で底部で粗い砂が薄く堆積する。断面形状は浅い皿形を呈す。遺物はサヌカイト剥片が１点出土した。また底部から土坑を検出した。Ｐ－１は東西長0.5m、深さ0.06m、Ｐ－２は南北長0.43m、深さ0.03m、Ｐ－３は直径0.42m、深さ0.06mをそれぞれ測る。埋土は灰色粘質土である。

ＳＤ－603　（図版14～16）

本遺構はＧ－５･６区で検出した溝である。検出長約８m、幅約1.5m、深さ0.1mを測る。埋土は灰色粘土と褐色砂質土（第７層）がブロック状に堆積する。断面形状は浅い皿形を呈す。底部比高は北から南方向へ0.04mを測るが、底部はほぼ平坦である。方向は座標北に対して西へ10°振る。遺物は土師器、土師質土器、瓦器椀が出土した。

また本溝内から焼土を検出した。これらはＧ－６区で検出した焼土である（図版16）。ＳＤ－603の西側内外から大小43個以上を検出した。大きさは５cm～20cmを測る。溝内に36個、溝外に７個。塊は２～３群にまとまっている。焼土のなかには煤のついているものも含まれている。ただ炭化物は認められなかった。したがって、他の場所で火を用いた後、焼土の塊を投棄したと想像される。またこのような焼土は他区からは認められなかった。

ＳＤ－６０８　（図版１４・１５）

本遺構はＧ－３・４・５区で検出した溝である。検出長約９ｍ、幅約0.8ｍ、深さ0.07ｍを測る。埋土は灰色粘土と褐色砂質土（第７層）がブロック状に堆積する。断面形状は逆台形を呈す。底部比高は南から北方向へ0.03ｍを測る。方向は座標北から西へ10°振る。遺物は瓦器椀、須恵器が出土した。またＳＤ－603とＳＤ－608とは同質の埋土で近接していることから同一の溝であったと考えられる。

ＳＤ－６０９　（図版１２）

本遺構はＣ－４～８、Ｂ－８・９区で検出した溝である。検出長約25ｍ、幅2.5ｍ～2.8ｍ、深さ0.2ｍを測る。埋土は黄灰色粘土と褐色砂質土（第７層）がブロック状に堆積する。断面形状は浅い皿形を呈す。底部比高は南から北へ0.11ｍを測る。方向は座標北に対して西へ20°振る。遺物は土師器、瓦器椀、摩滅した有舌尖頭器（図版33－168）が出土した。

ＳＸ－６０１

本遺構はＦ－２区で検出した土坑である。埋土は灰白色砂質粘土である。遺物はサヌカイト剥片２点、瓦器が出土した。また本遺構内から土坑を検出した。Ｐ－４は直径0.34、深さ0.09ｍ、Ｐ－５は直径0.5ｍ、深さ0.06ｍ、Ｐ－６は直径0.37ｍ、深さ0.09ｍ、Ｐ－７は直径0.46ｍ、深さ0.08ｍ、Ｐ－８は検出長南北0.81ｍ・東西0.6ｍ、深さ0.16ｍをそれぞれ測る。埋土は灰白色砂質土である。Ｐ－８から土師器が出土した。

ＳＸ－６０８

本遺構はＢ－10区で検出した土坑である。検出長南北1.6ｍ・東西2.4ｍ、深さ0.07～0.15ｍを測る。埋土は黄灰色粘質土とにぶい黄褐色粘土（第７層）がブロック状に堆積する。遺物は土師器、サヌカイト剥片が出土した。

ＳＸ－６０９　（図版１３）

本遺構はＢ－10区で検出した土坑である。検出長南北1.6ｍ・東西2.4ｍ、深さ0.06～0.09ｍを測る。底部は東から西方向に傾斜する。埋土は灰色粘質土である。

遺構内外から土坑を３基検出した。Ｐ－９は直径0.23ｍ、深さ0.13ｍ、Ｐ－10は直径0.25ｍ、深さ0.07ｍ、Ｐ－11は直径0.39ｍ、深さ0.1ｍをそれぞれ測る。これらの埋土は灰白色砂質土である。遺物は土師質土器が出土した。ＳＸ－608・ＳＸ－609は埋土が異なっているが、切合関係は確認できなかった。

ＳＫ－６０１

本遺構はＨ－２区で検出した土坑である。検出長南北0.4ｍ、深さ0.24ｍを測る。埋土は灰色粘土である。遺物は出土していない。

ＳＫ－６０２

本遺構はＨ－２区で検出した土坑である。検出長南北0.35ｍ・東西0.92ｍ、深さ0.24ｍを測る。上層の埋土は灰色粘質土、下層は黄灰色砂である。遺物は出土していない。ＳＫ－601・602は切合関係にあり、ＳＫ－602が先行する。

落ち込み２

本遺構はＧ－８・９区で検出した落ち込みである。検出長南北16.3m・東西4.9m、深さ0.06～0.21mを測る。埋土は灰色粘土である。遺物は出土していない。

落ち込み３・自然流路　（図版18・19）

本遺構はＦ－10～12、Ｅ－11・12区で検出した。検出長南北約14m、東西約６m、深さ0.05～0.15mを測る。埋土は灰白色粘質土で約0.05m堆積する。遺物は瓦器椀片が出土した。

また灰白色粘質土下層から自然流路の一部を検出した。検出長南北約15m、深さ約1.2mを測るが、それ以上に深くなると考えられる。埋土は青灰色砂である。この流路は周囲の地形から北西方向に向かって流れていたと考えられる。遺物は出土していない。

自然木根（図版17）

地山面で自然木の根部分をＣ－３、Ｄ－７、Ｄ－10区で検出した。いずれも第７層上面の緩斜面に沿って検出した。埋土はＣ－３区青灰色粘土、他は灰白色粘質土である。

この自然木根は第６層からは検出していない。また調査区北端の側溝からも自然木根が出土することから調査区外にも広がっている。工具などによる切断面は確認できなかった。Ｄ－10区で検出した自然木根周辺からサヌカイト剥片が３点出土した。

4．出土遺物

遺構出土遺物（図13、図版20・22～24・26）

1はＳＤ－129出土の瓦器小皿である。復元口径8.8cm、器厚0.4cmを測る。外面全体にミガキ、内面にはヘラミガキを施す。底部は指圧痕の後ナデ調整である。

2・3はＳＤ－201出土である。2は陶器である。復元底部径4.4cm、器高0.8cm、器厚0.8cmを測る。3は須恵器坏である。復元口径15.0cm、器厚0.6cmを測る。内外面とも回転ナデ調整である。

4はＳＤ－219出土の青花碗である。復元口径15.0cm、器厚0.2cmを測る。

5はＳＤ－202出土の瀬戸・美濃系の瓶口縁部である。口径6.8cm、器厚0.6cmを測る。

6～8はＳＸ－301出土である。6は瓦質羽釜である。復元口径19.8cm、器厚0.6cmを測る。口縁部はやや内傾し、外面は3条の沈線がめぐる。口縁端部は平坦である。内外面は横ナデ調整である。7は瓦質鉢である。復元口径25.6cm、器厚1.2cmを測る。内外面はナデ調整である。全体的に煤が付着する。8は瓦質羽釜口縁部である。復元口径28.8cm、器厚13.0cmを測る。口縁部はやや内傾し、外面に段が3段あり、内面はハケメ調整である。口縁端部は平坦である。

9はＳＤ－608出土の須恵器蓋である。復元口径11.6cm、器厚0.4cmを測る。内外面は回転ナデ調整である。

10は落ち込み3出土の土師器坏である。復元口径12.2cm、器厚0.6cmを測る。内外面は横ナデ調整である。

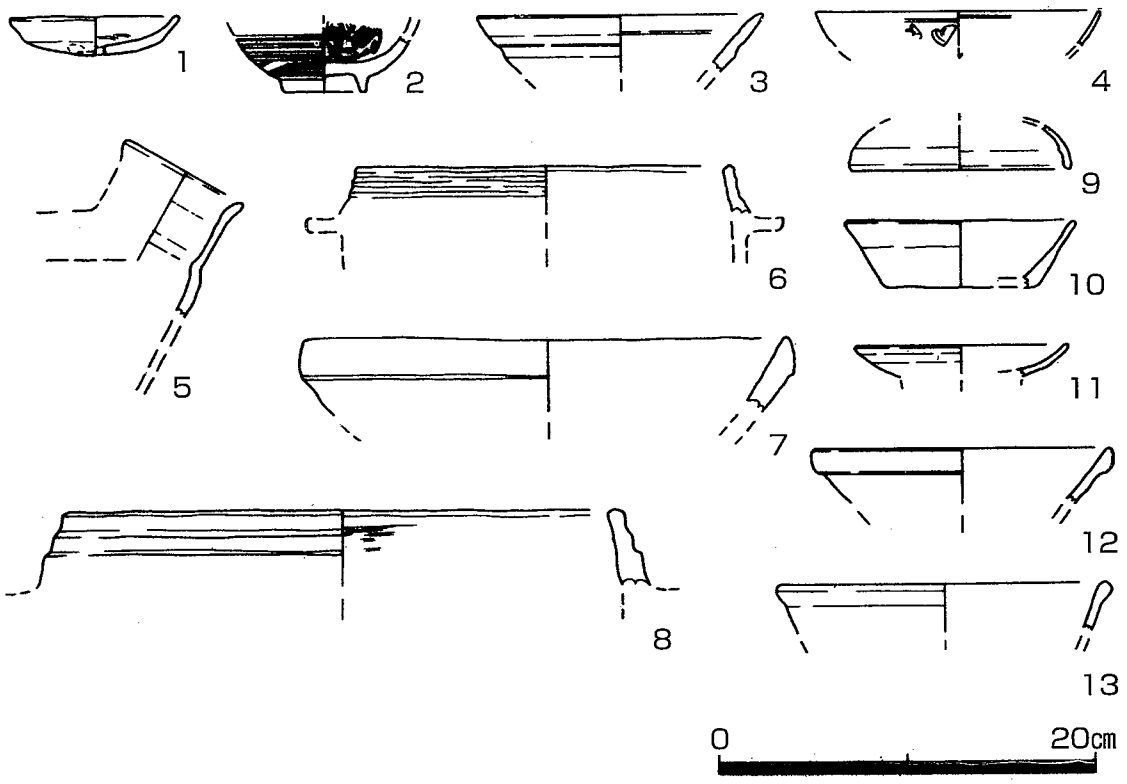


図13　遺構出土遺物

11は東側側溝出土の白磁皿である。復元口径11.2cm、器厚0.3cmを測る。

12は試掘トレンチ３出土の白磁碗である。復元口径15.6cm、器厚0.4cmを測る。

13はカクラン出土の青磁碗である。復元口径17.0cm、器厚0.4cmを測る。

14～16はＳＸ－301出土である。14は瓦器小皿である。15は土師質甕の口縁部である。摩滅が激しい。16は瓦質鉢である。

17はＳＤ－201出土の須恵質甕である。

18はＳＤ－201出土の瀬戸・美濃系の茶碗である。7.5Y7/2灰白色の釉を施す。

19はＳＤ－302出土の青花皿である。内面には花文を施す。

第２層出土遺物（図14、図版21・22・24）

20は白磁皿である。復元底部径9.4cm、器高0.8cm、器厚0.3cmを測る。

21は青花皿である。復元底部径8.2cm、器高0.6cm、器厚0.4cmを測る。

22は白磁碗である。復元底部径7.2cm、器高0.5cm、器厚0.4cmを測る。

23・24は青磁である。54は碗である。復元口径14.0cm、器厚0.6cmを測る。24は皿である。復元底部8.6cm、器高0.6cm、器厚0.4cmを測る。

25は土師器椀高台部である。26は青花皿である。

第３層出土遺物（図14、図版22・23）

27は青磁碗である。復元口径11.6cm、器厚0.4cmを測る。外面に線描きの蓮弁文を施す。

28～33は輸入磁器である。28～30・32・33は染付碗である。28は復元口径9.8cm、器厚0.2cmを測る。29は復元口径13.4cm、器厚0.2cmを測る。30は復元口径11.6cm、器厚0.3cmを測る。32は復元底部径7.6cm、器高0.6cm、器厚0.3cmを測る。33は外面に花文を施す。31は皿である。復元底部径10.2cm、器高0.5cm、器厚0.4cmを測る。

34・35は擂鉢である。34は土師質である。復元口径19.4cm、器厚2.0cmを測る。内外面ともナデ調整である。胎土は0.1cm程の砂粒を多く含む。35は須恵質である。復元口径28.4cm、器厚0.6cmを測る。内外面とも強いナデ調整である。口縁部は外傾し、口縁端部は上方に拡張する。

第４層出土遺物（図14、図版24・25）

36は土師器小皿である。復元口径8.8cm、器厚0.6cmを測る。内外面ともナデ調整。

37・38は陶器である。37は復元口径15.8cm、器厚0.7cmを測る。38は復元口径17.0cm、器厚0.4cmを測る。内外面に釉を施す。

39は土師質鉢である。復元口径27.4cm、器厚1.0cmを測る。外面はケズリ調整。

40は土師質擂鉢である。復元口径38.6cm、器厚0.8cmを測る。口縁部外面は肥厚する。体部はケズリ調整で口縁部下の横ナデとの境は若干の稜が認められる。外面ケズリ調整である。

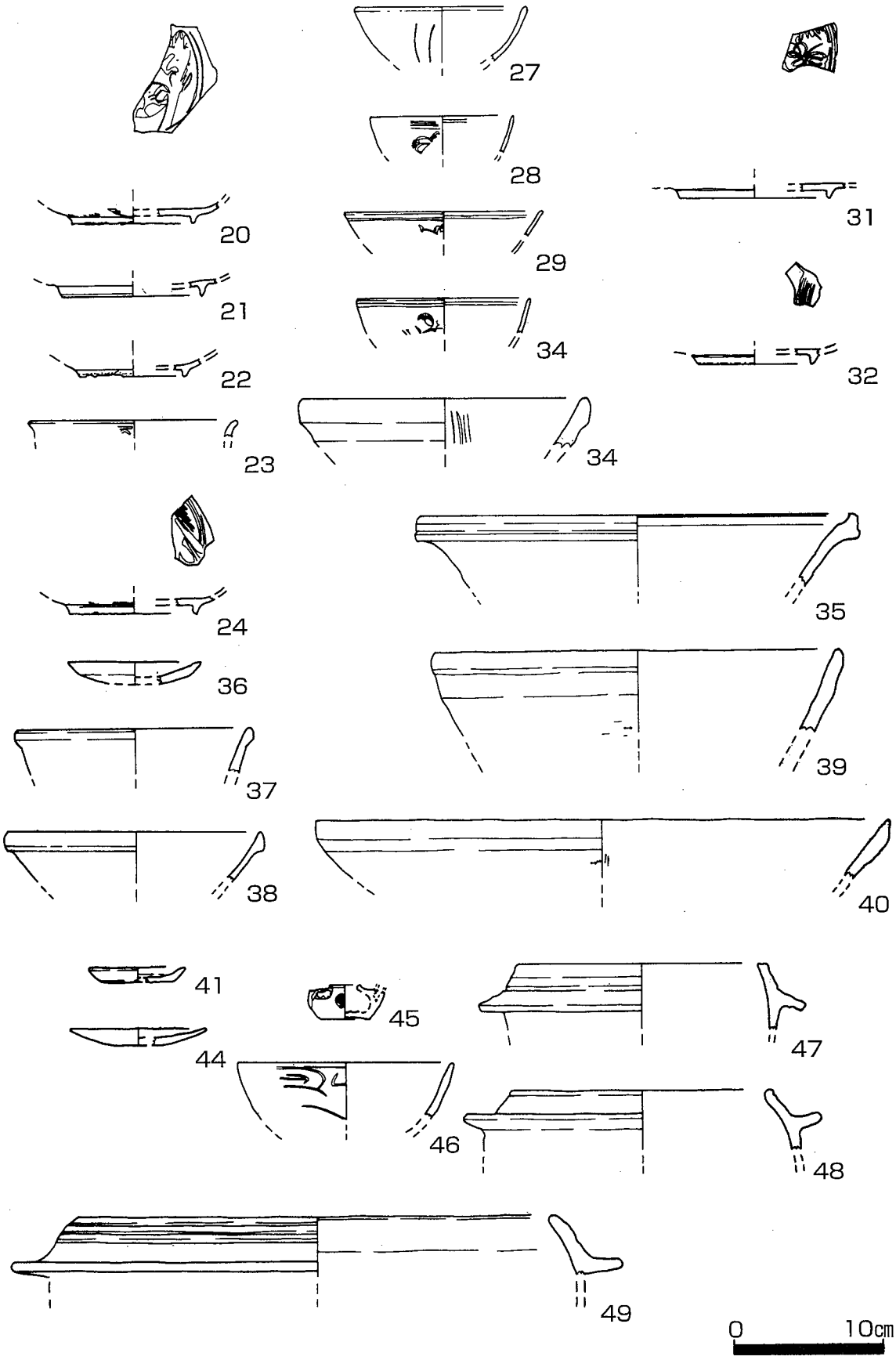


図14　第2～5層出土遺物

第５層出土遺物（図14・図版24～26）

41～43は土師器小皿である。41は復元口径6.4cm、器厚0.4cmを測る。底部には指圧痕が残る。

44は須恵質片口鉢である。

45は瀬戸・美濃系の水滴である。口径2.0cm、底部径3.4cmを測る。

46は青磁碗である。外面に雷文を施す。

47～50は羽釜である。47は土師質である。復元口径16.8cm、器厚0.6cmを測る。口縁部外面には段が３段ある。口縁端部は平坦である。煤が全体的に付着した痕跡がある。48は土師質である。復元口径16.6cm、器厚0.8cmを測る。口縁部は内傾する。口縁端部は丸く折り曲げている。胎土は0.01～0.1cmの砂粒を少し含む。49は瓦質である。口縁部外面は３条の沈線がめぐる。口縁部は内弯し、口縁端部は丸くおさめている。摩滅が激しい。復元口径32.0cm、器厚1.0cmを測る。51は瀬戸・美濃系の天目茶碗である。カクランのものが混入したものである。

52は土師器皿である。復元口径9.2cm、底部器厚0.6cm、器厚0.3cmを測る。

第６層出土遺物（図15・16図版24～30）

53～62は弥生土器である。53～55は弥生土器底部である。53は復元底部直径4.2cm、底部器厚1.3cmを測る。54は底部直径4.5cm、底部器厚1.2cmを測る。55は復元底部直径7.0cm、底部器厚10.0cmを測り、胎土は粗く0.01～0.1cmの砂粒を多く含む。

63は土師器坏である。復元口径11.2cm、器厚0.4cmを測る。

64、175は土師器高坏である。64は残存高3.6cm、器厚0.8cmを測り、摩滅が激しい。

65～76は土師器小皿である。65は復元口径7.2cm、器厚0.4cmを測る。66は復元口径7.2cm、器厚0.4cmを測る。67は復元口径7.0cm、器厚0.4cmを測る。胎土は0.1～0.4cmの砂粒を含む。68は復元口径7.6cm、器厚0.4cm、底部器厚0.5cmを測る。底部に指圧痕が残る。69は復元口径7.6cm、器厚0.4cmを測る。70は復元口径9.2cm、器厚0.4cmを測る。71は復元口径7.6cm、器厚0.4cmを測る。72は復元口径7.5cm、器厚0.4cmを測る。73は復元口径8.6cm、器厚0.5cm、底部器厚0.4cmを測る。

77～86は瓦器小皿である。77は復元口径7.6cm、器厚0.6cmを測る。胎土は0.1cmの砂粒を少量含む。底部には指圧痕が残る。78は復元口径7.4cm、器厚0.3cmを測る。79は復元口径7.2cm、器厚0.6cmを測る。80は復元口径7.4cm、器厚0.4cmを測る。81は復元口径7.6cm、器厚0.4cmを測る。外面底部に指圧痕が残る。82は復元口径8.0cm、器厚0.4cmを測る。83は復元口径7.8cm、器厚0.4cmを測る。胎土は0.1～0.3cmの砂粒を含む。84は復元口径8.4cm、器厚0.4cmを測る。86は復元口径10.4cm、器厚0.4cmを測る。胎土は0.1cm前後の砂粒を少量含む。

87は土師器皿である。 復元口径12.0cm、器厚0.4cmを測る。

88～90瓦器椀である。88は復元口径10.4cm、器厚0.3cmを測る。外面に指圧痕が残る。89は復元口径18.2cm、器厚0.6cmを測る。90は復元口径15.2cm、器厚0.4cmを測る。摩滅が激しい。

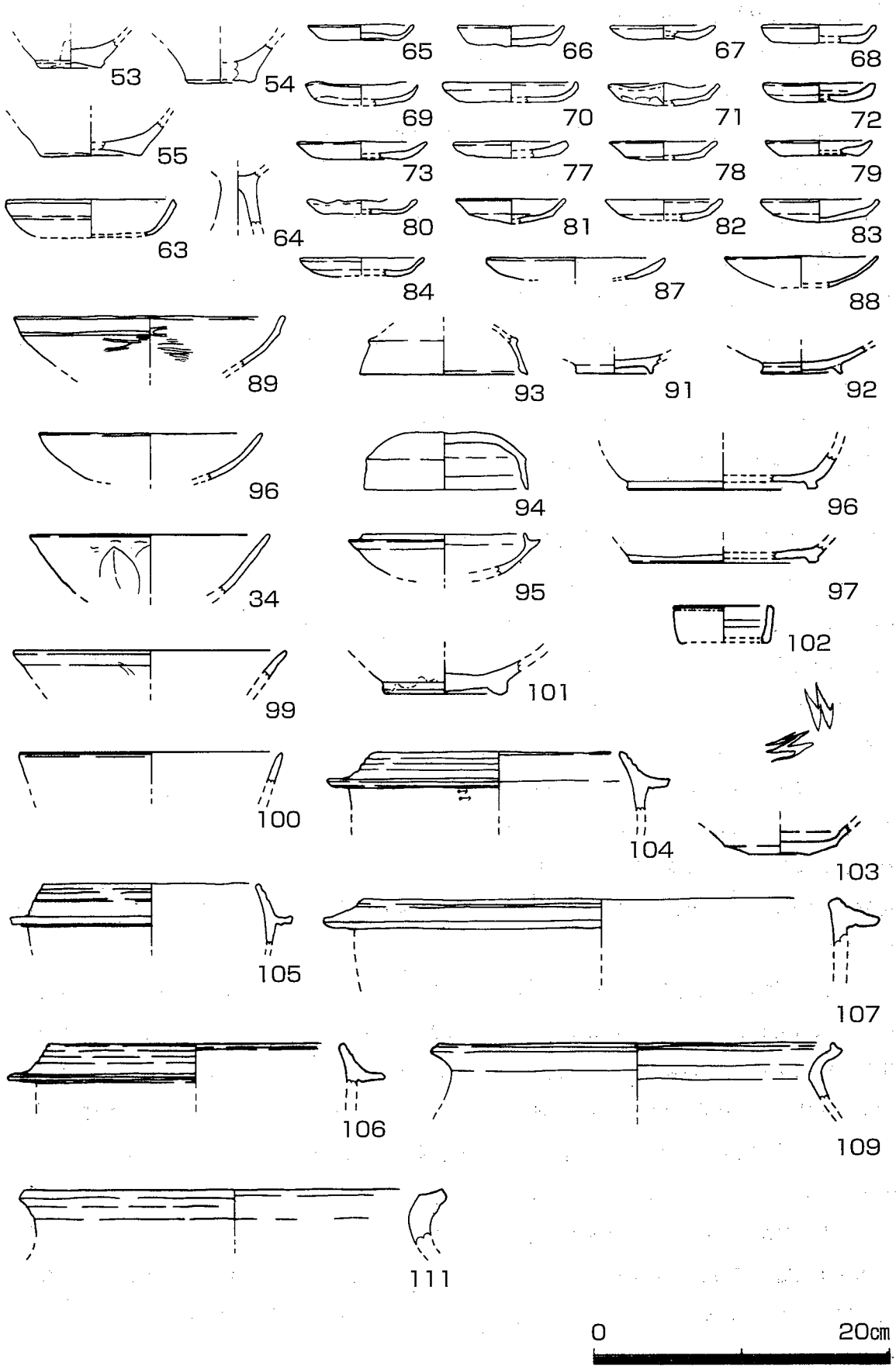

53
54
65
66
67
68
69
70
71
72
55
73
77
78
79
63
64
80
81
82
83
84
87
88
89
93
91
92
96
94
96
34
95
97
102
99
101
100
104
103
105
107
106
109
111
0
20cm

図15　第6層出土遺物

91・92は瓦器椀底部である。91は復元底部5.2cm、底部高0.5cm、底部器厚0.4cmを測る。摩滅しており、内面のヘラミガキは不明瞭である。92は底部径5.8cm、高台高0.2cm、器厚0.5cmを測る。高台は貼付高台である。

93・94は須恵器蓋である。93は復元口径11.4cm、器厚0.4cmを測る。外面は回転ナデ調整。胎土は0.1cmの砂粒を少量含む。94は復元口径11.0cm、器厚最大1.0cm、最小0.6cmを測る。胎土は0.1cmの砂粒を少し含む。

95は須恵器坏である。 復元口径11.0cm、器厚0.4cmを測る。

96・97は須恵器坏底部である。96は復元底部径13.0cm、器高0.5cm、器厚0.4cmを測る。内外面とも回転ナデ調整である。97は復元口径12.8cm、器厚0.5cm、高台高0.4cmを測る。削り出し高台である。

98は青磁碗口縁部である。復元口径16.2cm、器厚0.4cmを測る。外面に蓮弁文を施す。

99・100は陶器である。99は口縁部である。復元口径18.4cm、器厚0.4cmを測る。100は復元口径17.8cm、器厚0.5cmを測る。内外面に施釉を施す。

101・102は白磁である。101は碗である。復元底部径7.8cm、器高0.2cm、底部器厚1.2cmを測る。102は復元口径6.6cm、器厚0.5cmを測る。

103は青磁皿底部である。復元底部4.2cm、底部器厚0.8cmを測る。内面に文様を施す。

104～107は羽釜である。104～106・108は瓦質、107は土師質である。104は口縁部が内傾する。口縁部外面に3条の沈線がめぐる。復元口径17.0cm、鍔径23.4cm、器厚7.0cmを測る。胎土は0.5～1.0cmの砂粒を少量含む。105は復元口径14.6cm、器厚0.6cmを測る。口縁部外面には3条の沈線がめぐる。口縁部はやや内弯し、端部は丸くおさめている。106は復元口径20cm、器厚0.6cmを測る。胎土は0.4cm程度の砂粒を含む。口縁部外面には3条の沈線がめぐる。口縁部は短く、若干内弯する。107は復元鍔径34.0cm、器厚1.0cmを測る。胎土は0.1～0.2cmの砂粒を含む。

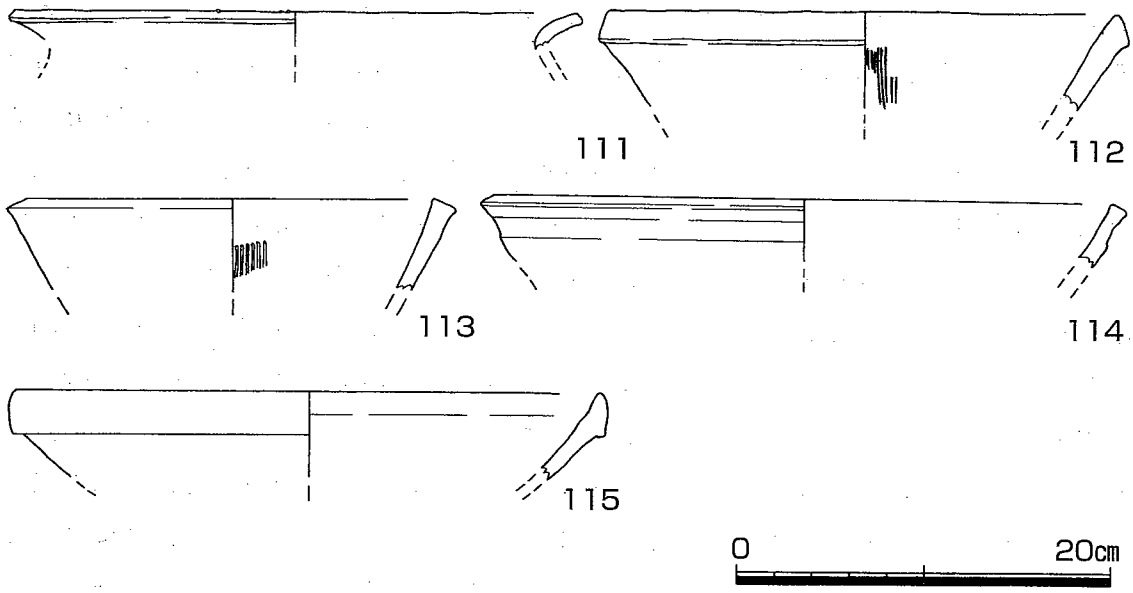


図16　第6層出土遺物

109・111は甕である。109・111は土師質である。109は復元口径26.8cm、器厚0.6cmを測る。口縁部は大きく外反し、口縁端部は上方に拡張する。胎土は0.1cm程度の砂粒を含む。111は土師質甕口縁部である。復元口径30.0cm、器厚0.8cmを測る。口縁部は大きく外反する。胎土は0.1～0.5cmの砂粒を多く含む。110は瓦質である。復元口径28.4cm、器厚1.4cmを測る。

112～115擂鉢口縁部である。112は瓦質である。復元口径27.2cm、器厚1.0cmを測る。口縁部は外傾し、口縁端部は肥厚する。胎土はやや粗く0.05～0.1cmの砂粒を含む。113は陶質である。復元口径21.8cm、外径24.0cm、器厚0.8cmを測る。口縁端部を平坦に仕上げている。胎土は0.1cm程度の砂粒を含む。114は須恵質である。復元口径33.0cm、器厚1.0cmを測る。口縁端部は平坦である。内外面ともナデ調整である。115は須恵質である。口縁端部は「T」字状に拡張する。 復元口径31.0cm、器厚0.8cmを測る。胎土は0.1cmの砂粒を多く含む。

116～131は縄文土器である。118は外面に貝殻条痕文、122は口縁部外面に２条の沈線を施す。

132は陶器の甕である。外面に叩き目を施す。

133は土師器高坏の坏底部である。135・136・128は瓦器椀である。

137～140は土師器である。137は外面に煤が付着する。139・140は椀である。

141・142は甕口縁部である。141は瓦質である。142は土師質である。

143は瀬戸・美濃系の茶碗である。外面に10YR8/2灰白色の釉を施す。

第６層出土縄文土器（図17・図版31・32）

144～159は深鉢の口縁部である。

144は口縁部が逆く字（二重口縁）に屈曲する波状口縁である。口縁端部は丸くおさめている。波頂部には円形の突起を施す。口縁部外面と平行に沈線を引き、沈線内に刺突文を施す。口縁部の屈折の上下に渦巻文状のものを中心に同心円文を施す。その下には口縁と同様の沈線が引かれ、沈線内には刺突文を施す。内外面とも条痕調整である。胎土は石英、長石、雲母を含む。色調は黒褐色である。器厚0.6cmを測る。145は口縁部の上端部が平坦である。内外面とも貝殻条痕調整である。外面は横方向に調整した後やや右斜め方向にも条痕調整を行っている。内面はその後ナデ調整を行っている。胎土は雲母、石英、長石を含む。器厚0.7cm、色調は黒褐色土である。146は口縁端部が平坦である。外方にひらく頸部の上にやや外方にのびる口縁をもつ。口縁部外面には１条の沈線内に刺突文を施す。内外面とも貝殻条痕調整の後ナデ調整を行っている。器厚0.7cm、色調は灰褐色土である。胎土は長石、石英である。147は１条の細い沈線を施す。器厚は0.7cm、色調は灰茶褐色土である。胎土は長石、石英を含む。148は口縁端部を丸くおさめる。外面は２条の沈線、内面は１条の沈線を施す。内面はナデ調整である。胎土は長石、石英を含む。器厚0.8cmを測る。外面は灰黒色土、内面は灰白色土である。149は口縁部内面に爪形文を施す。胎土は長石、石英を含む。150は口縁部内面に沈線を施す。151は口縁上端部を丸くおさめており、口縁内面には沈線を一条施す。胎土は石英、長石を含む。色調は茶褐色である。152は口縁部内面に爪形文、沈線を施す。153は口縁上端部が平坦である。内外面とも貝殻条痕調整である。内面はその後ナデ

デ調整を行っている。胎土は角閃石、長石、石英を含む。器厚0.7cm、外面は灰褐色土、内面は灰白色土である。154は口縁部がやや外反する。端部は丸くおさめている。内外面ともナデ調整を行っている。胎土は長石、石英、角閃石である。器厚は0.8cmである。外面の色調は灰褐色土、内面は灰黒色土である。155は１条の沈線を施す。内外面とも貝殻条痕調整であり、その後ナデ調整を行っている。器厚0.6cmを測る。外面は灰褐色土、内面は黒灰色土である。胎土は石英、長石を含む。156は口縁部が二重口縁ぎみの波状口縁であり、やや内弯する。小さく立ち上がる口縁部に１条の沈線を施す。内外面ともナデ調整である。胎土は石英、長石を含む。色調は黒灰色土である。器厚0.7cmを測る。157は口縁部と胴部の境がない深鉢である。口縁部は若干外傾している。口縁端部は外方にのびる。内外面ともケズリ調整の後、ナデ調整を行っている。色調は茶褐色である。胎土は石英、長石、角閃石を含む。器厚0.5cmを測る。158は口縁部と胴部の境がない深鉢である。口縁部は真っすぐのび、口縁端部は上端部が平坦である。内外面とも条痕調整を行っている。胎土は石英、長石を含む。外面は黒褐色、内面は灰白色である。159は口縁部と胴部の境のない深鉢である。口縁部はやや外反する。口縁上端部は平坦である。内外面とも条痕調整の後ナデ調整を行っている。胎土は石英、長石、角閃石を含む。色調は褐灰色である。

160～164は深鉢の体部である。

160は粘土紐の突帯をやや弧状につけている。その上下に沈線を引いている。縦位の沈線で区画されたＬＲの縄文を施す。縄文を施していない部分は丁寧にスリ消している。内面はナデ調整である。胎土は石英、長石を含む。色調は黒灰色である。161は口縁部と胴部の境のない深鉢で若干外反する。内外面とも条痕調整である。胎土は石英、長石を含む。外面は灰褐色、内面は灰黒色である。162は体部がやや内弯し、のちに若干外反ぎみに立ち上がる。外面には一条の沈線と弧線が２つ確認できる。内外面ともナデ調整である。胎土は石英、長石、雲母を含む。外面は茶灰色、内面は灰黒色である。163は内外面とも条痕調整の後ナデ調整を行っている。胎土は石英、長石、角閃石を含む。色調は黒褐色である。164は口縁部と胴部の境のない深鉢の体部の一部である。体部は若干外方にのびるようである。内外面とも条痕調整である。胎土は石英、長石、角閃石を含む。外面は灰褐色、内面は灰黒色である。

165は晩期の浅鉢である。外面に３条の沈線があり、そのうちの１条に竹管文を施す。また突帯が１帯めぐる。外面はミガキ調整、内面はナデ調整である。器厚0.6cmである。外面は黒灰色土、内面は灰褐色土である。胎土は石英を含む。

166は器種不明土器である。色調は茶褐色であり、胎土は長石、石英を含む。

167は突帯文には刻み目を施す。

石器

168はＳＤ－609、169～171は第６層から出土したサヌカイト製の石器である（図版33）。168は長さ6.0cm、幅3.2cm、厚さ0.9cmを測る。中央に稜をつくり、片側のみの調整である。

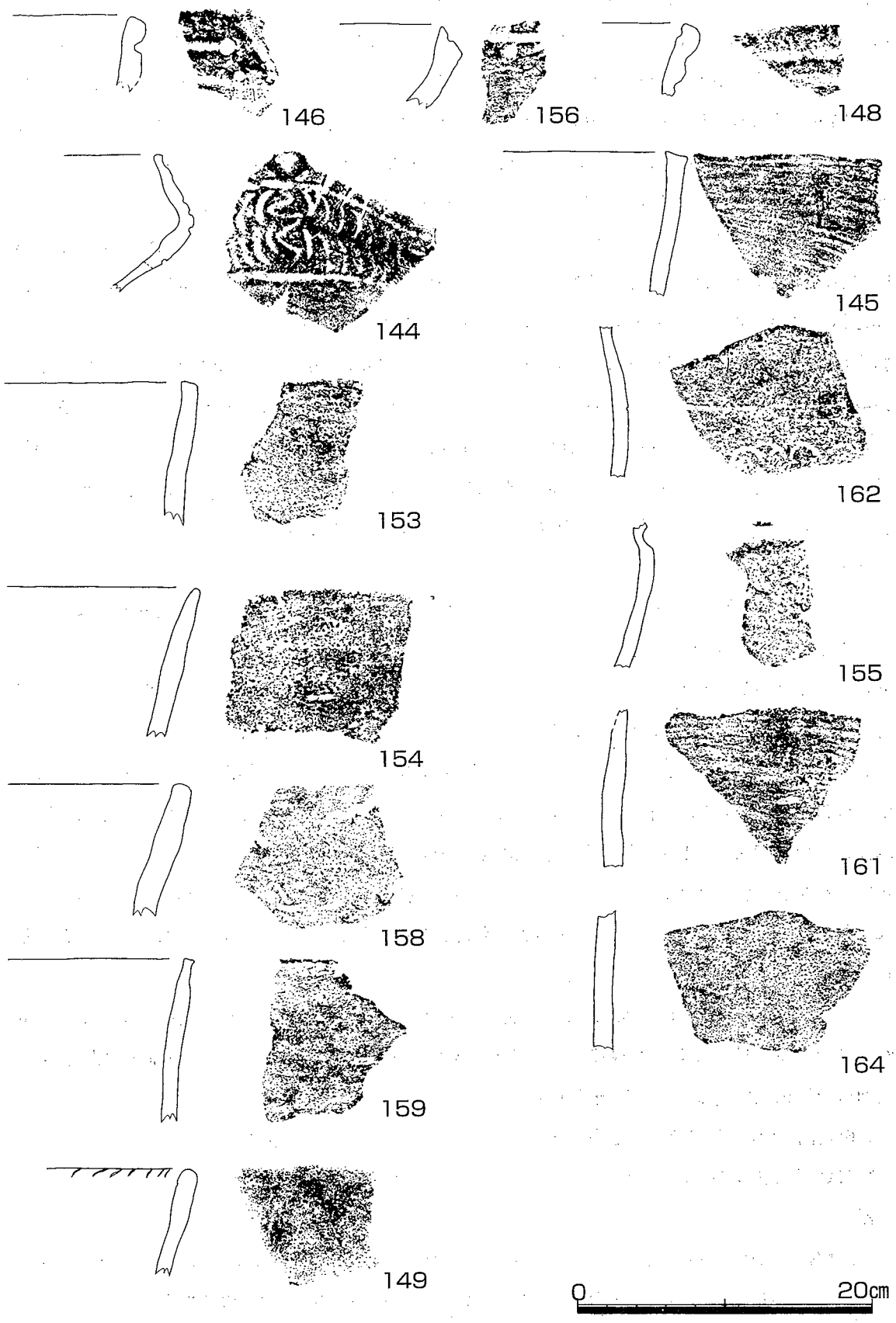


図17　縄文土器

169は長さ7.1cm、幅4.6cm、厚さ0.7cmを測る。片側のみの調整である。170は長さ9.4cm、幅4.1cm、最大厚1.3cmを測る。片側両面を調整し、刃部をつくる。171は長さ6.7cm、幅2.4cm、厚さ0.6cmを測る。サヌカイト製の有舌尖頭器と考えられる。摩滅が激しい。

172～173は第6層、174は試掘トレンチ（第6層）から出土したサヌカイト製の石鏃である（図版34）。172は凹基無茎式である。長さは2.2cm、先端部が欠けている。173は凹基無茎式であるが、凹基片側がつくりだしていないため、未製品と考えられる。長さ3.3cmを測る。174は基部分のない未製品である。長さ2.9cmである。

第4章　まとめ

今回の調査とその周辺での既往の調査の結果をもとにまとめてみたい。

縄文時代

第6層中から中世遺物とともに縄文時代後期、晩期の土器片やサヌカイト製の石鏃および剥片が出土した。しかし、縄文時代の遺構は検出されなかった。

また第7層上面で検出した自然木根の埋土からサヌカイト剥片が出土した。自然木の根が第6層で検出していないことから削平以前の堆積層より根が巻き込んだものと推測され、縄文時代の遺物包含層が存在していた可能性がある。

弥生時代～古墳時代

本調査区から遺構および遺物包含層は確認できなかった。第6層からは弥生後期の土器が数点出土した。また本調査地北方向に所在する森B遺跡からも弥生中期後半の土器が確認されている。平成3年度（財）大阪府埋蔵文化財協会の調査から古墳時代の竪穴住居跡3棟が確認されている。これらは本調査地から西へ約200mの位置であり、集落はやや緩やかな土地に形成されていたと考えられる。

飛鳥時代～平安時代

本調査区からは遺構および遺物包含層は確認できなかった。

森B遺跡からは奈良時代の段状遺構が確認されている。周辺地域で耕地開発がはじまったことを示す資料である。しかしこの開発がどのくらいの規模で行われていたかについては不明である。

鎌倉・室町時代～近世

本調査地から遺構および遺物包含層が確認できるのはこの時期からである。

第6遺構面からは自然木根を検出した。これらから切断面は確認できなかったが、おそらく伐採を行い、土地を削平していたと推測される。またＳＤ－603・608・609などの遺構はこの削平をうけた痕跡であると考えられる。ＳＤ－609についてはその痕跡から幅3ｍを越える潅漑用水路であったと推測される。現在でも調査地東側の丘陵地には浅い谷を堰止めて造られたため池が数多く存在しており、ＳＤ－609も周辺のため池から水を引いていたと考えられる。

また平成5年度の調査区からも排水施設と考えられる溝3条が検出されており、これらは北西方向に走っており、ＳＤ－603・608・609との併存については不明であるがその方向性はほぼ一致する。

鎌倉時代には大規模な開発が積極的に行われていたと考えられる。

遺物包含層については第６層は粘質土層であり、上下２層に分けることができる。出土遺物は主に土師器、瓦器である。また縄文土器片、サヌカイト剥片もこの層から出土する。出土状況の特徴として縄文土器片やサヌカイト剥片は上下２層のうち、下層よりも上層からのほうが多く出土する。縄文土器片に関しては下層からの出土はほとんどみられない。このような特徴から当初は整地土層と考えた。しかし、整地土層にしてはブロック土などの混入がみられないことから、自然堆積層の可能性も考えられる。この土地は傾斜地であることから上方より崩れた土砂が上層より崩れたため、調査区付近は逆転現象の堆積が生じたと考えられる。第６層出土遺物の傾向としては第６層下層より第６層上層のほうが縄文土器片、サヌカイト剥片が多く出土した。

ＳＸ－301は粘土採掘土坑と考えられる。採掘した粘土は瓦などの製品をつくる原料として用いられたと考えられるが、周辺で窯は確認されていない。貝塚市内では貝塚寺内町周辺から粘土採掘土坑を数多く発見している。またＳＸ－301の規模は調査区外につづいており不明であるが、かなり広範囲に広がっていたものと推測される。この遺構の前後の時期は耕作地として利用されているため、作業は農閑期に行われたと推測される。

第１遺構面～第４遺構面にかけて鋤溝群を検出した。各遺構面の鋤溝はほぼ南北方向に向かっていることが確認された。また耕作地を区画する溝も各遺構面で若干位置が変わるものの方向は変化していないことから土地の区画は変わっていない。

このことから近代に至るまで中世の土地区画を踏襲していた。調査地が所在する木島地区は山間部であるため、地形の制約を大きくうけていたことが考えられる。

また森Ｂ遺跡、東山丘陵遺跡でも耕作地跡やそれに伴う溝や小規模の池が確認されており、本調査地を含めた周辺一帯は耕作地が広がっていたと推測される。

本調査終了後、本調査地より直線距離にして北西へ約300ｍの地点で立会調査を行った。土層の時期が対応するかについては不明であるが、本調査地の基本層序とほぼ同様の堆積であった。このことから集落の位置は現在の水間鉄道よりも西側つまり三ツ松集落あたりに営まれていたと推測される。また同様の堆積が周辺一帯に広がるかについては今後の調査に委ねたい。

参考文献

「三ヶ山西遺跡」　(1991年)（財）大阪府埋蔵文化財協会
「三ヶ山西遺跡Ⅱ」　(1994年)（財）大阪府埋蔵文化財協会
「森Ａ・Ｂ遺跡発掘調査概要・Ⅰ」　(1984年) 大阪府教育委員会
「森Ｂ遺跡発掘調査概要・Ⅱ」　(1985年) 大阪府教育委員会
「貝塚市東山丘陵遺跡群」　(1998年)（財）大阪府文化財調査研究センター

報　告　書　抄　録

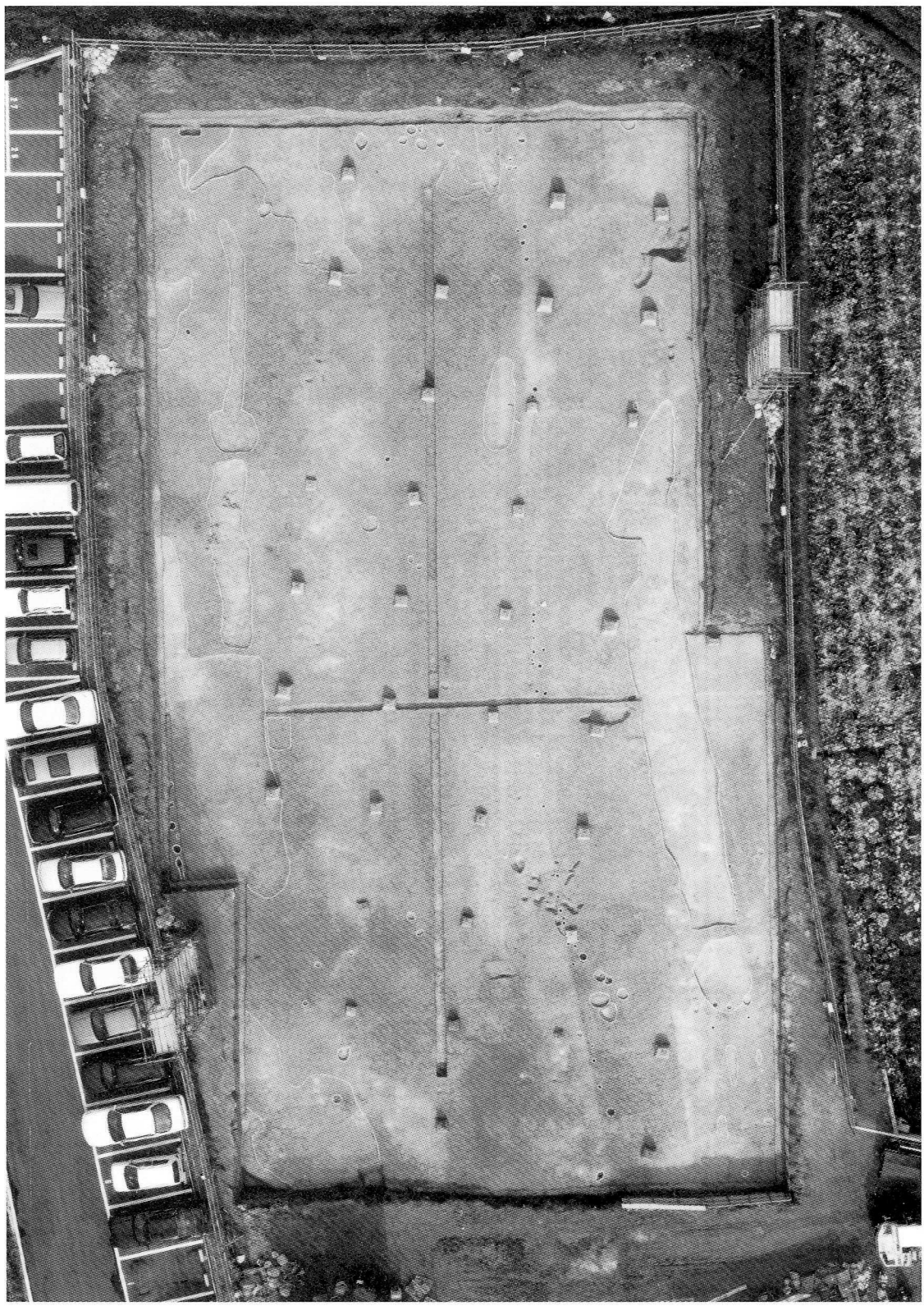
ふりがな	みけやまにしいせき　はっくつちょうさがいよう
書名	三ヶ山西遺跡発掘調査概要
副書名	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	木嶋崇晴
編集機関名	貝塚市教育委員会
所在地	〒579－8585　大阪府貝塚市畠中1－17－1
発行年月日	1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
三ヶ山西遺跡	貝塚市三ヶ山	27208	69	34° 24′	135° 23′	1997年 9月16日～ 1998年 2月16日	1450㎡	三ツ松 受水場 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三ヶ山西遺跡	散布地	中世	鋤溝 溝	縄文土器 土師器 須恵器 瓦器	

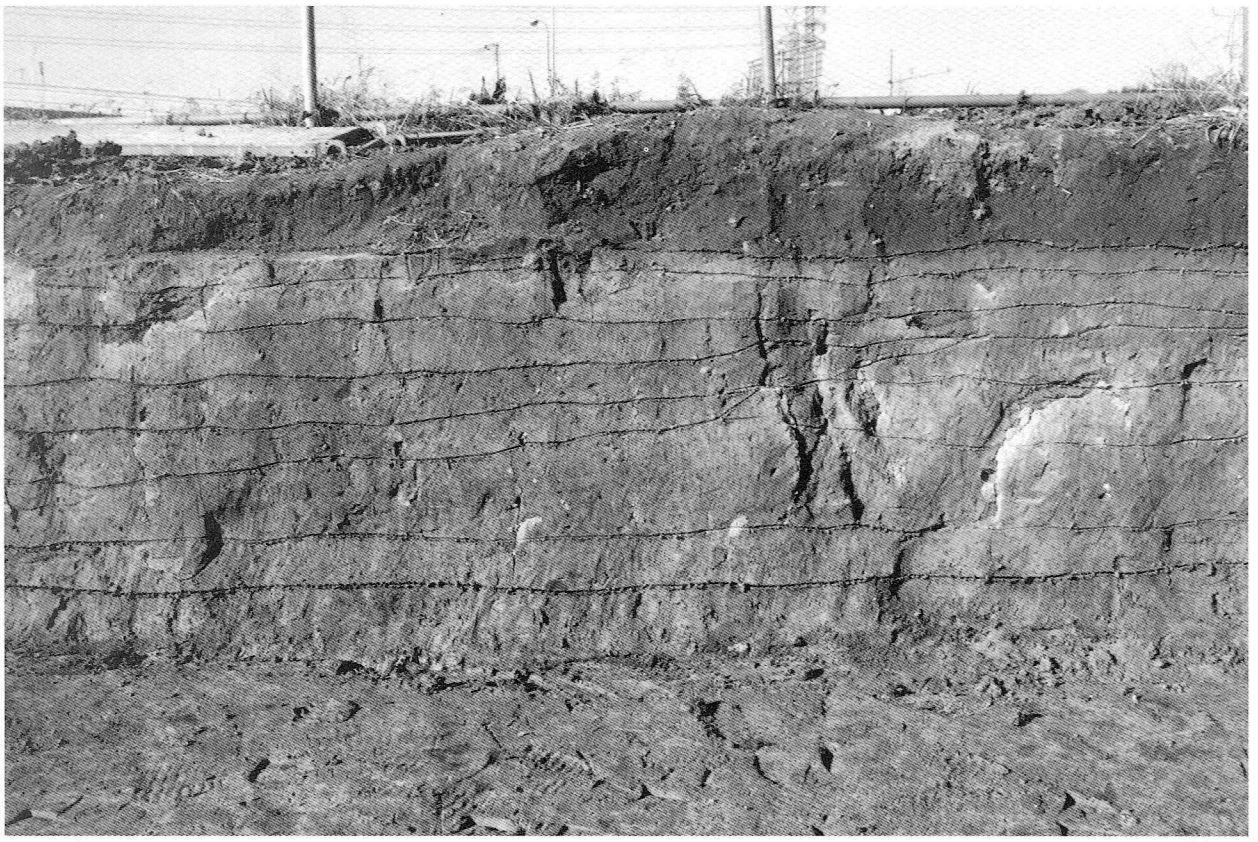
図　　版

図版1　検出遺構



調査区全景

図版2　検出遺構



1.北壁（F－2区）　南より

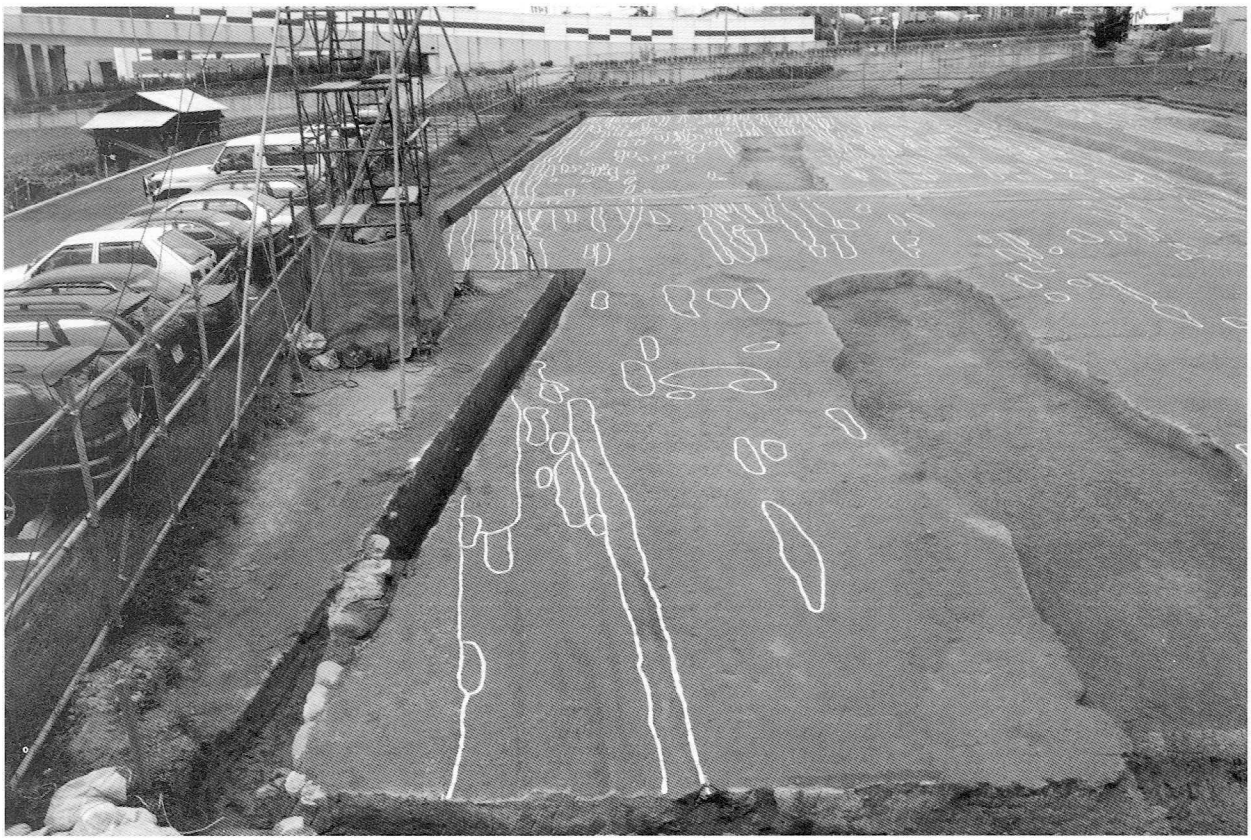
2.同上（E－2区）　南より

図版3　検出遺構

1.第1遺構面　　南より

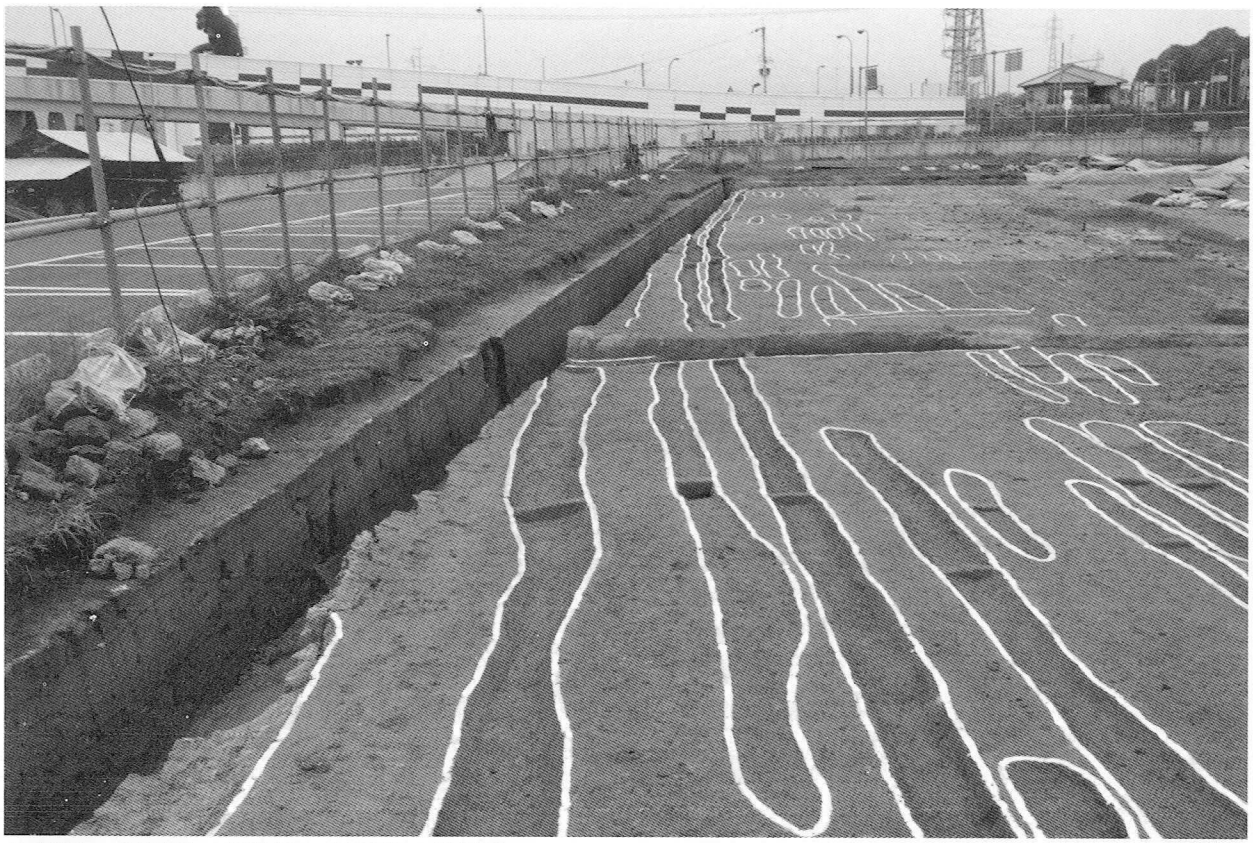
2.第2遺構面　　南より

図版4　検出遺構



1.SD－203・204・221・236　　南より

2.SD－243～246　　東より

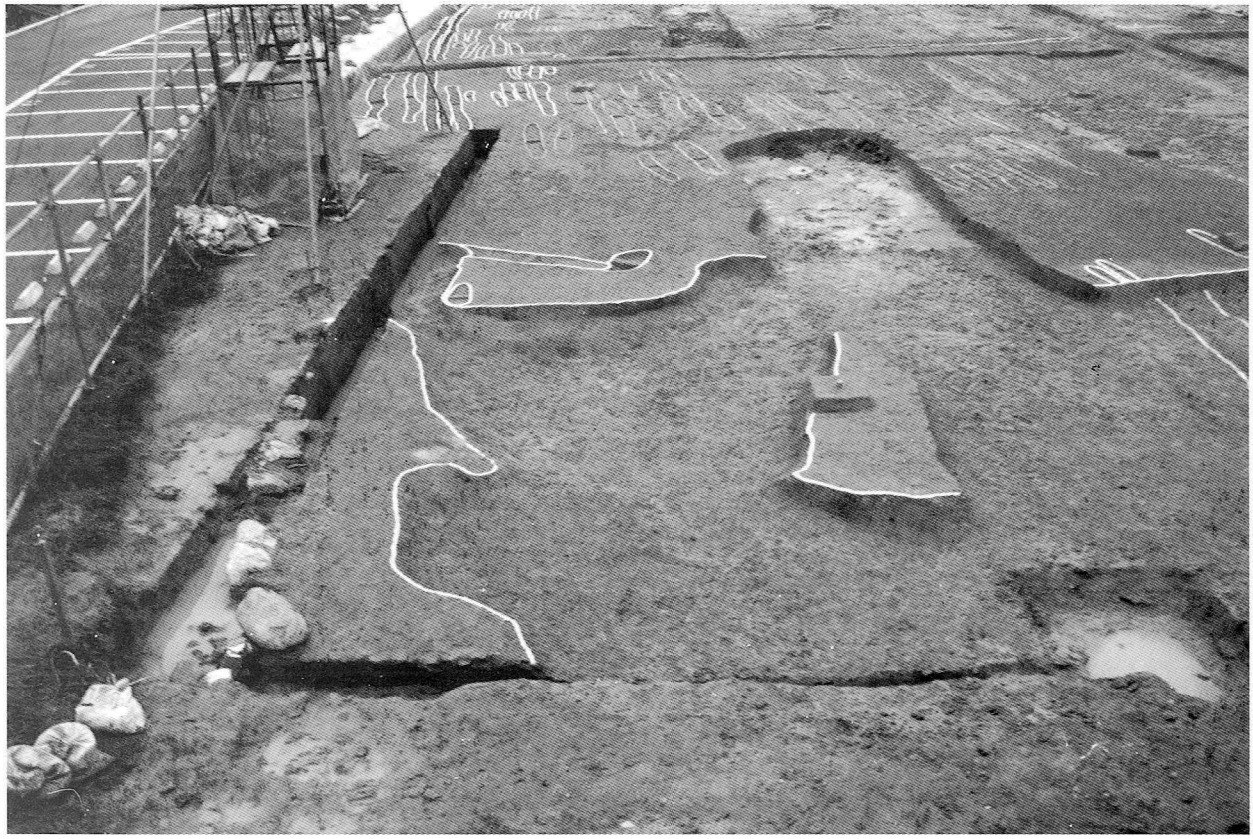


1.SD−302・303・321〜326　　南より

2.SD−301・309・316〜318　　東より

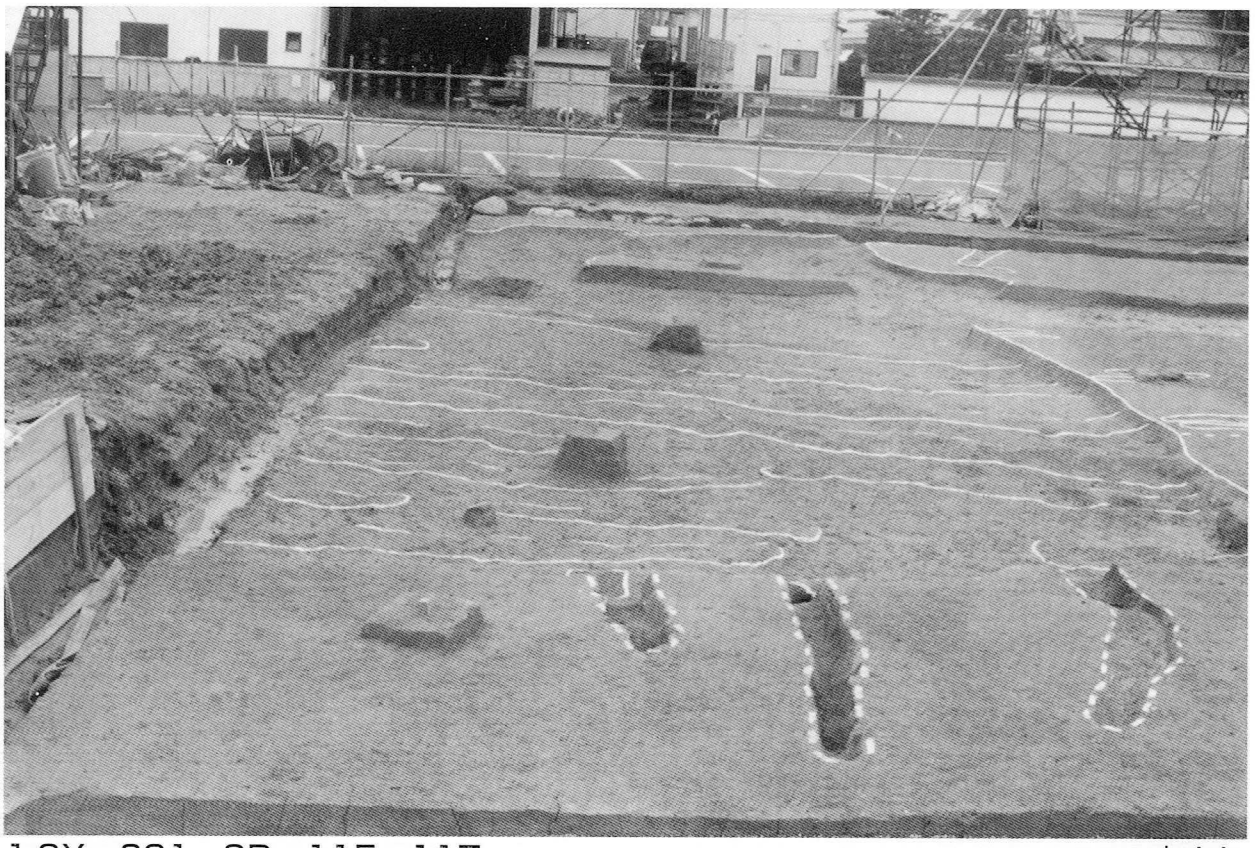
図版6　検出遺構

1.第3遺構面　　南より

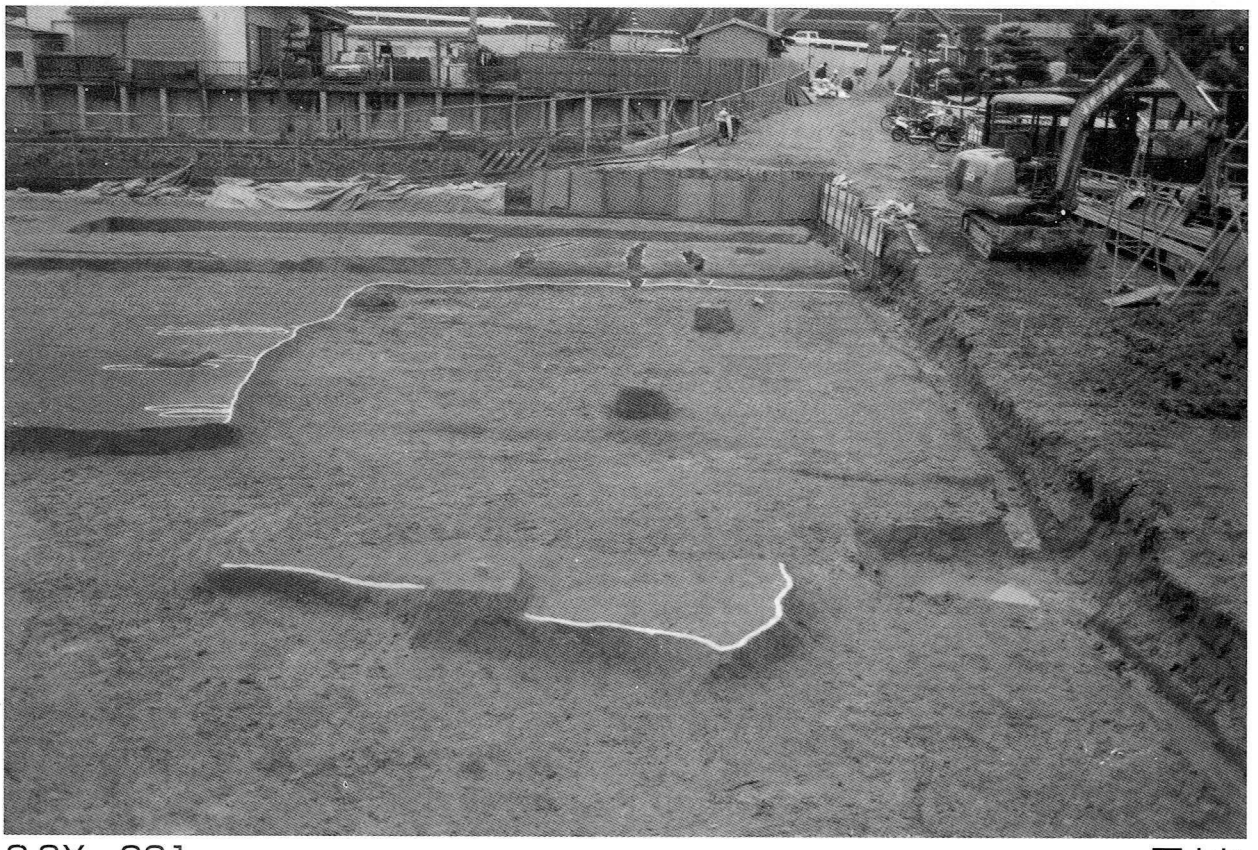


2.SX－301（西側）　　南より

図版7　検出遺構



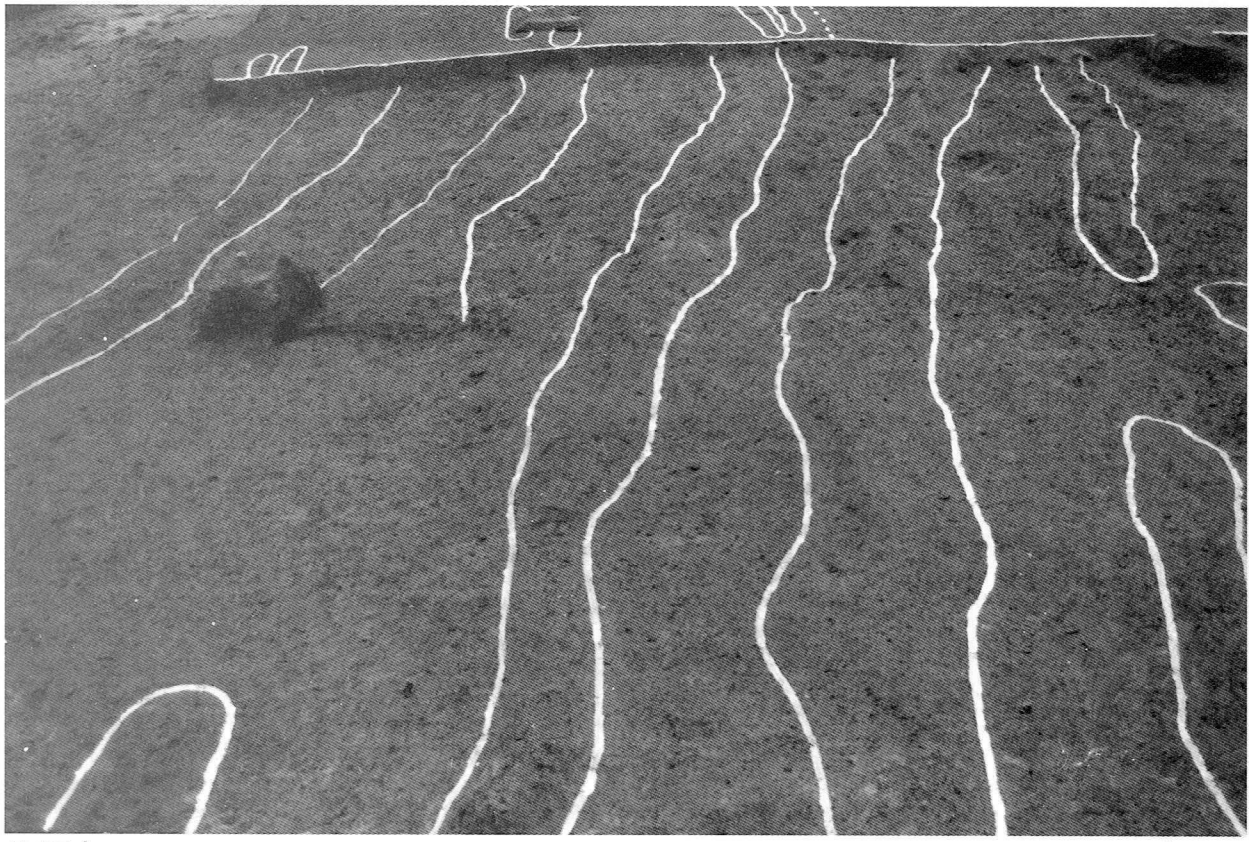
1.SX−301、SD−115〜117　　東より



2.SX−301　　西より

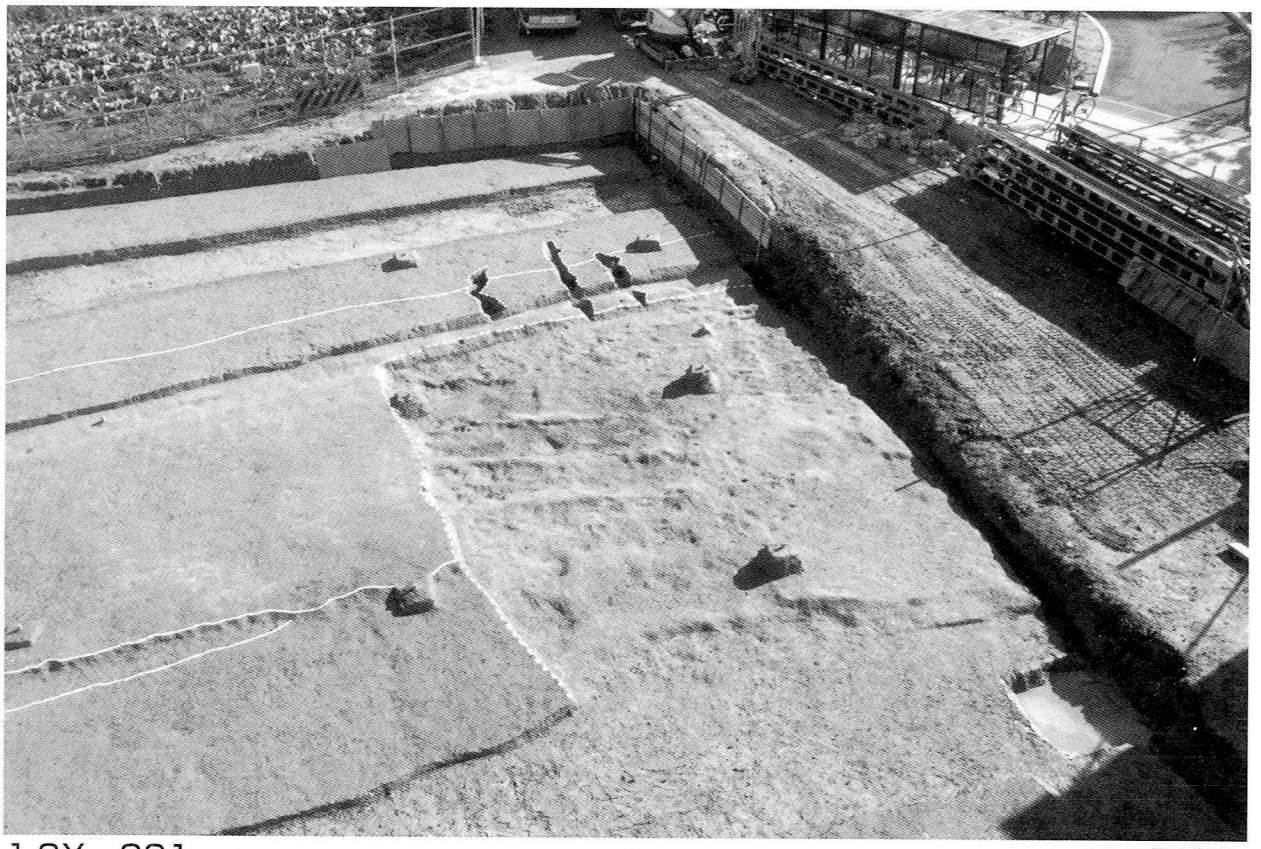
図版8　検出遺構

1.SX−301　　南より



2.同上　　南より

図版9　検出遺構



1.SX−301　　西より

2.同上 土層断面　　南より

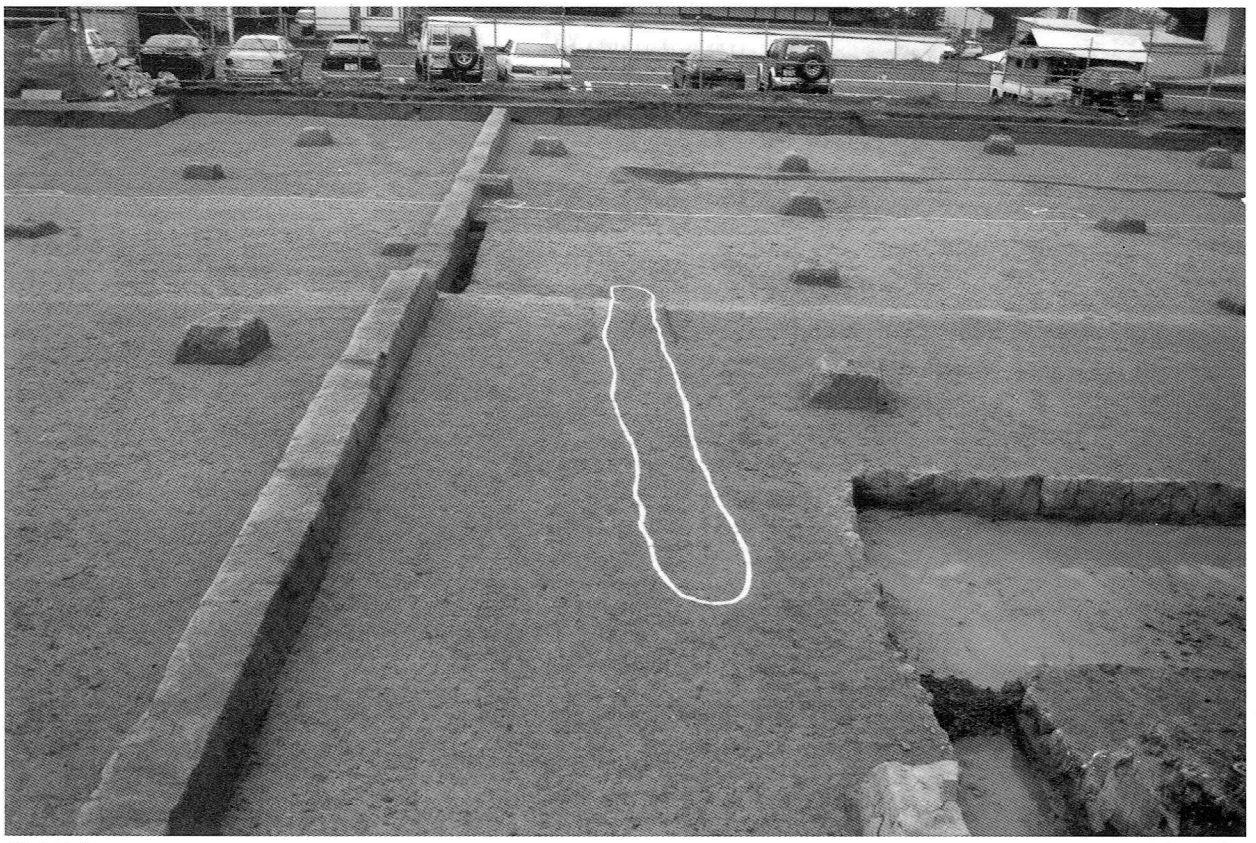
図版10　検出遺構

1.第4遺構面　　南より

2.第5遺構面　　南より

図版11　検出遺構

1.SD－401　　北東より

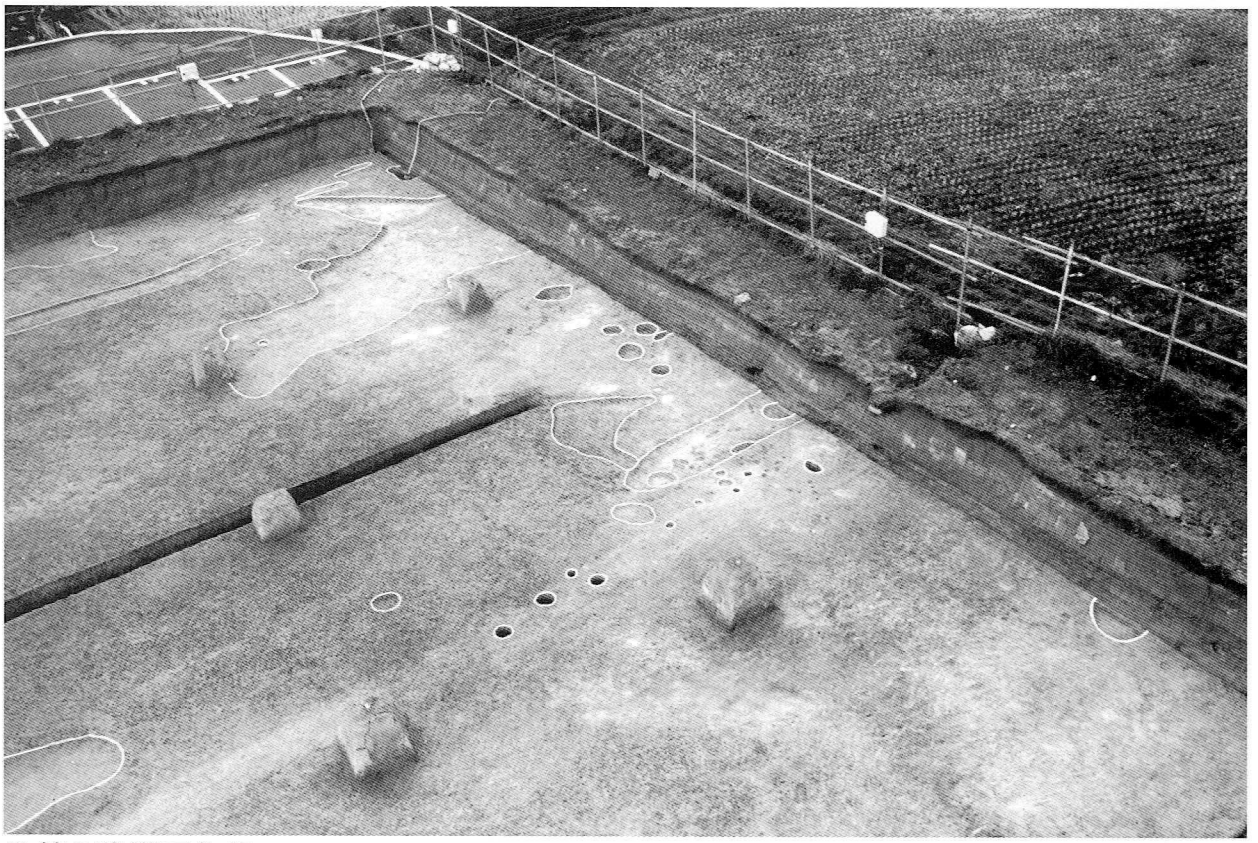


2.同上　　東より

1.SD−609　検出状況　　西より

2.同上　完堀状況　　西より

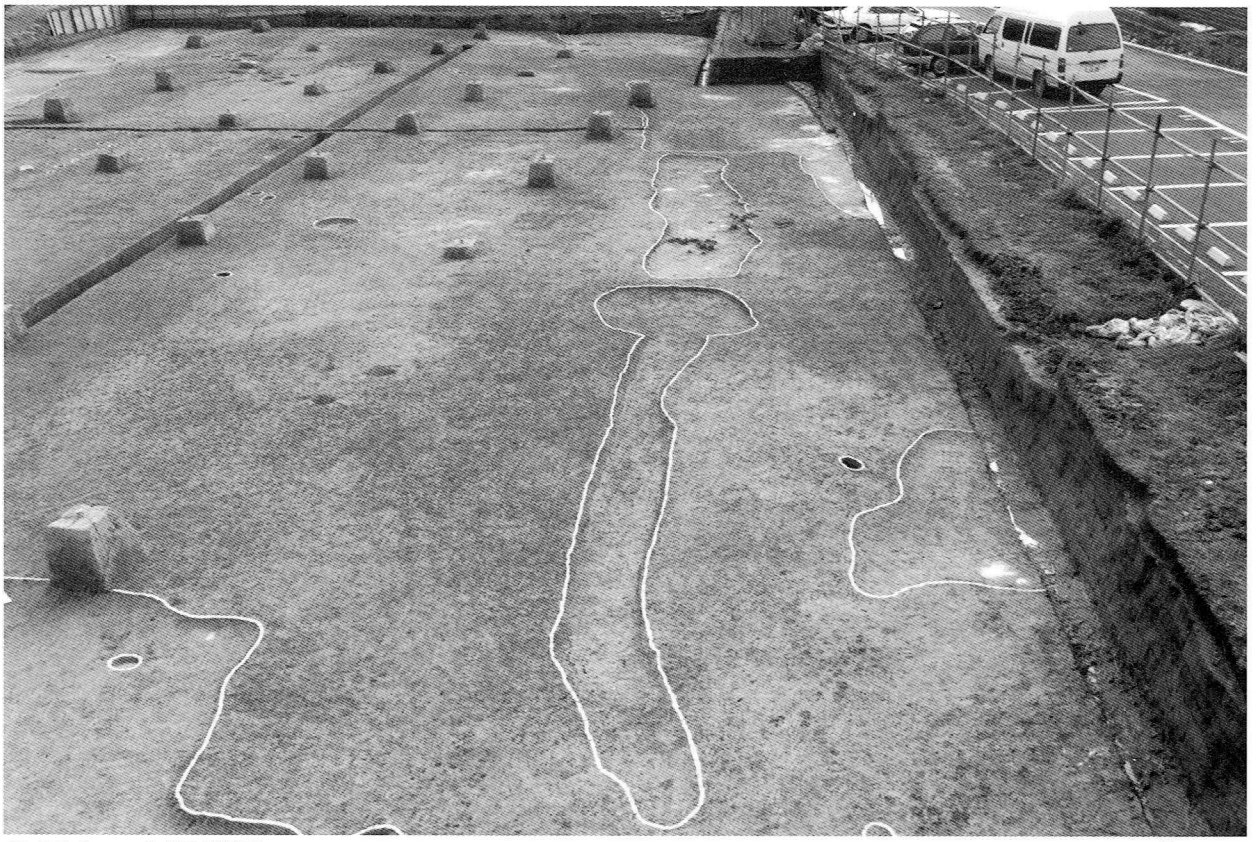
1.SX－609　　北西より



2.第6遺構面北部　　東より

図版14　検出遺構

1.SD－603、608　検出状況　　北より



2.同上　完堀状況　　北より

1.SD－603、608　　南より

2.同上　　東より

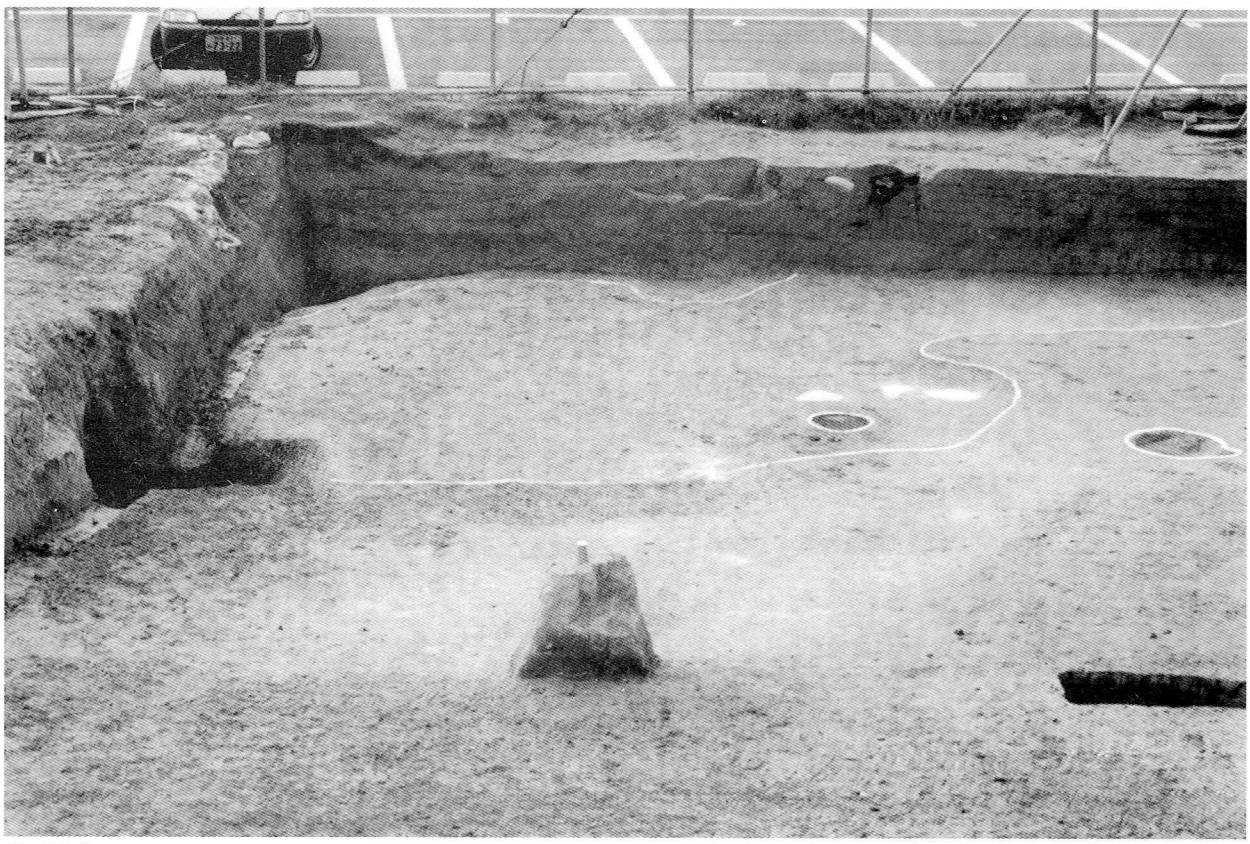
1.SD－603　焼土群　　西より

2.同上　　西より

1.自然木根（D－7区）　東より

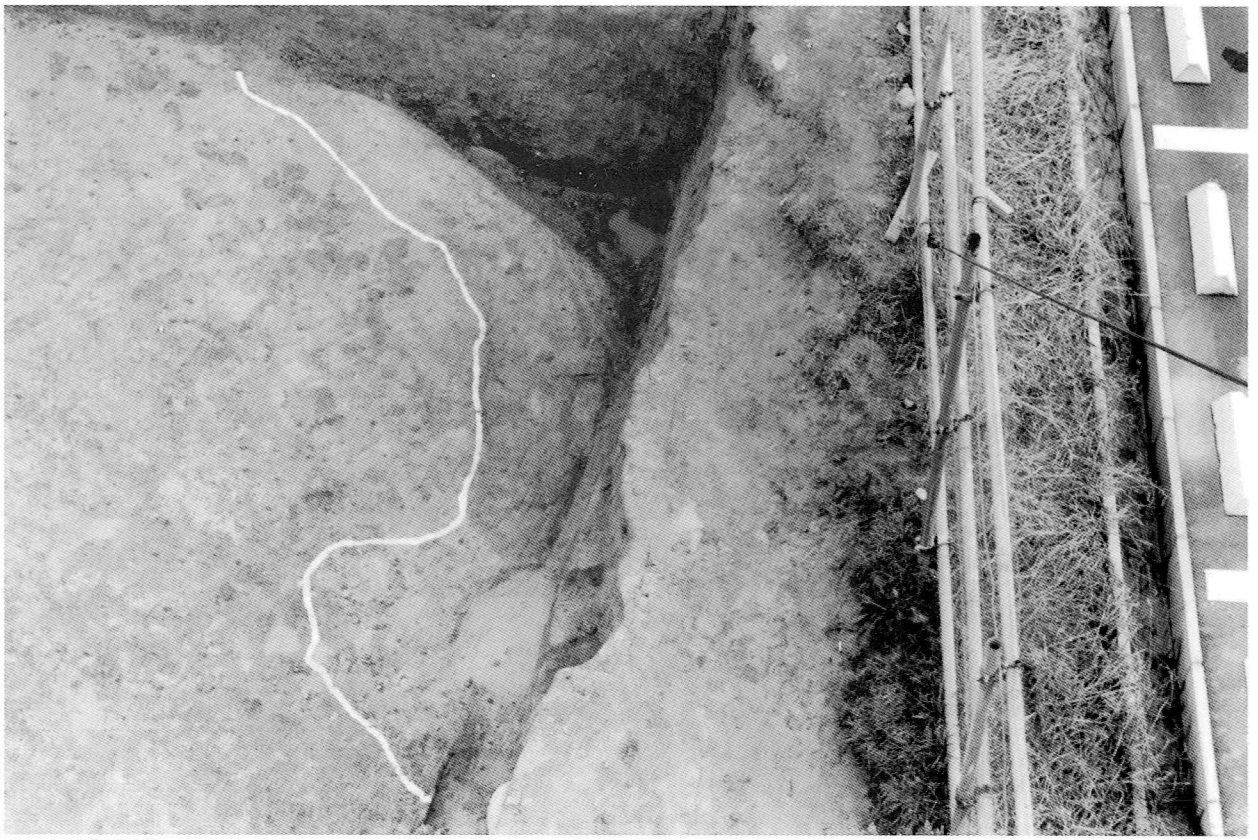
2.同上（C－3区）　東より

1.落ち込み2、自然流路　　北より

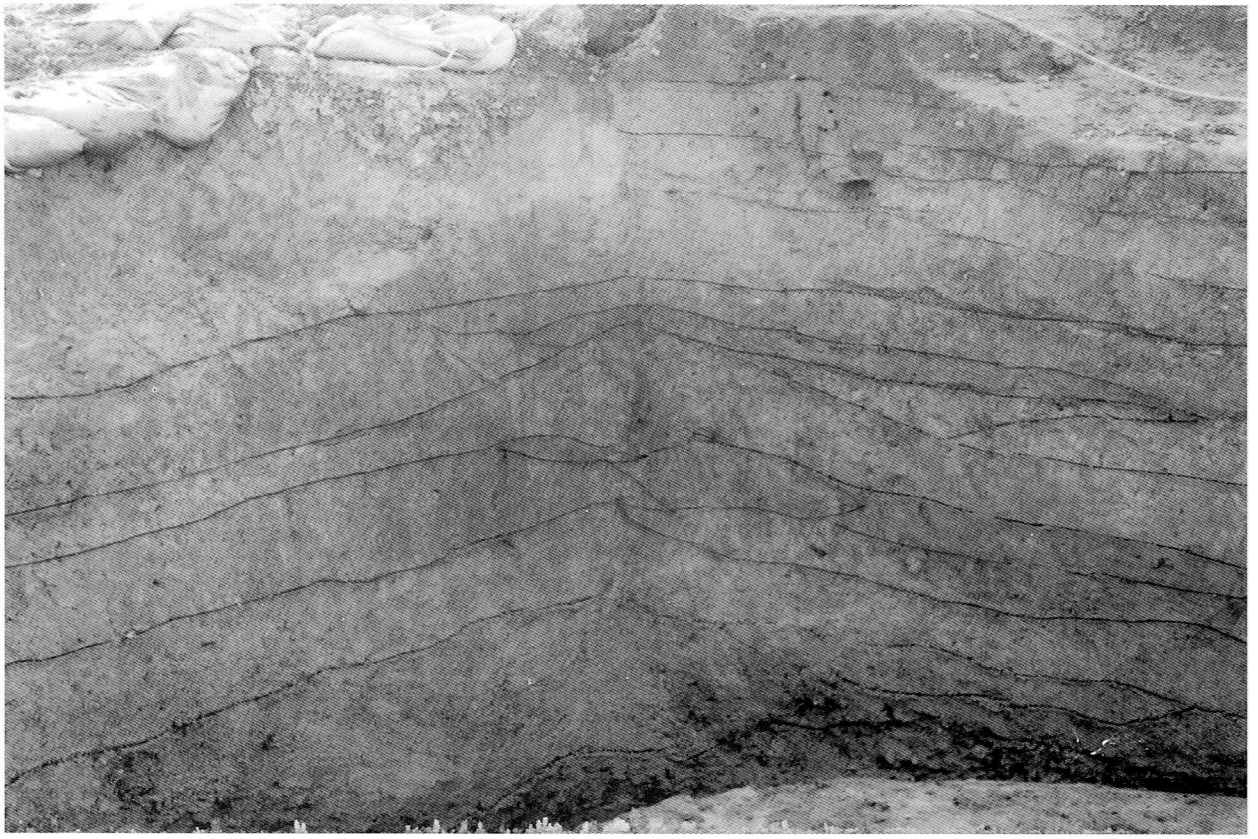


2.同上　　東より

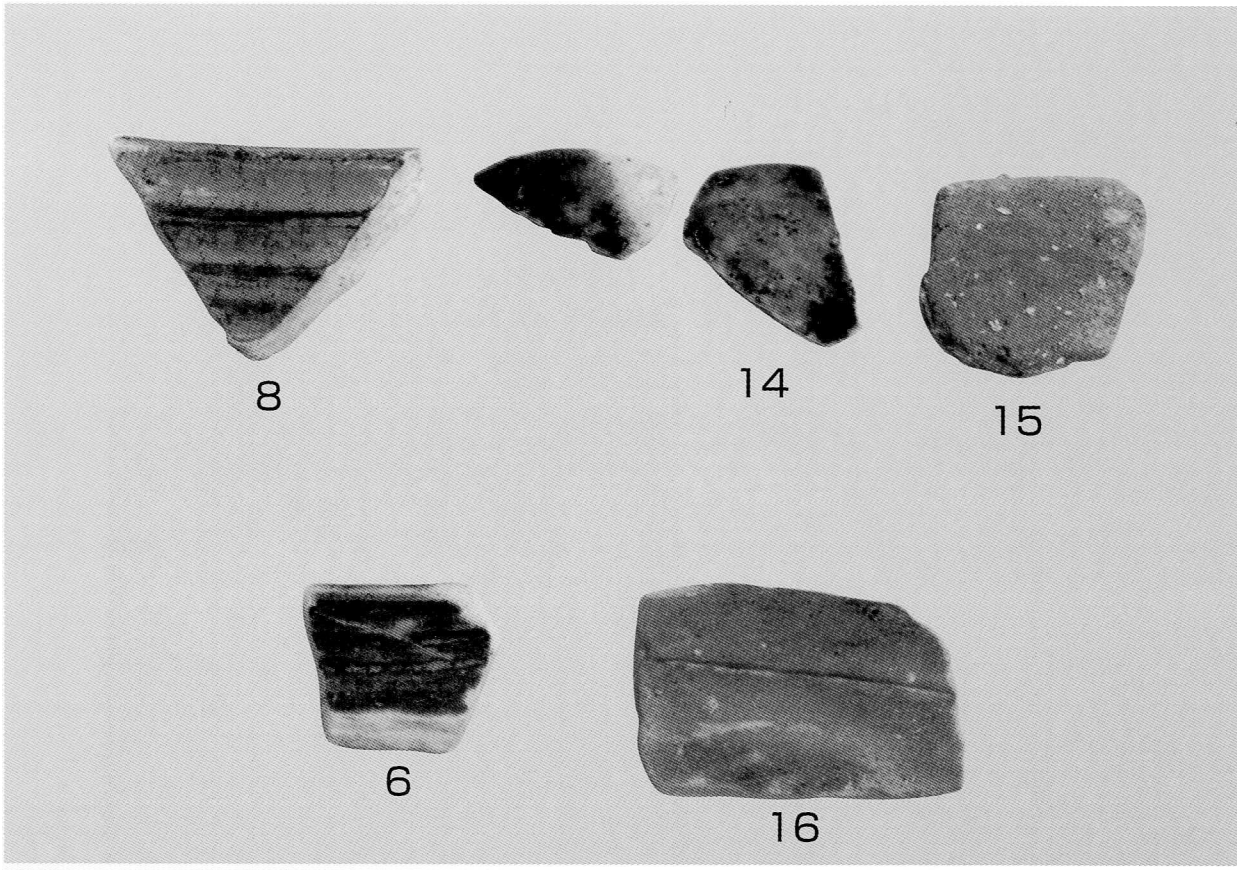
図版19　検出遺構

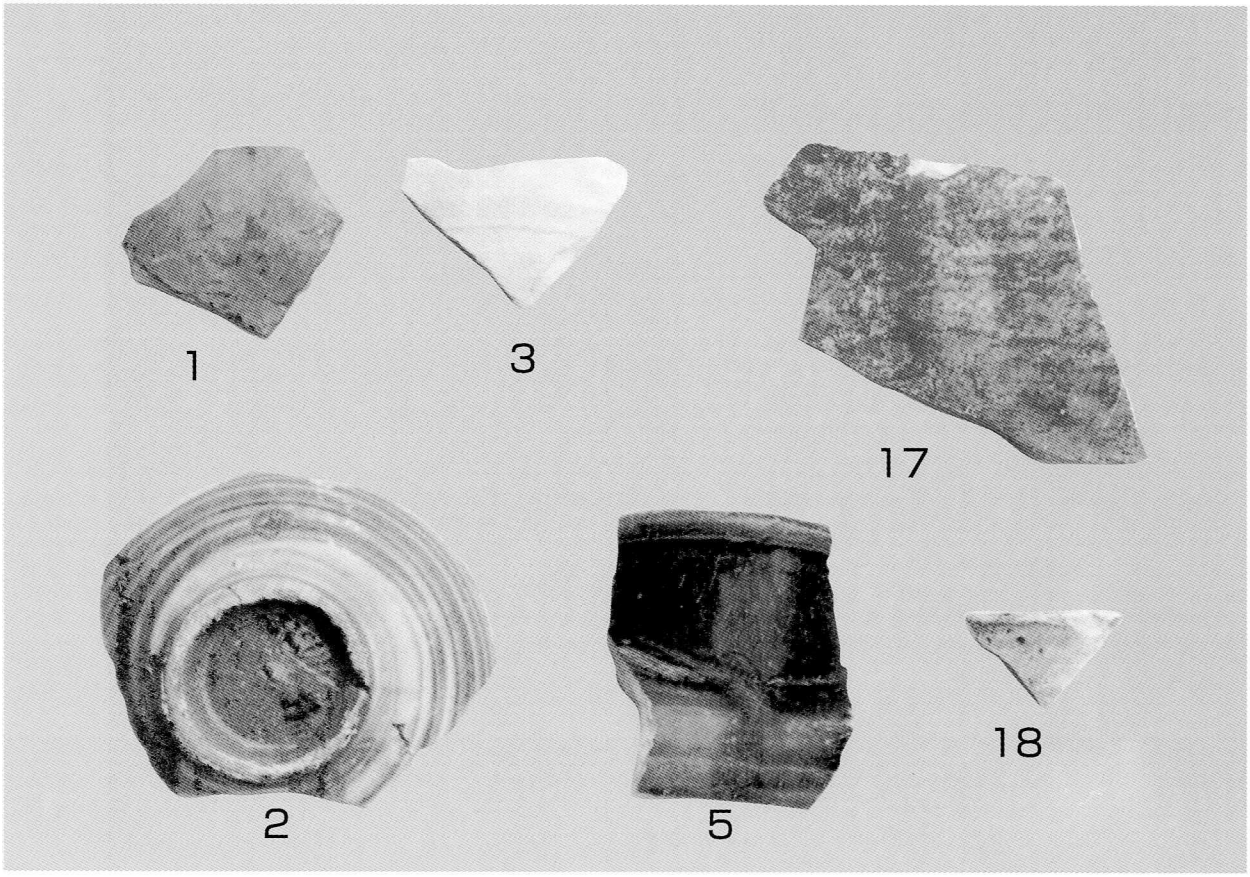


1.自然流路　　北より

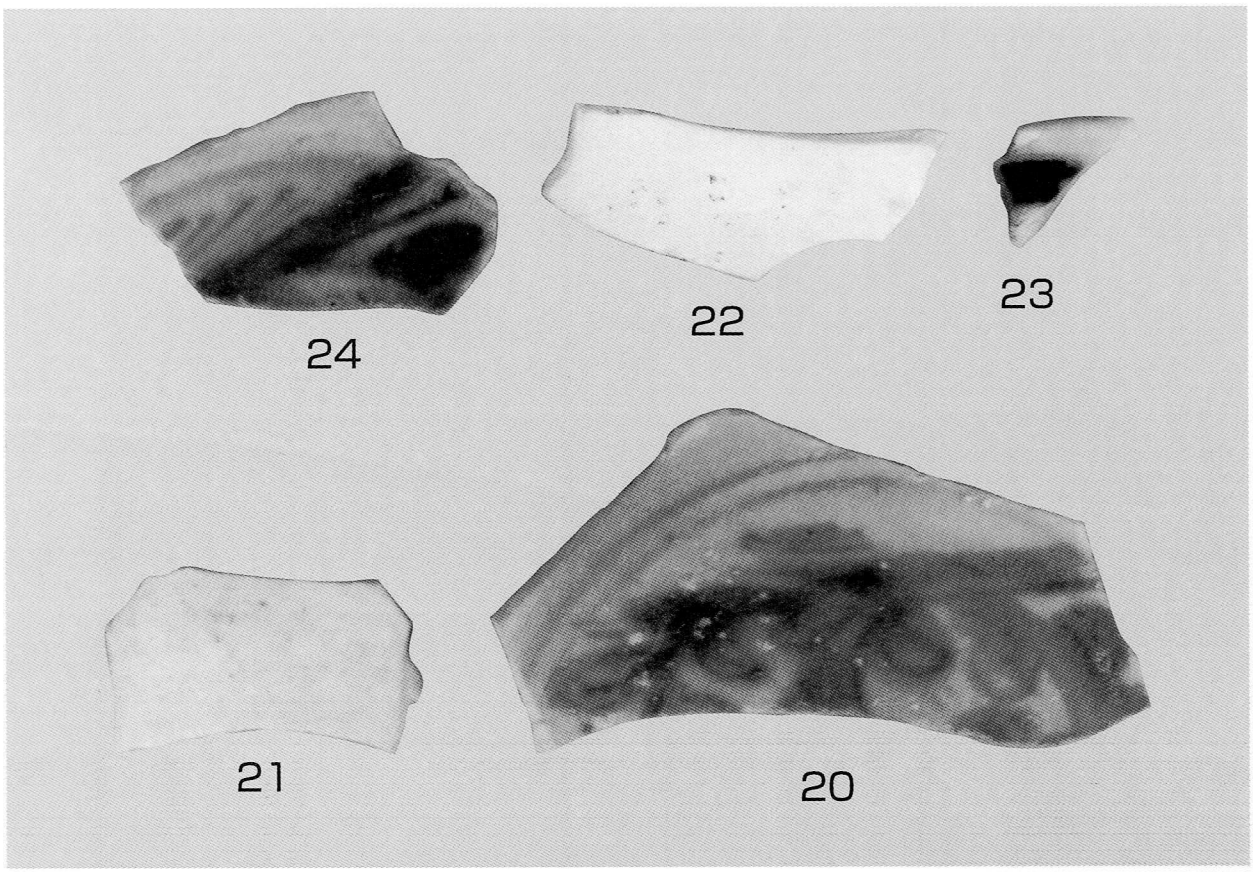


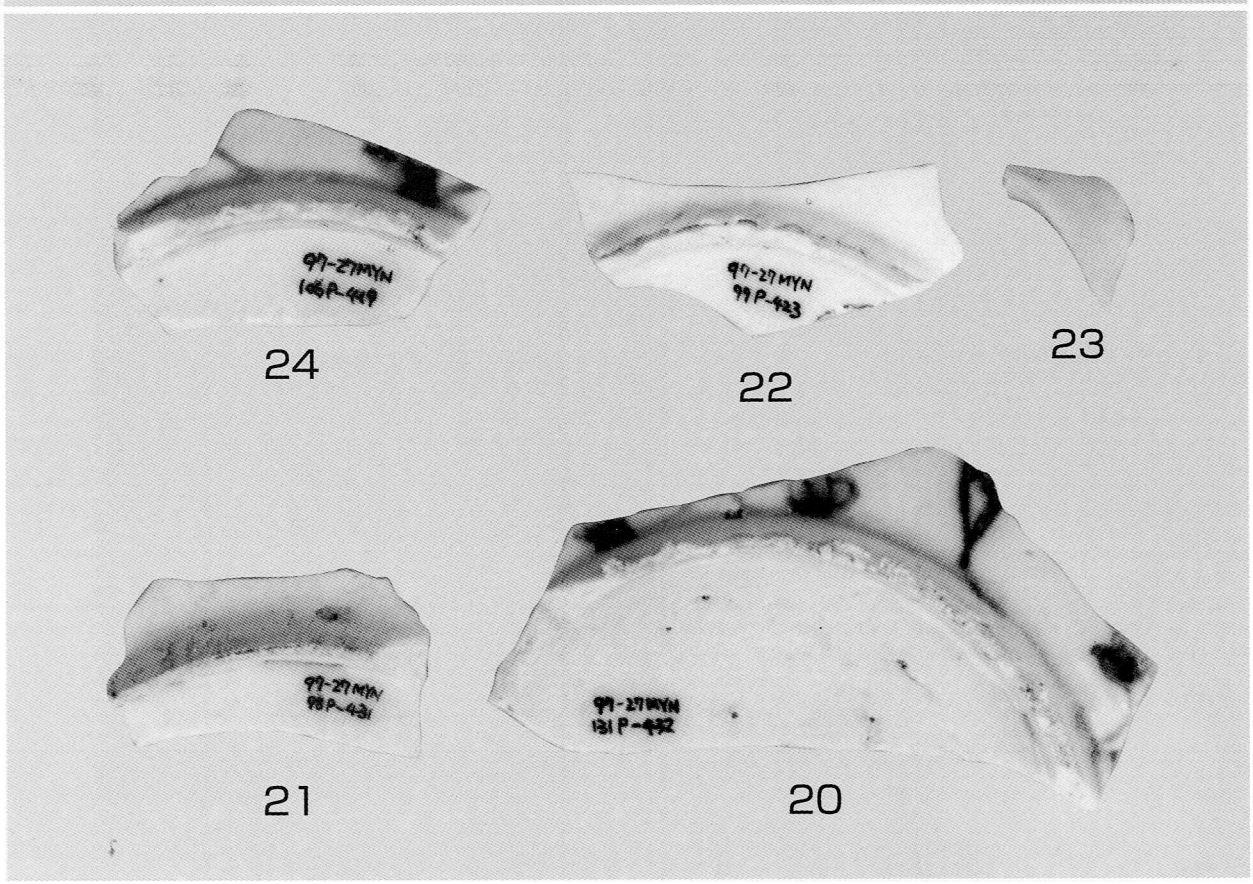
2.同上　南壁、西壁 断面図　　北東より



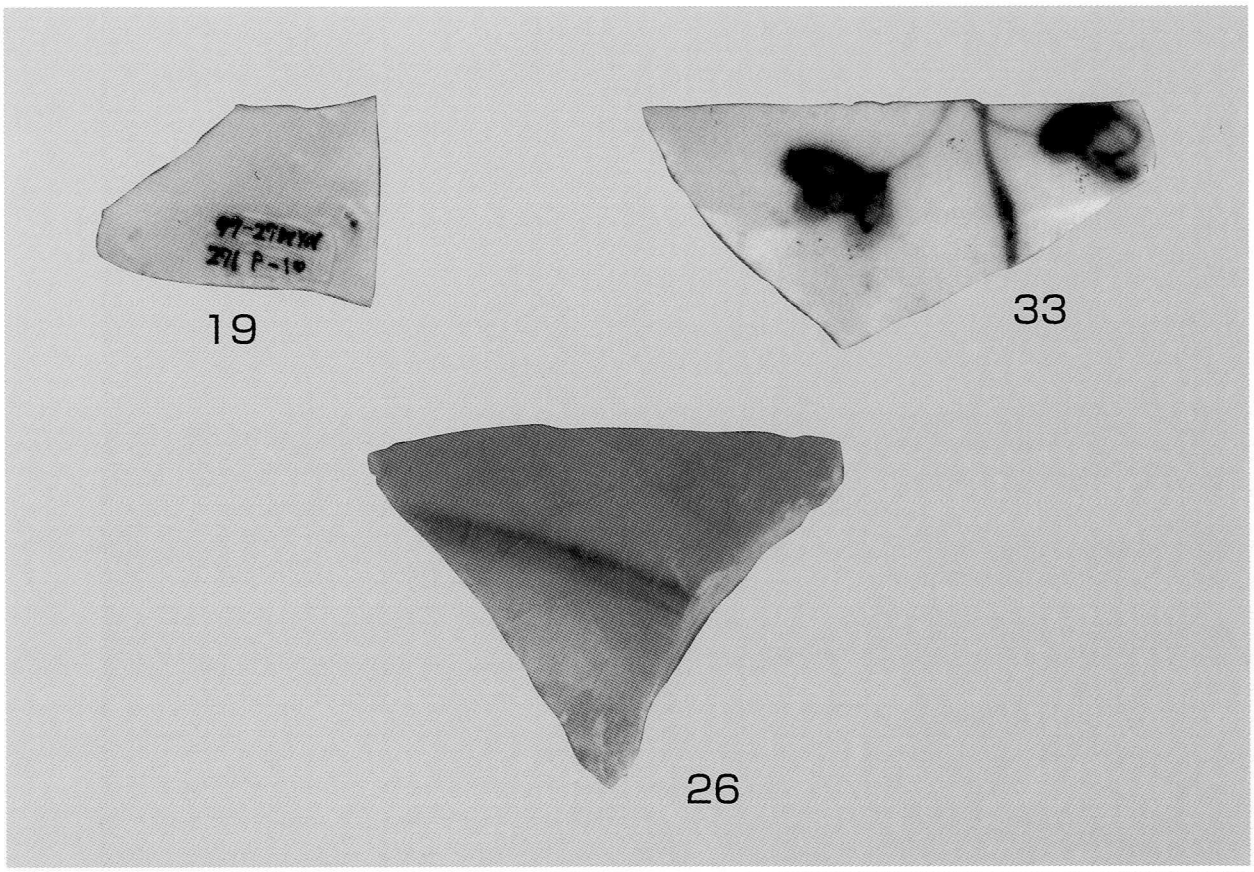


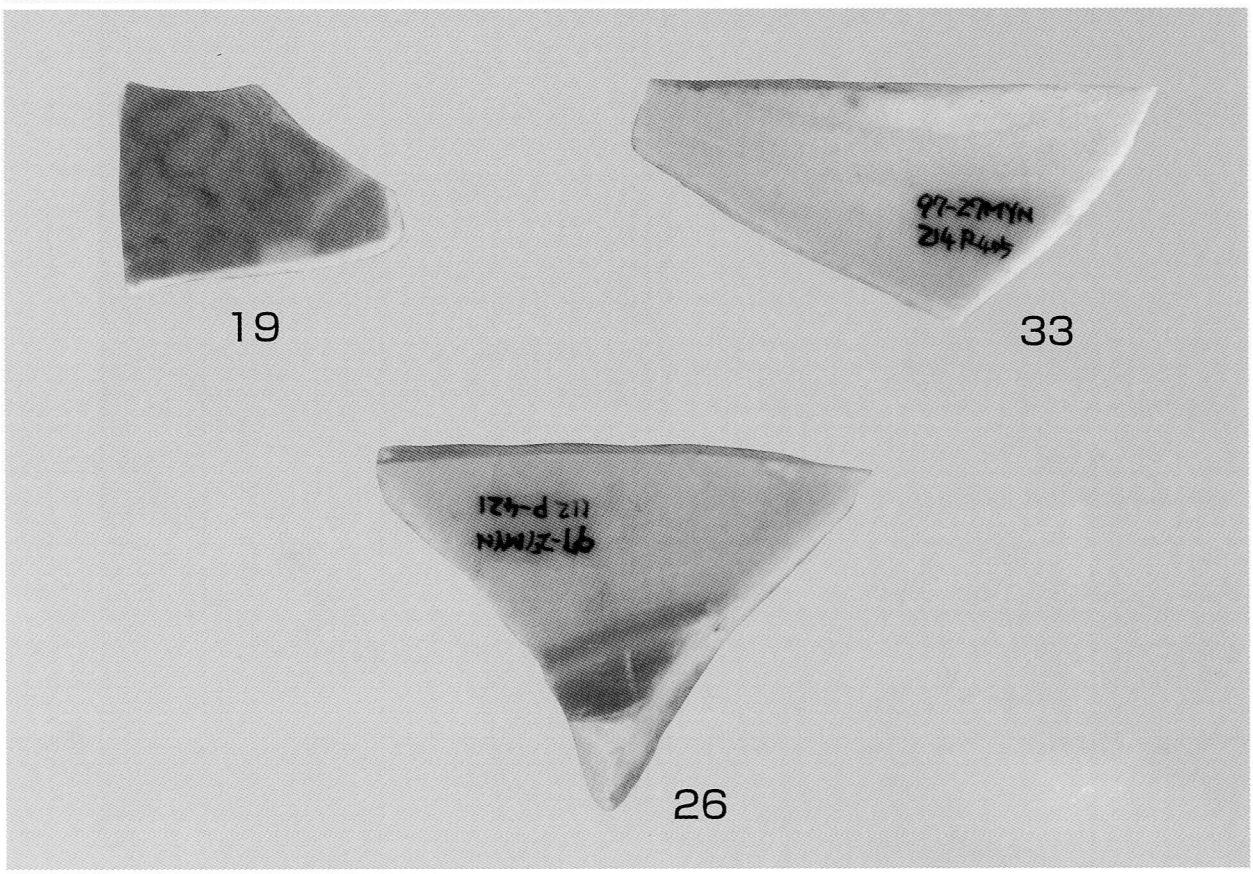
SD−109(1)、SD−201(2、3、17)、SD−202(5)
SD−209(18)、SX−301(6、8、14〜16)


24
22
23
21
20

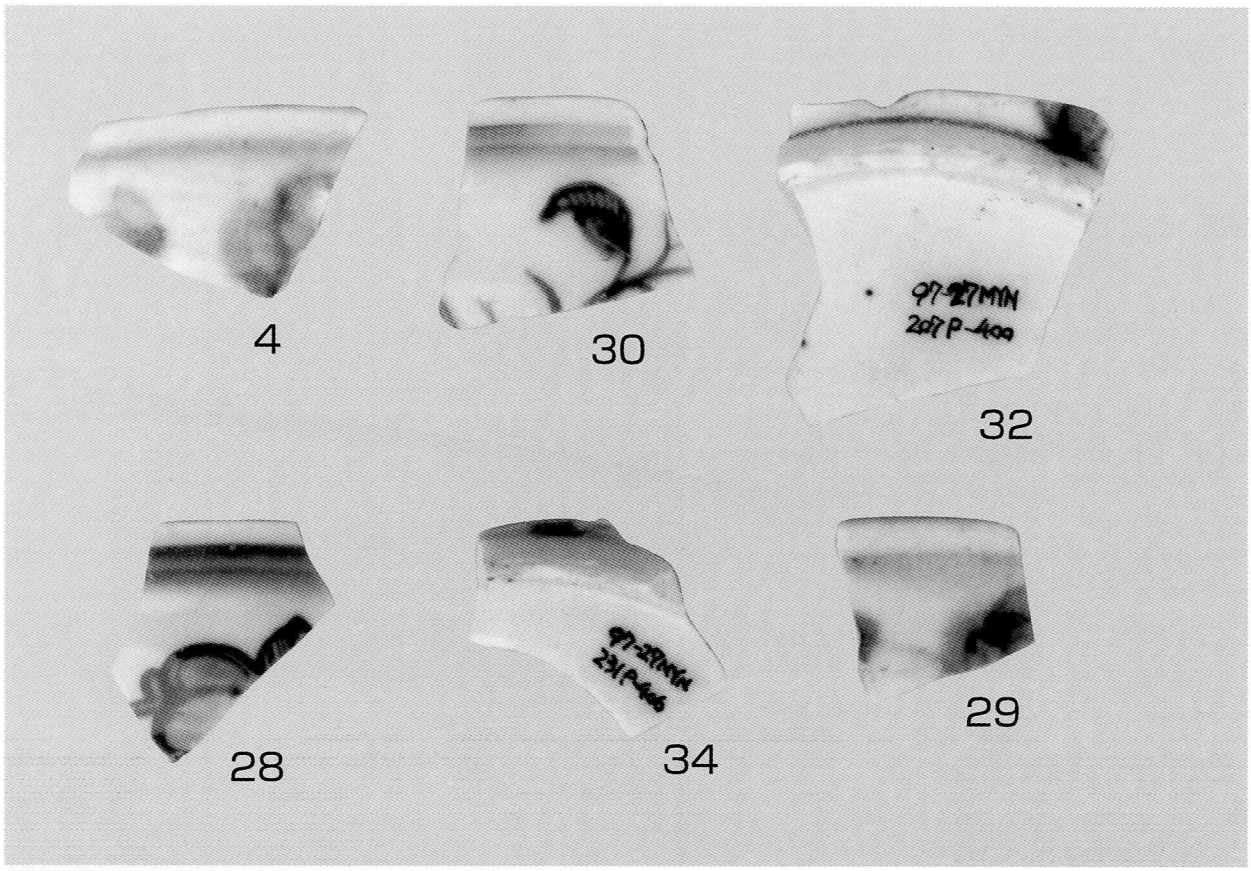

97-27MYN
106P-449
24
97-27MYN
99P-423
22
23
97-27MYN
98P-431
21
97-27MYN
131P-432
20

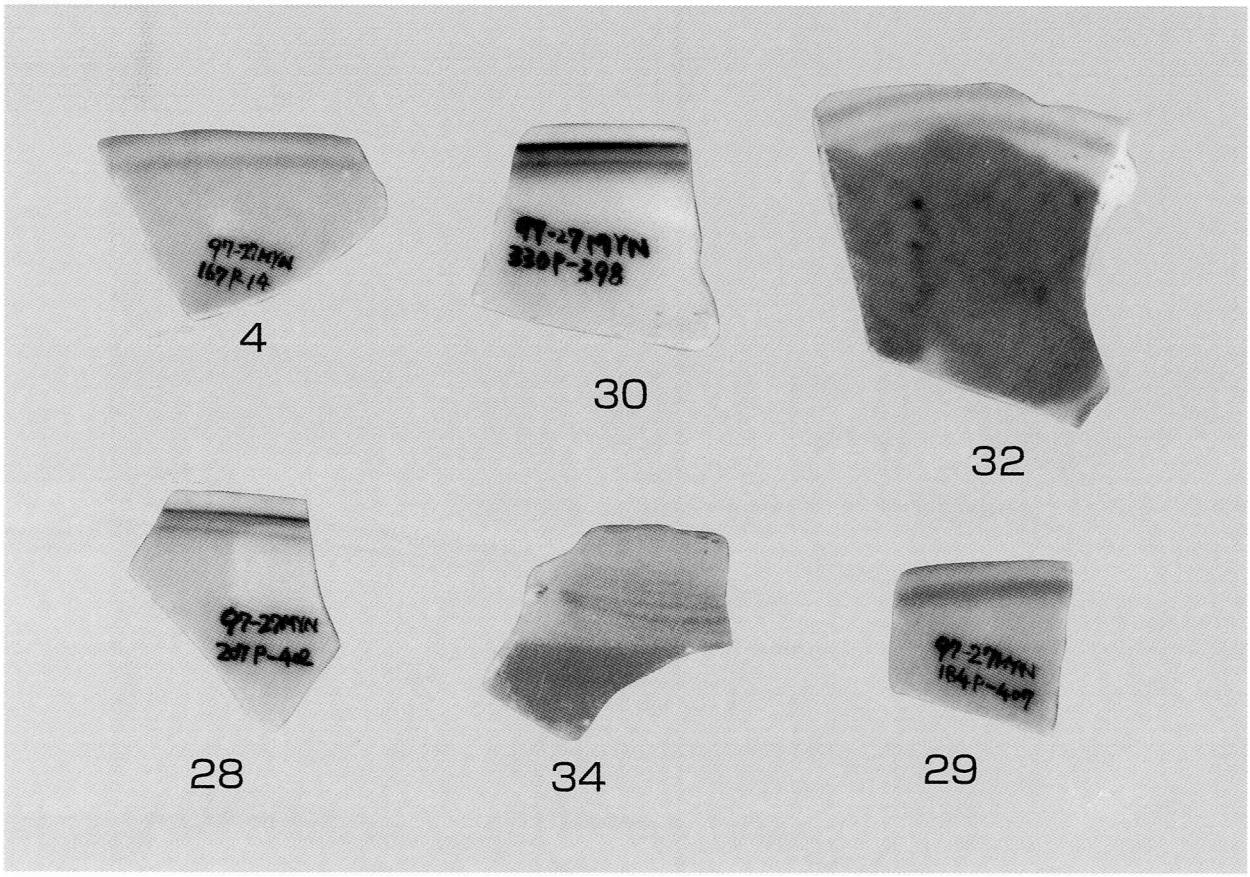
第2層（20～24）



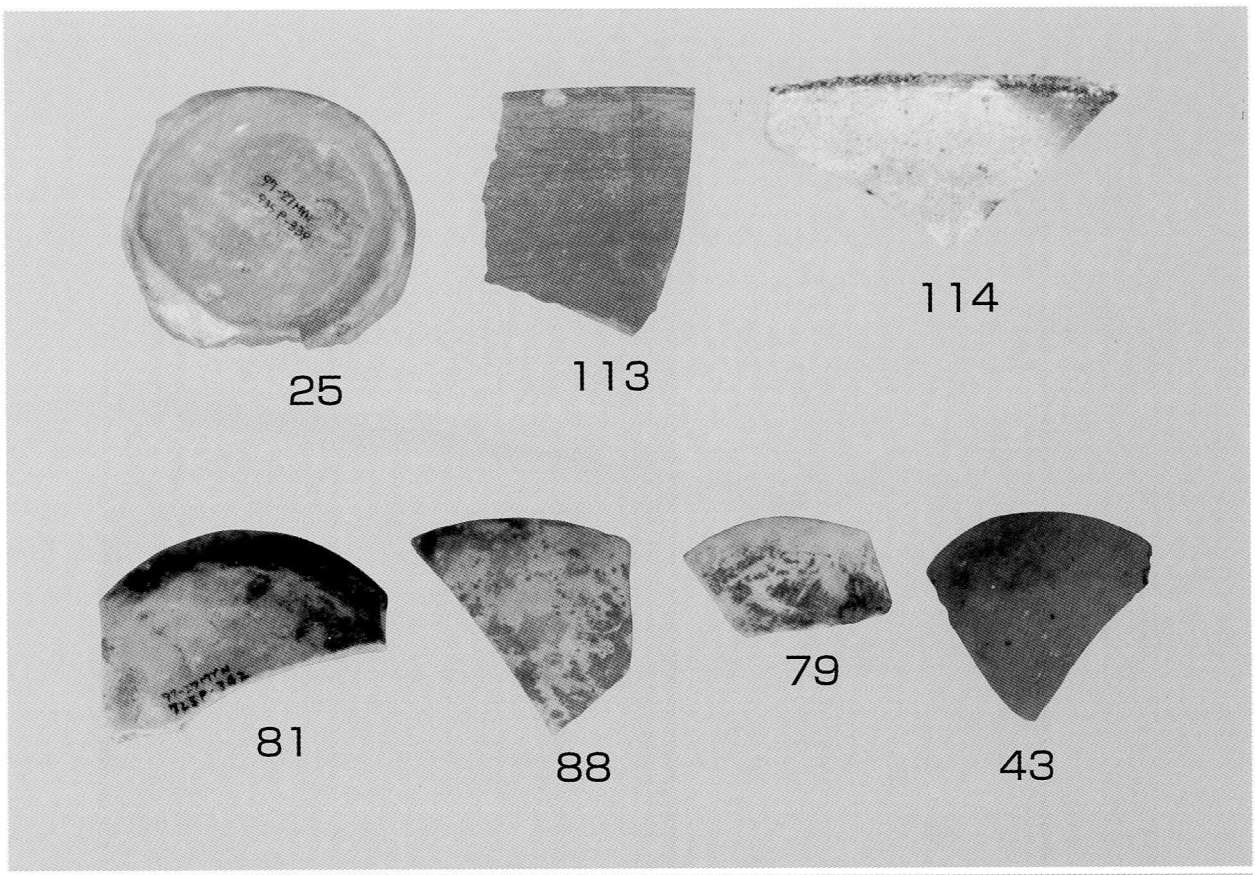


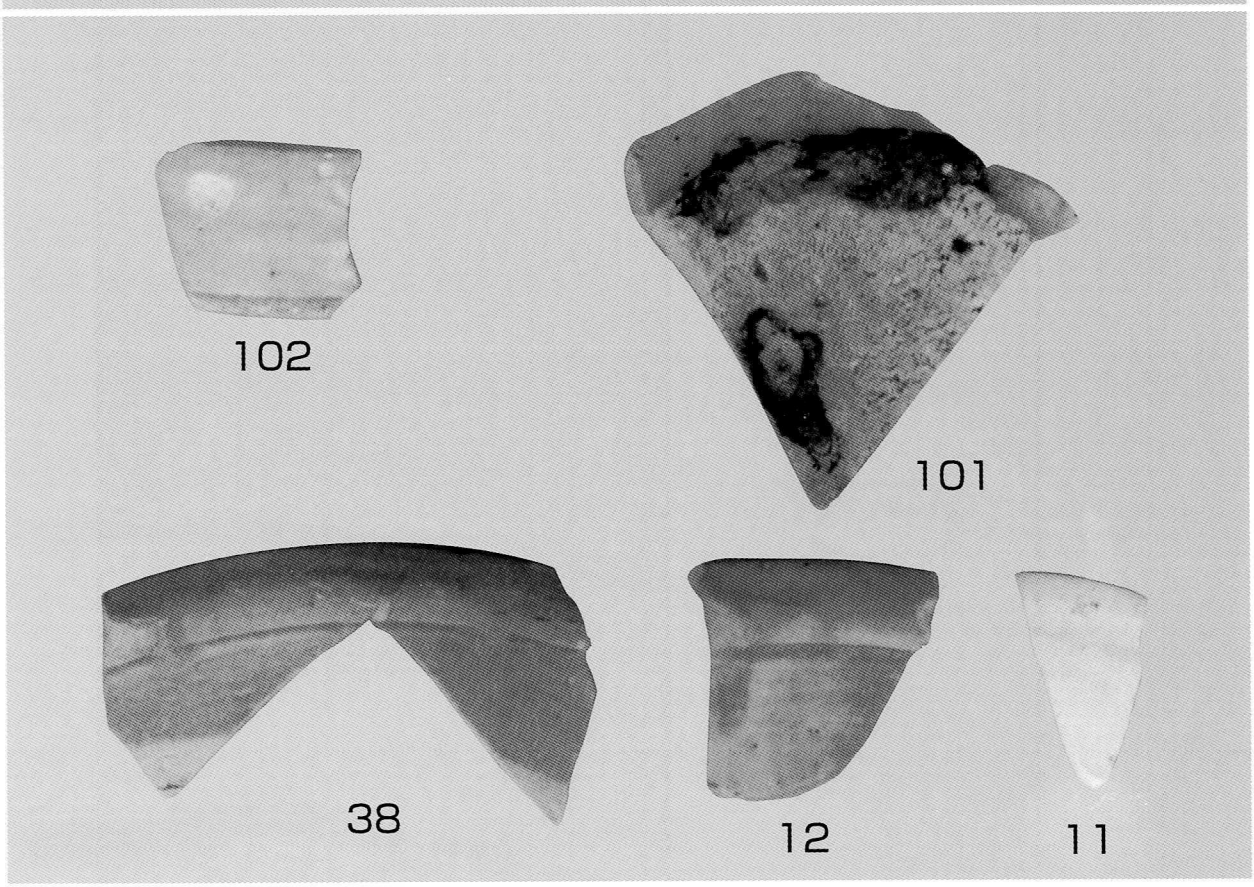
SD−302（19）、第2層（26）、第3層（33）



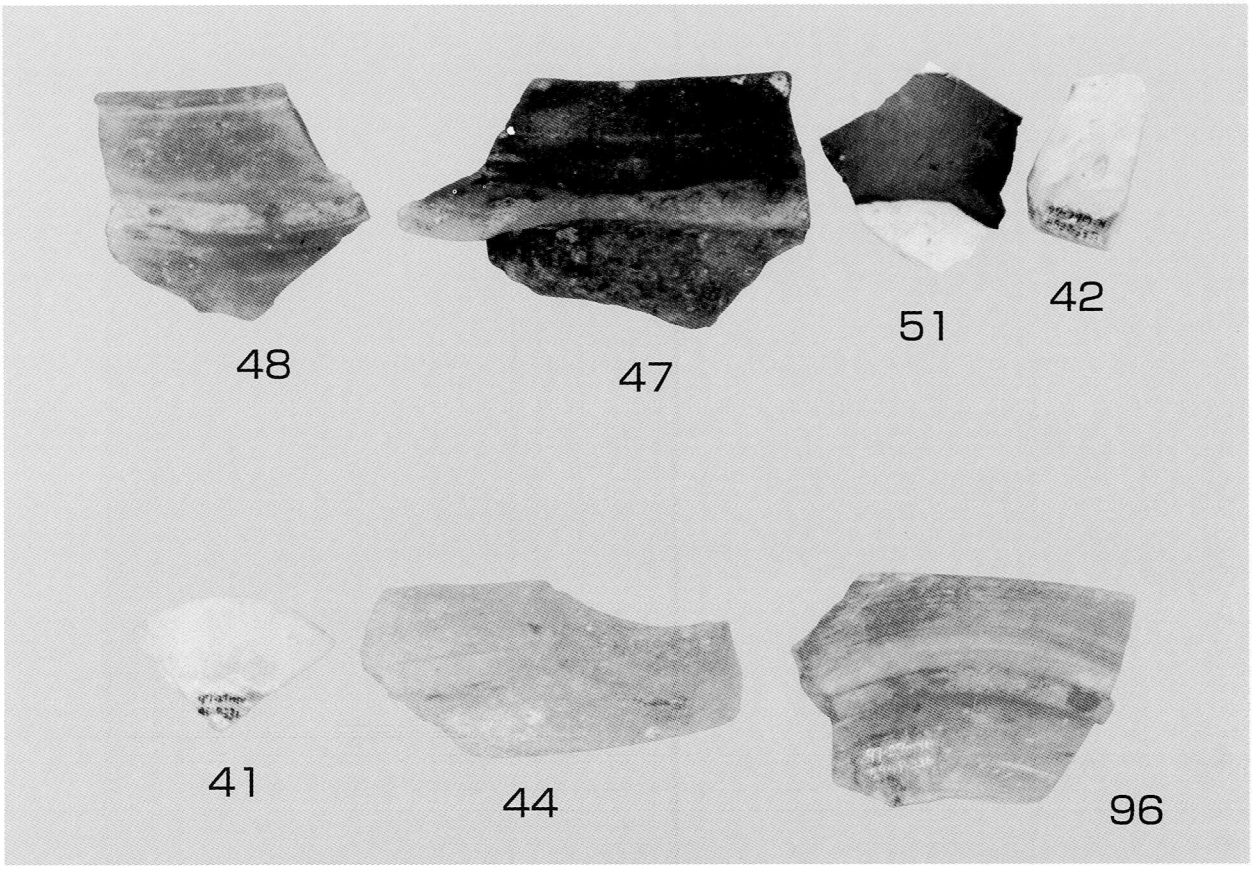


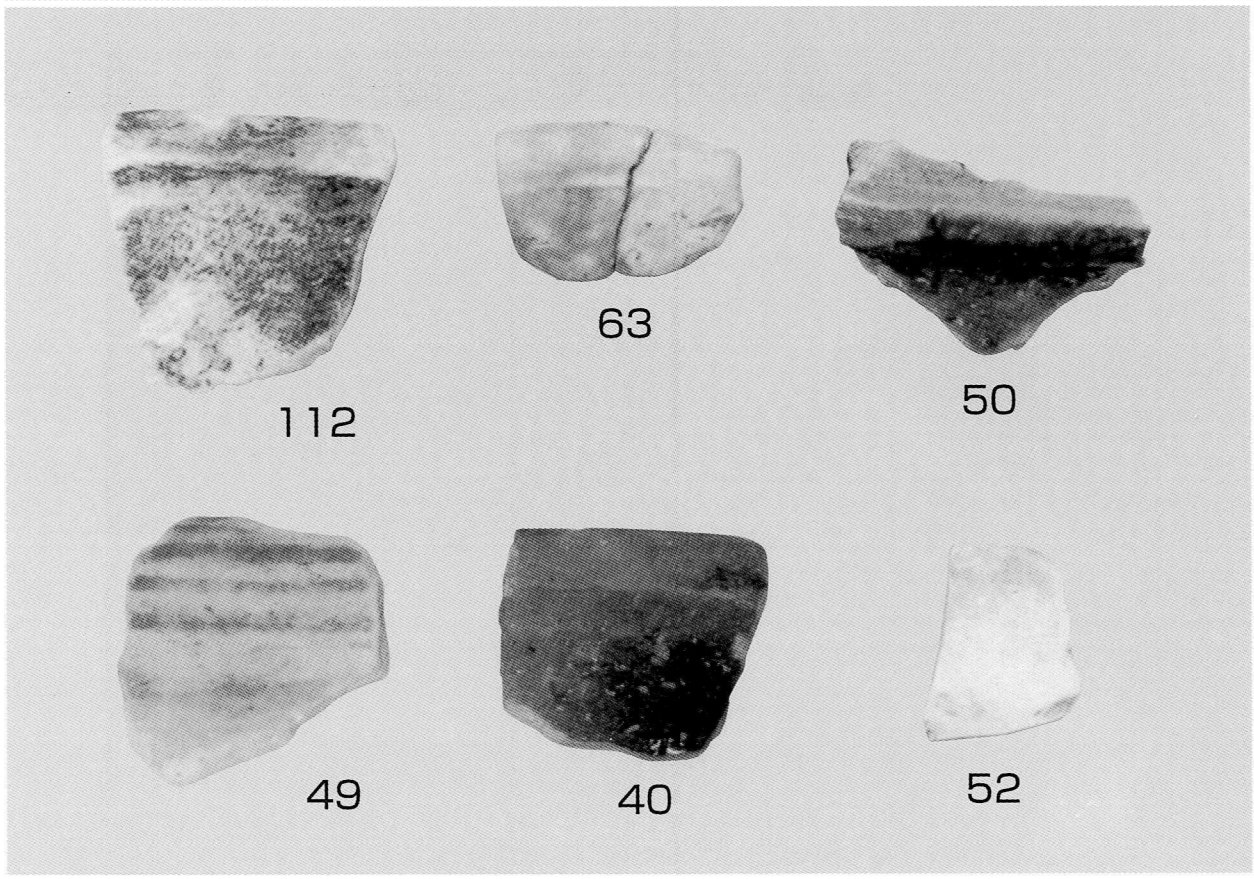
SD−219（4）、第3層（28〜30、32、34）



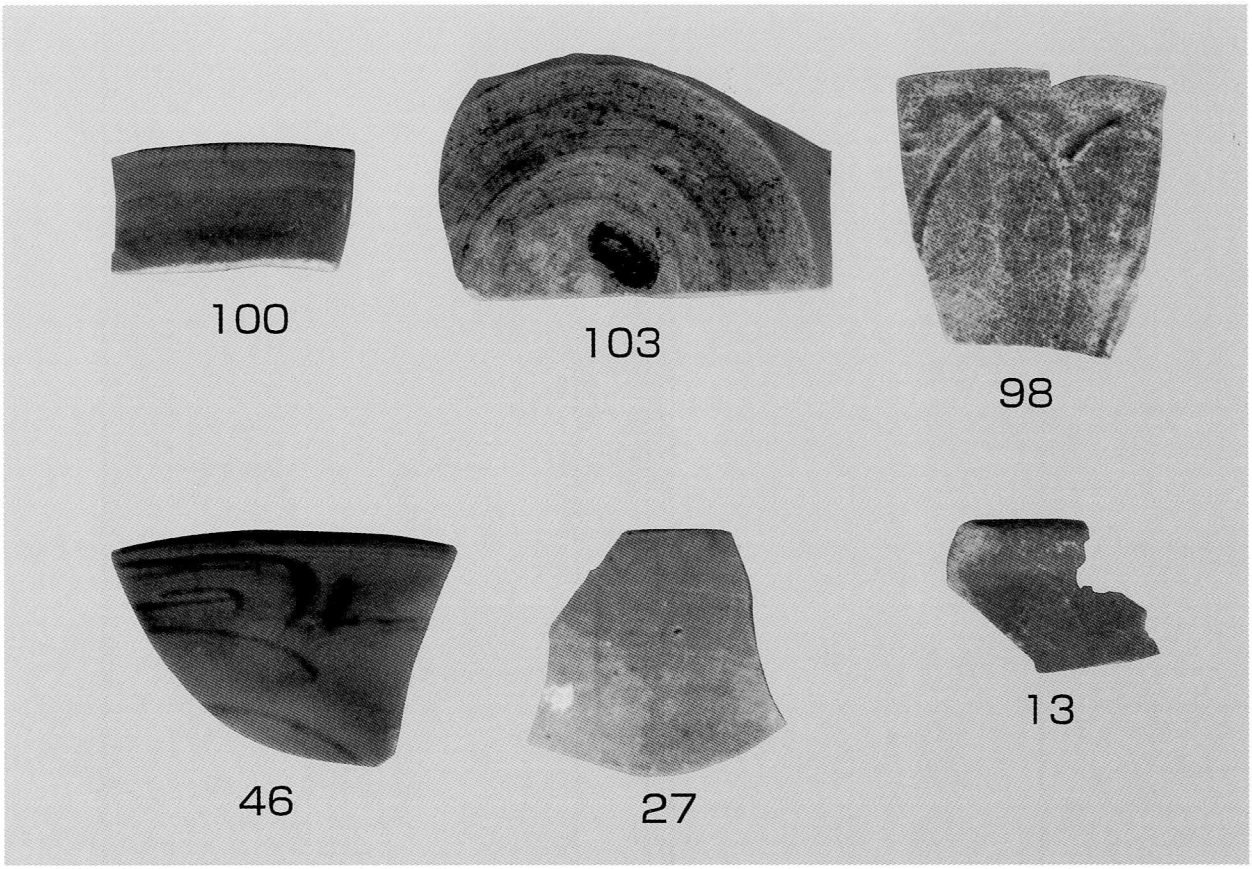


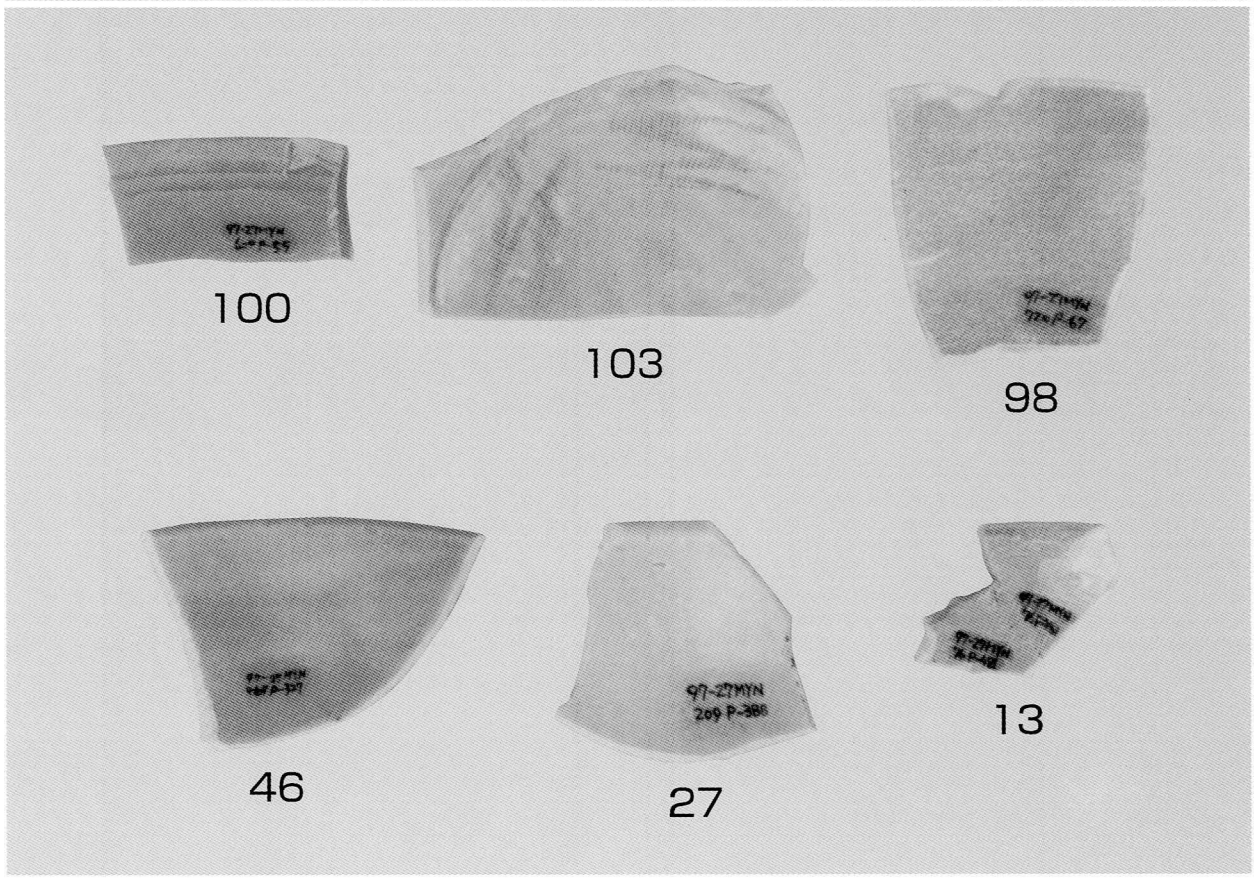
側溝（11）、試掘トレンチ（12）、第2層（25）
第4層（38）、第5層（43）、第6層（79、81、88、101、102、113、114）



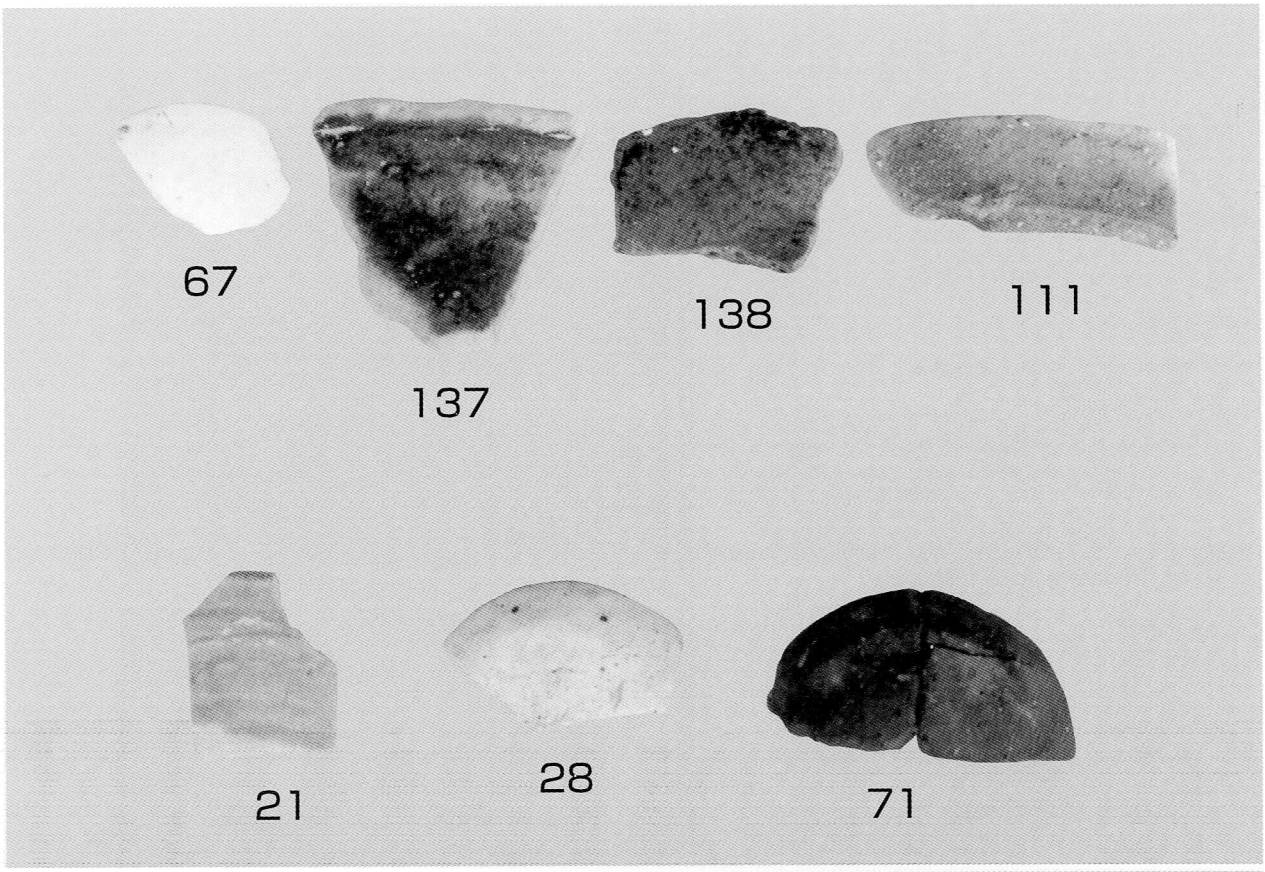


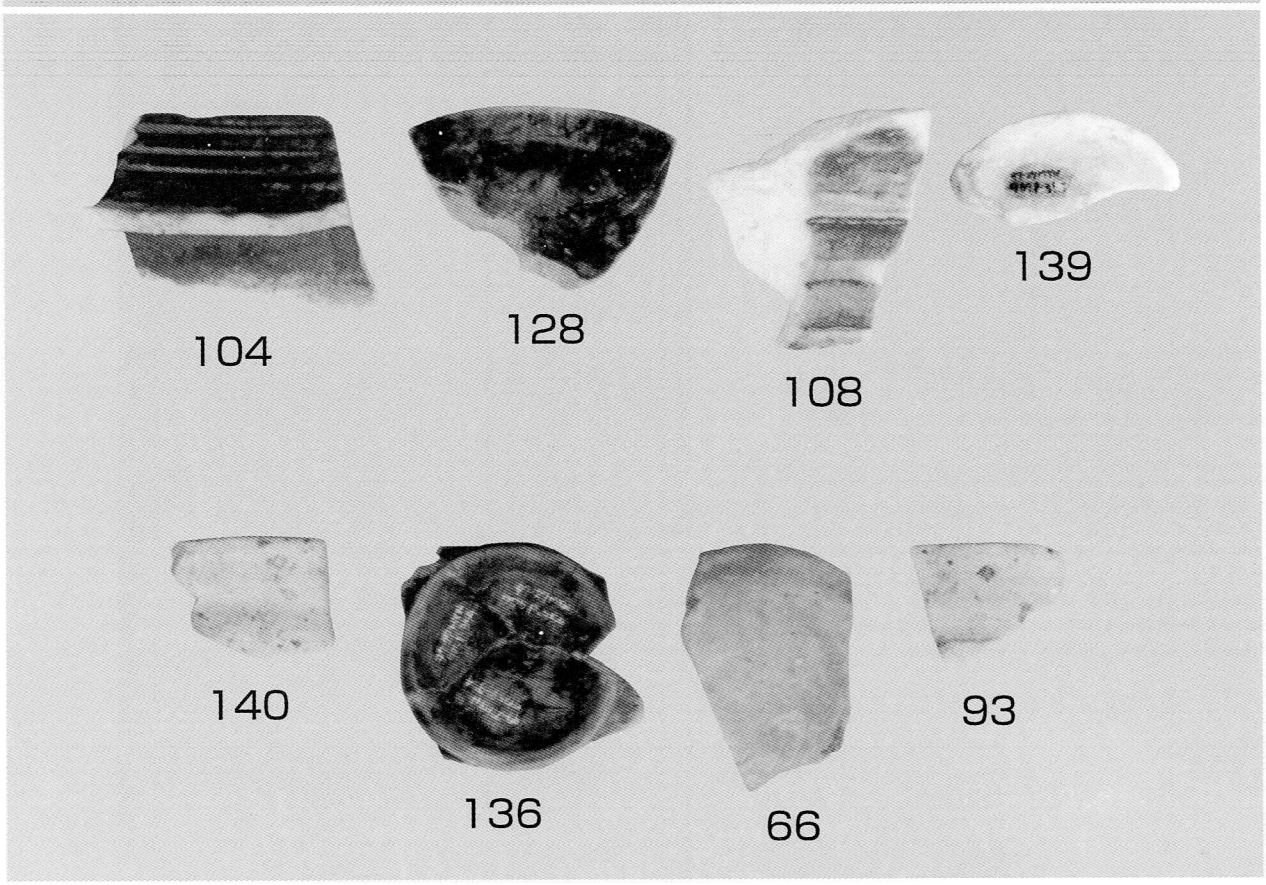
第4層（40）、第5層（41、42、44、47～52）
第6層（63、96、112）



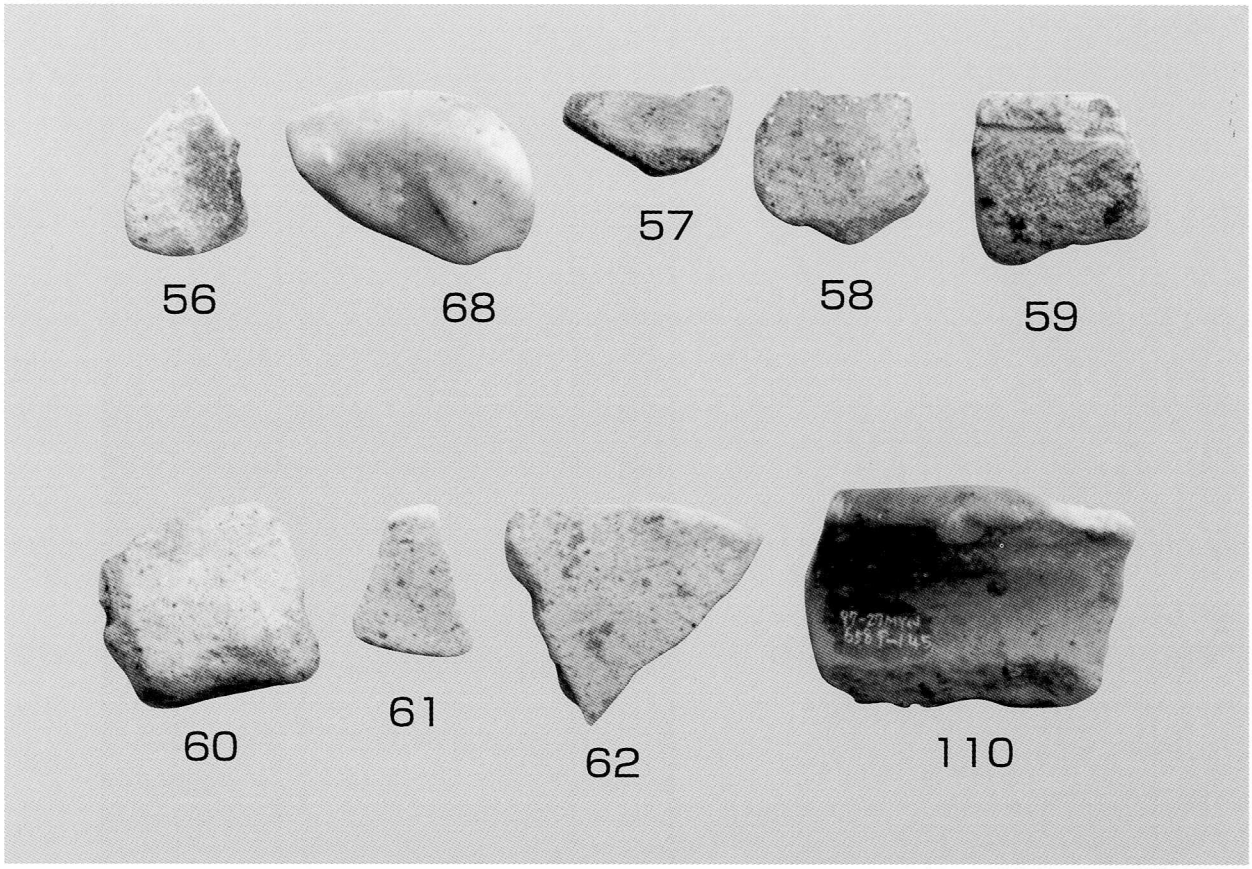


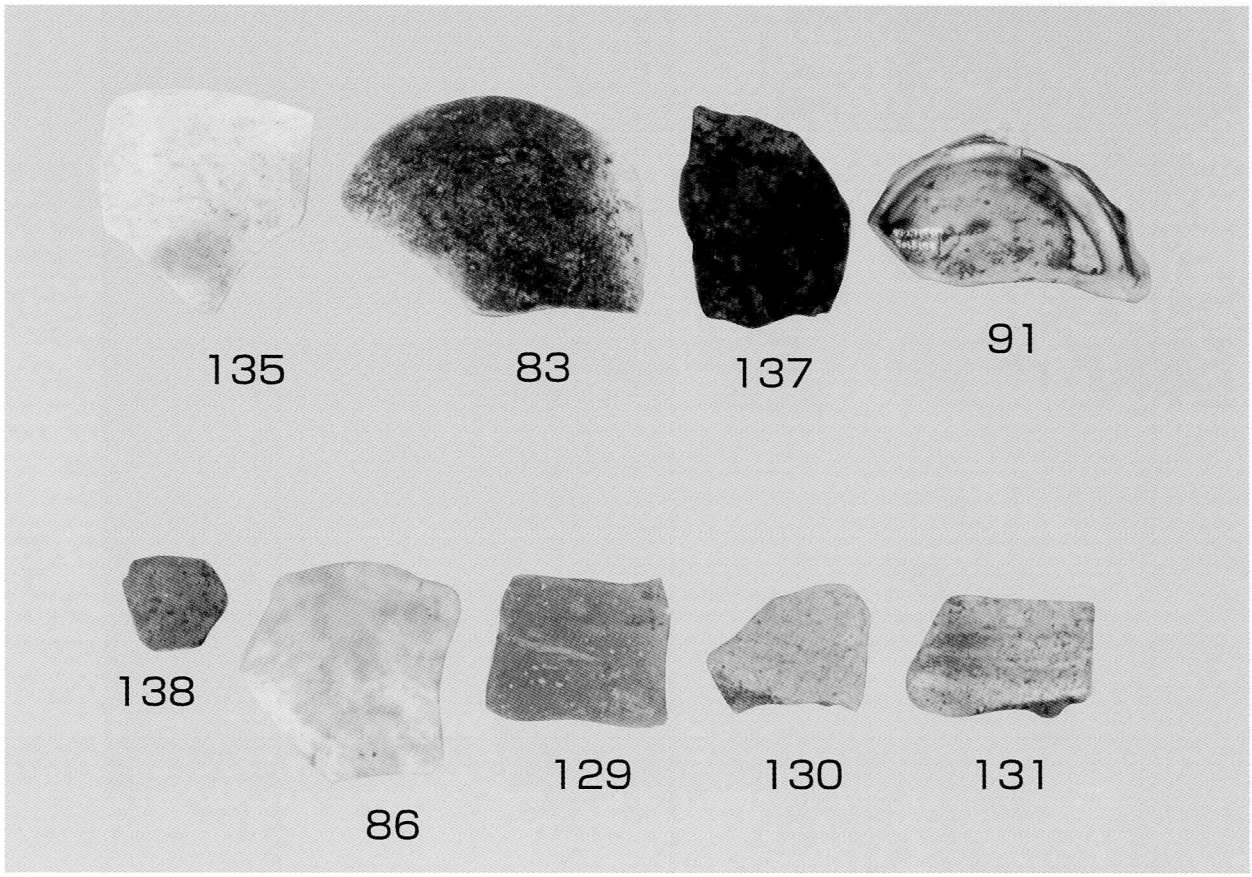
カクラン（13）、第3層（27）、第5層（46）
第6層（98、100、103）



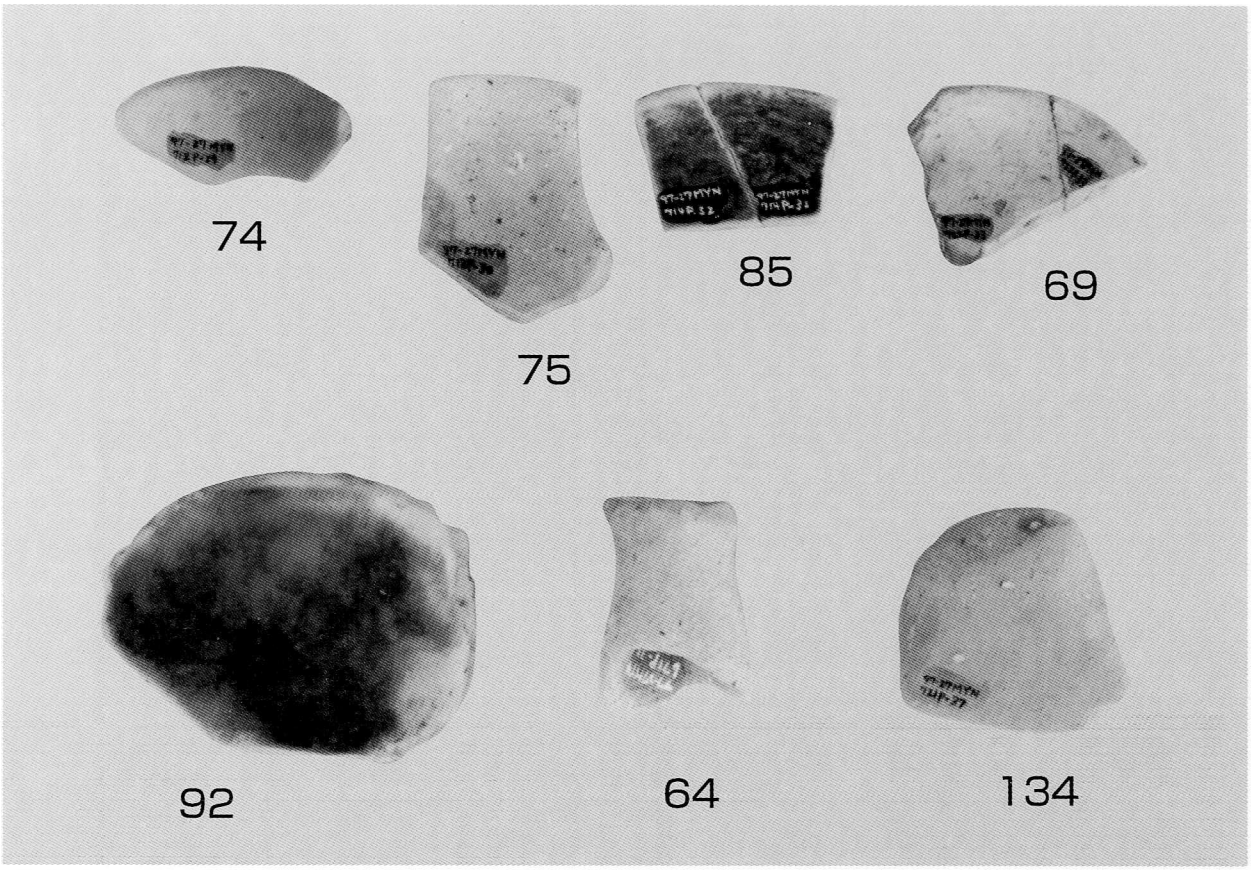


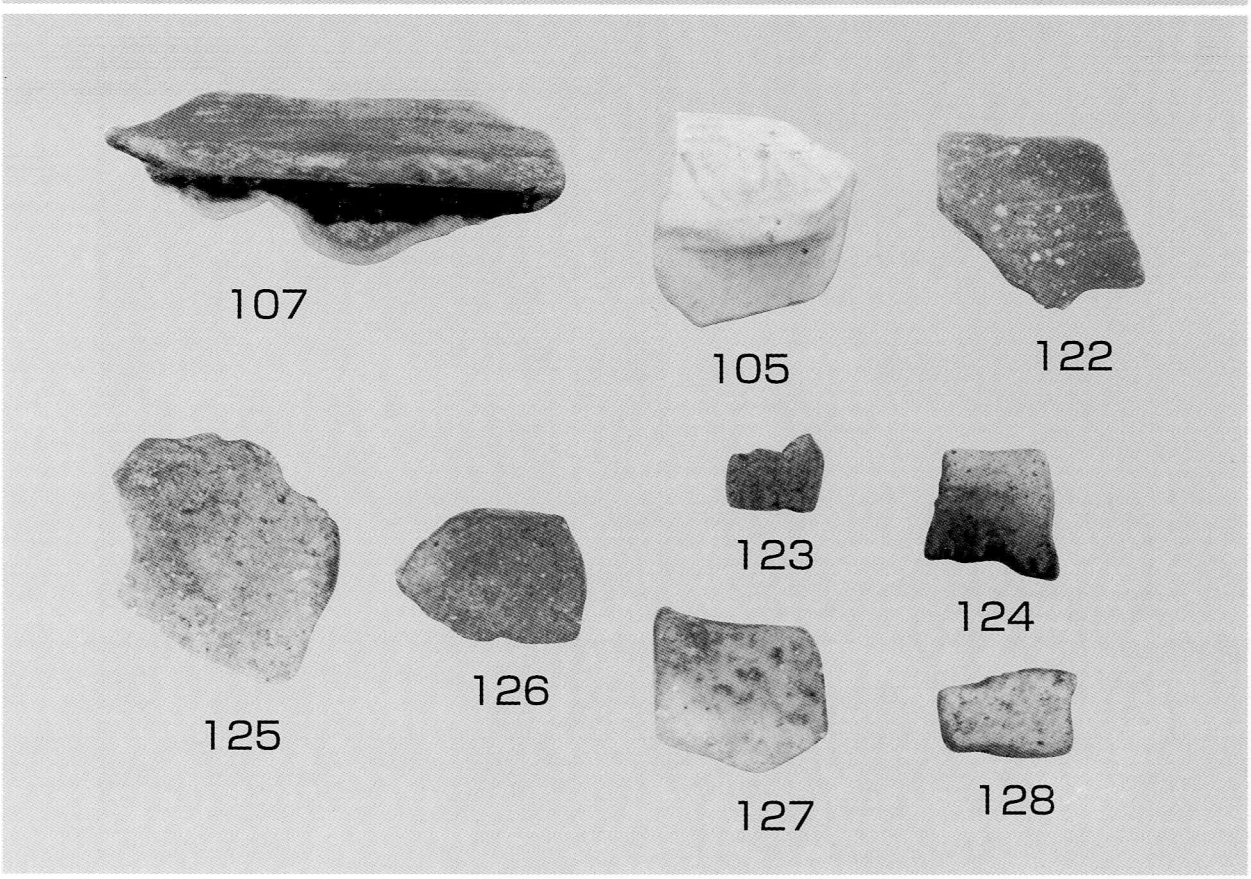
第6層（21、28、67、71、111、137、138）
第6層（66、93、104、108、128、136、139、140）



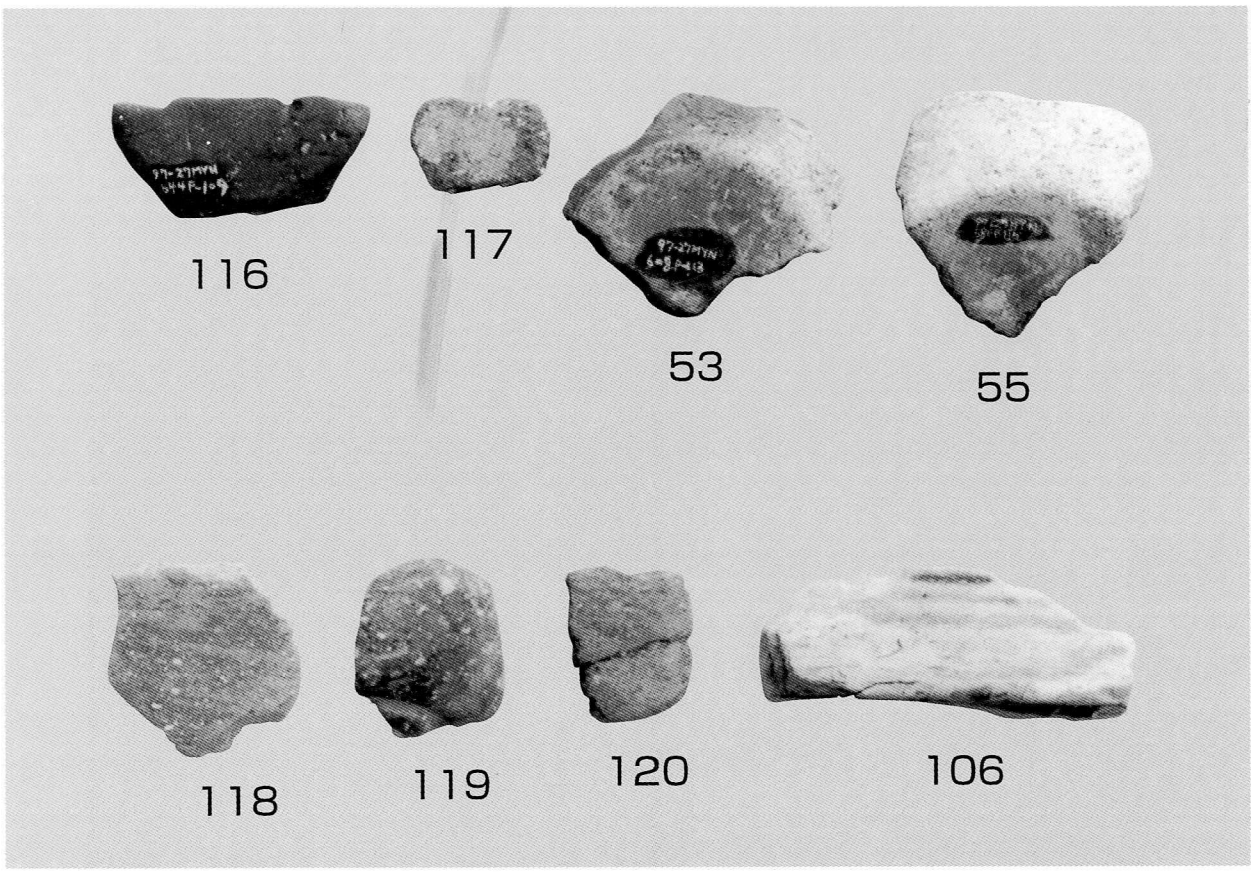


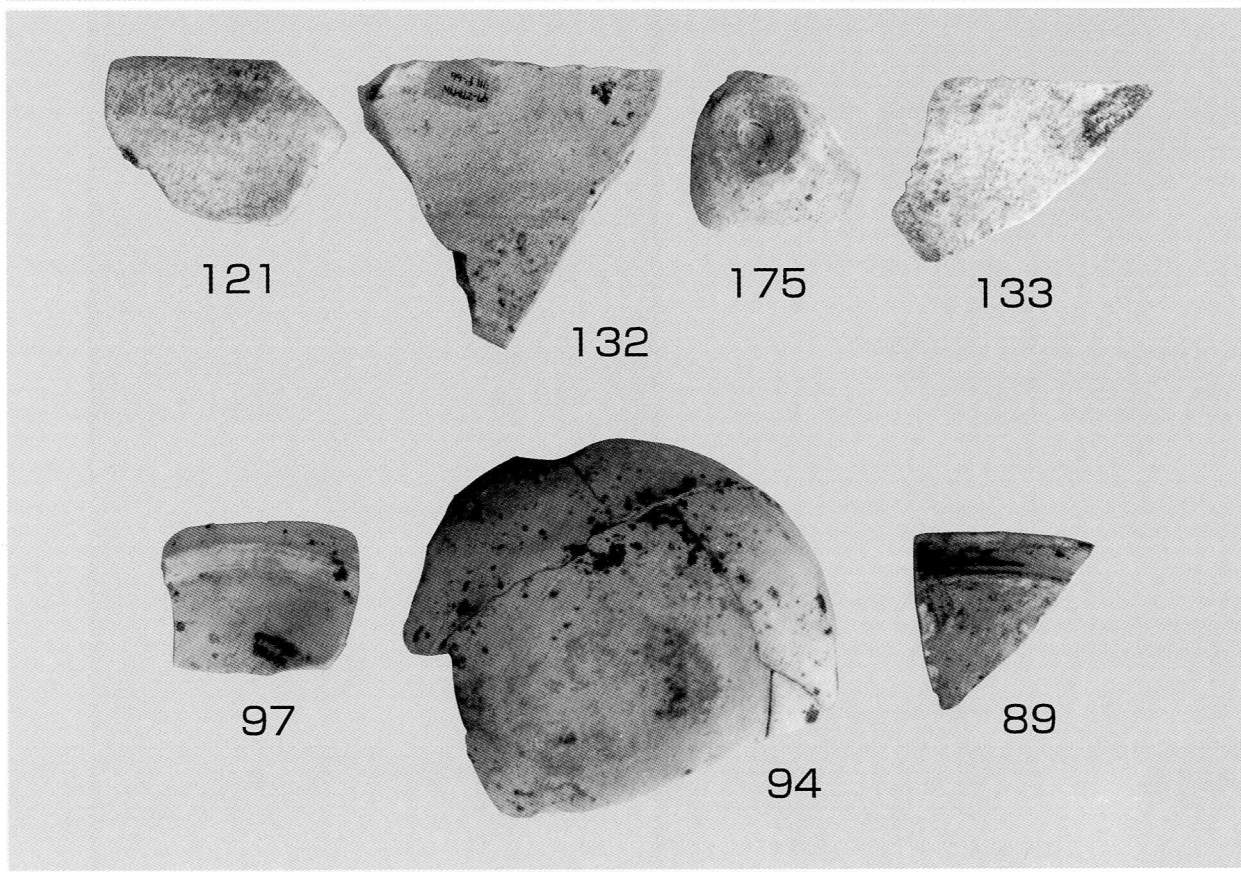
第6層（56～62、68、110）
第6層（83、86、91、129～131、135、138）



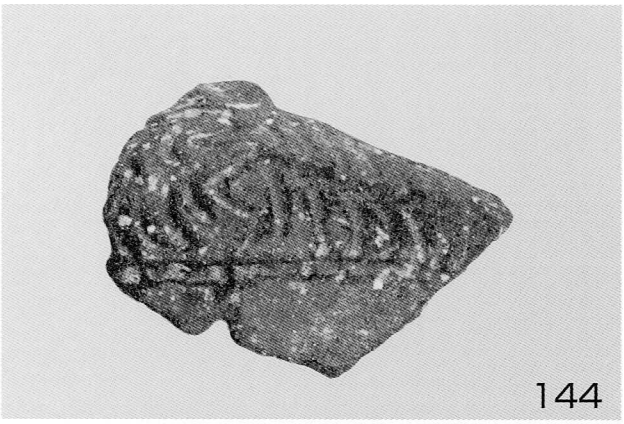


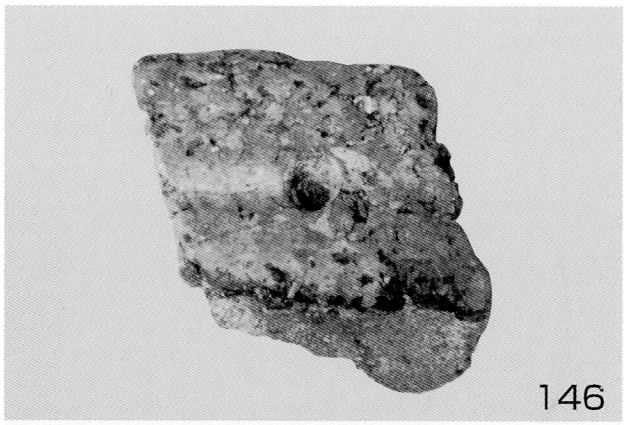
第6層（64、69、74、75、85、92、134）
第6層（105、107、122～128）

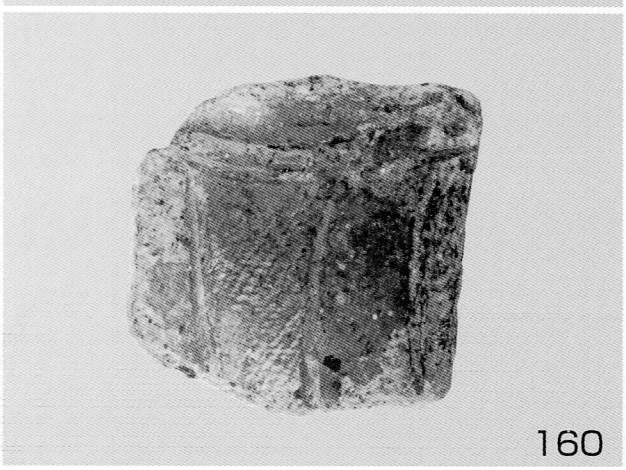


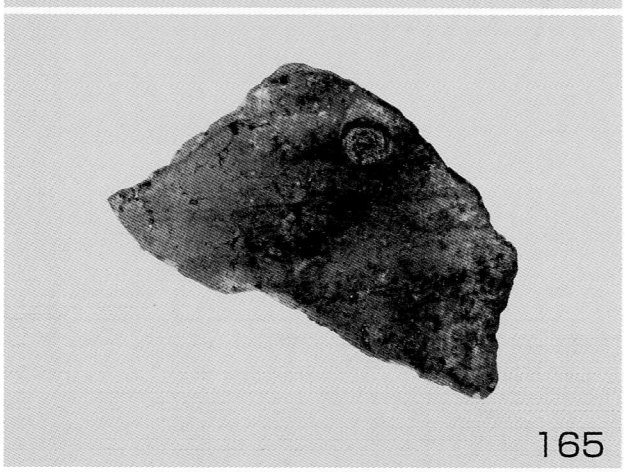


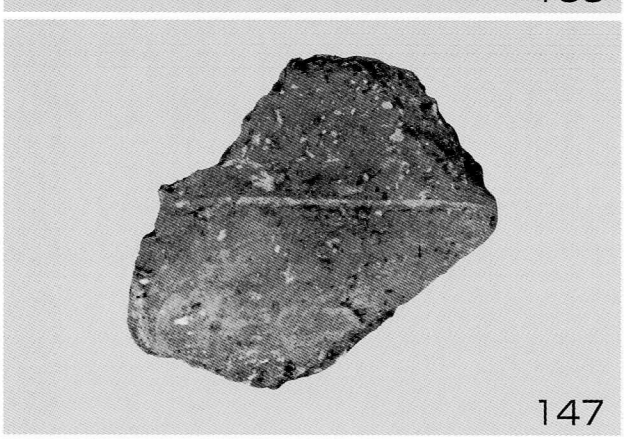
第6層（53、55、106、116～120）
第6層（89、94、97、121、132、133、175）

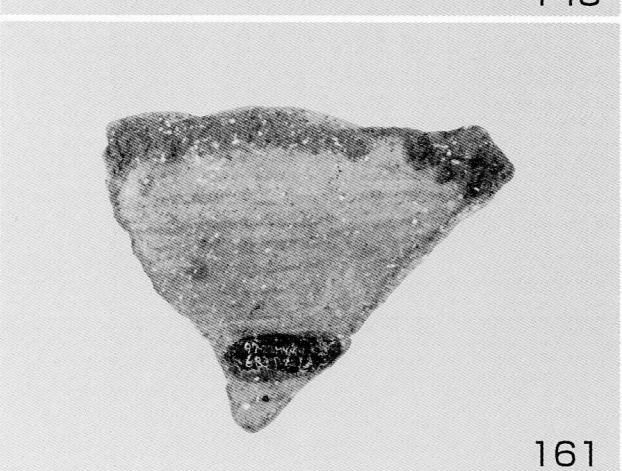


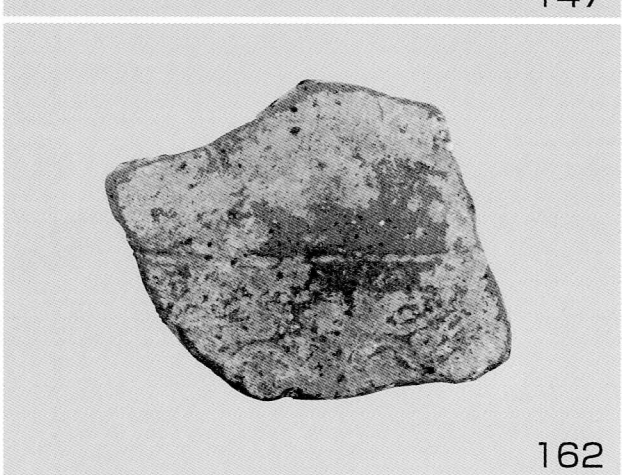




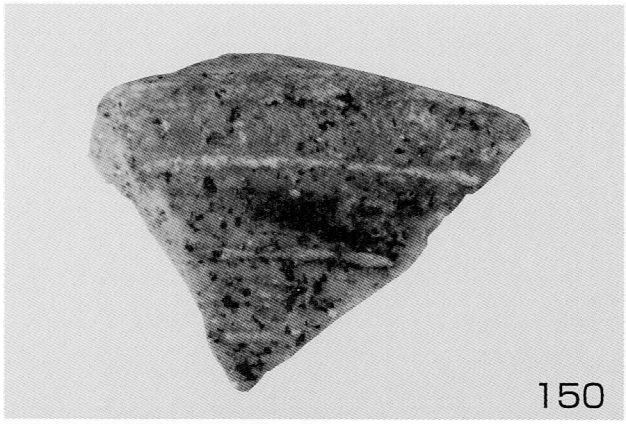


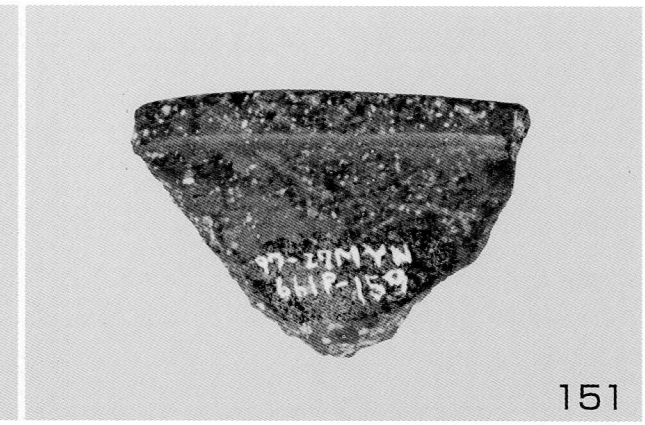


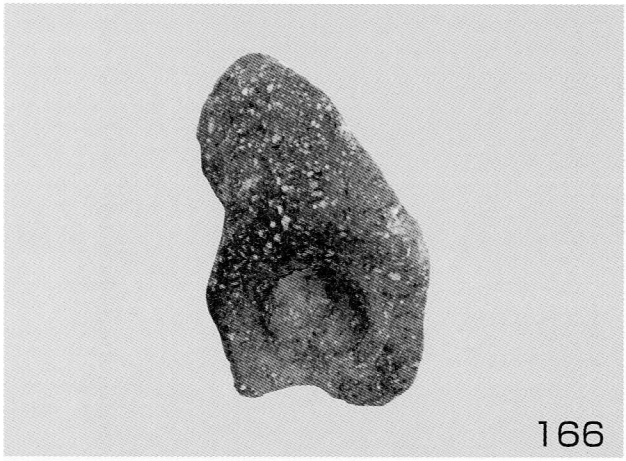


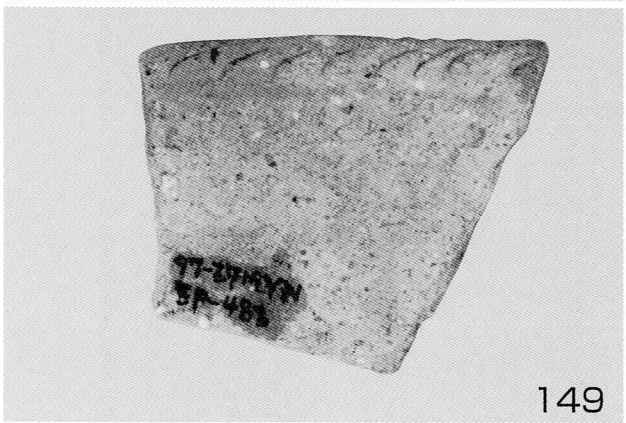


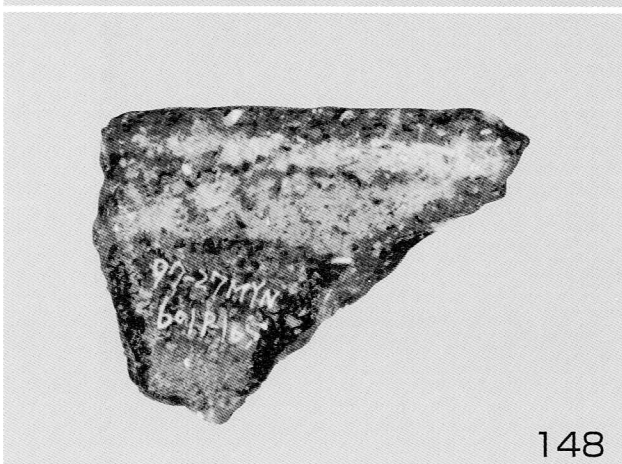
第6層出土縄文土器（144～147、160～162、165）

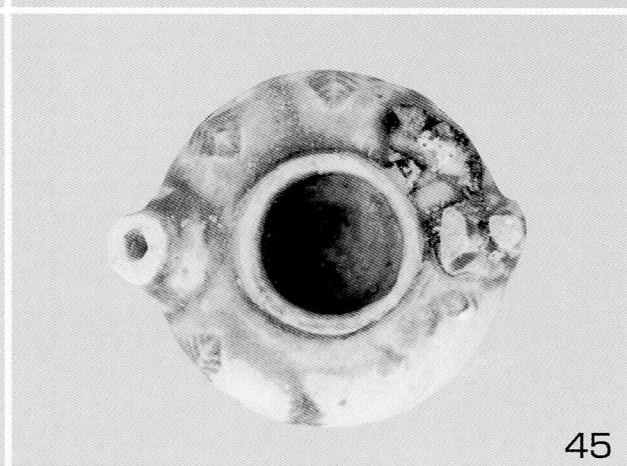




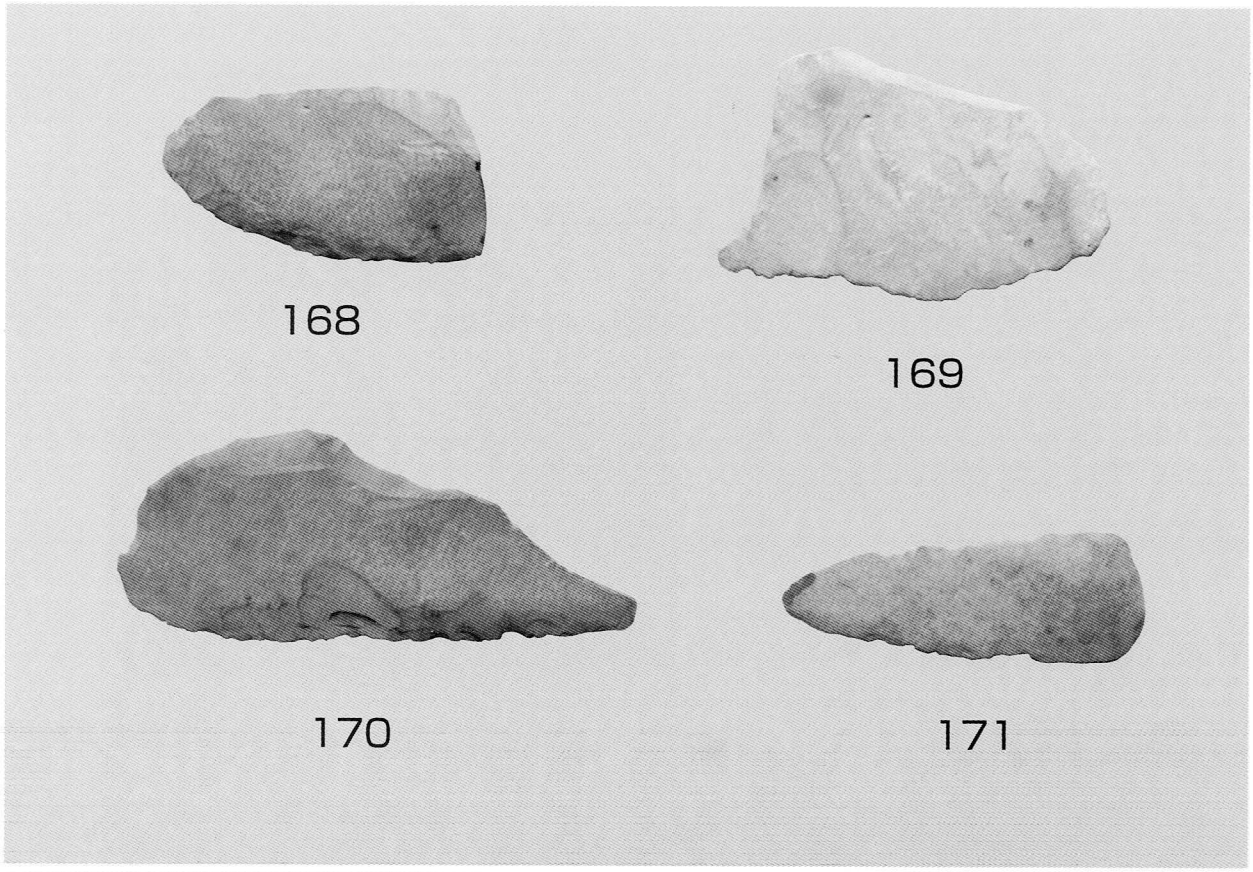


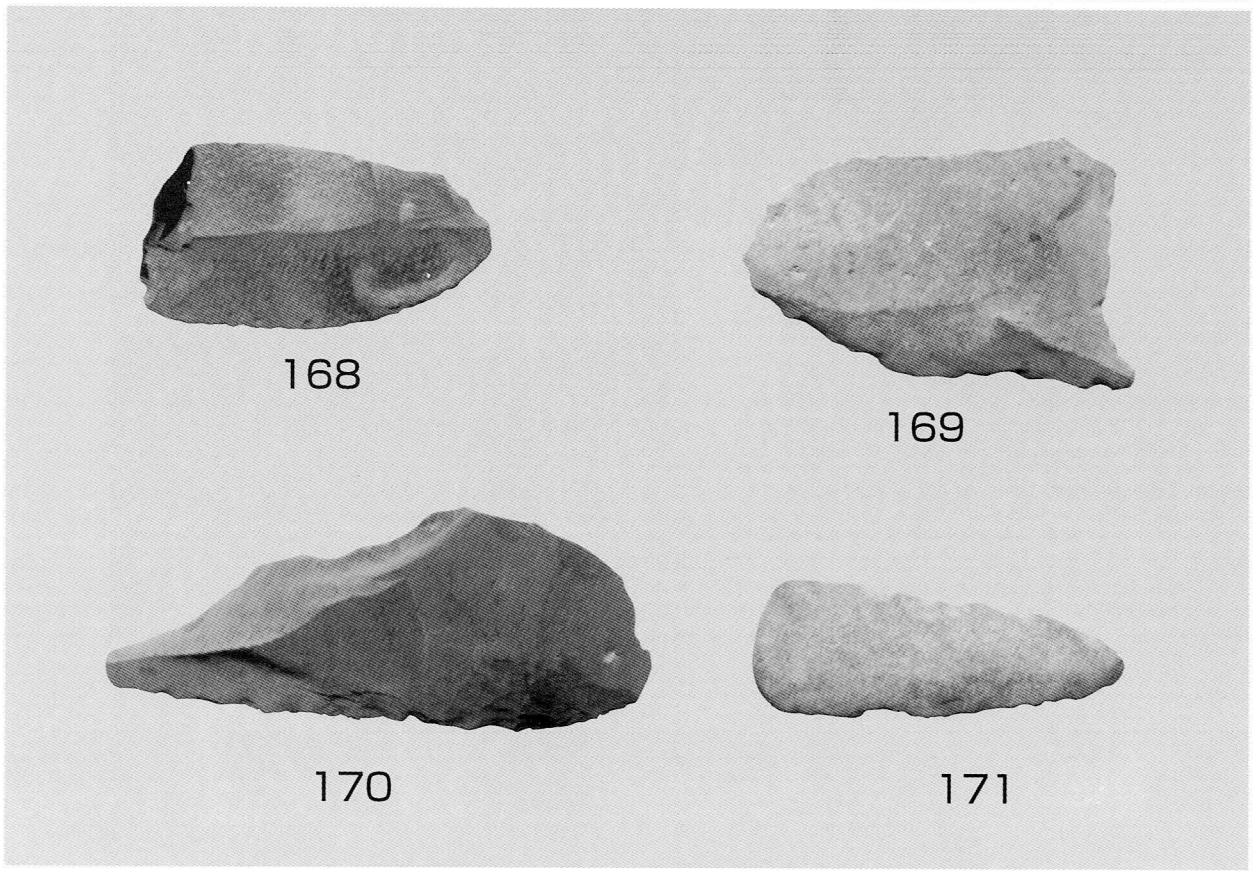




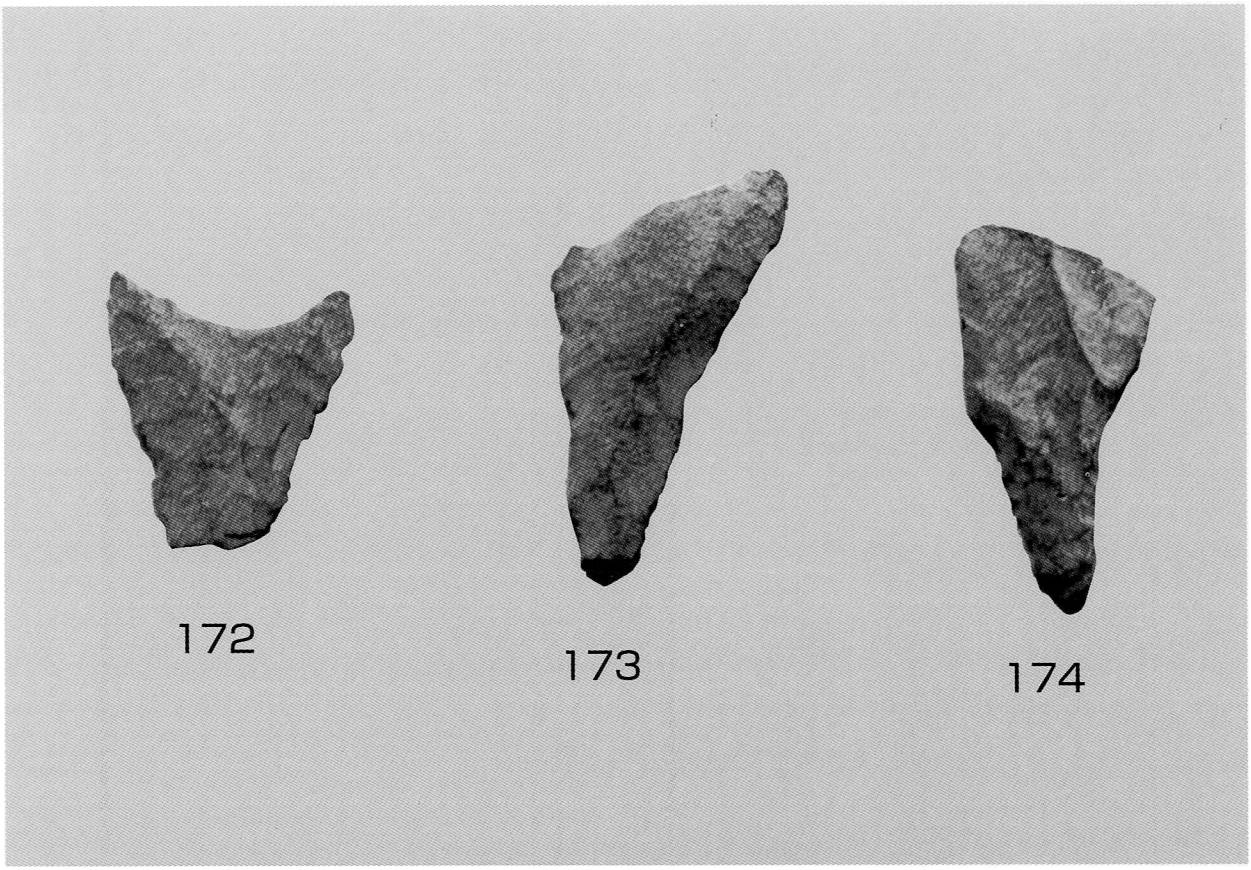


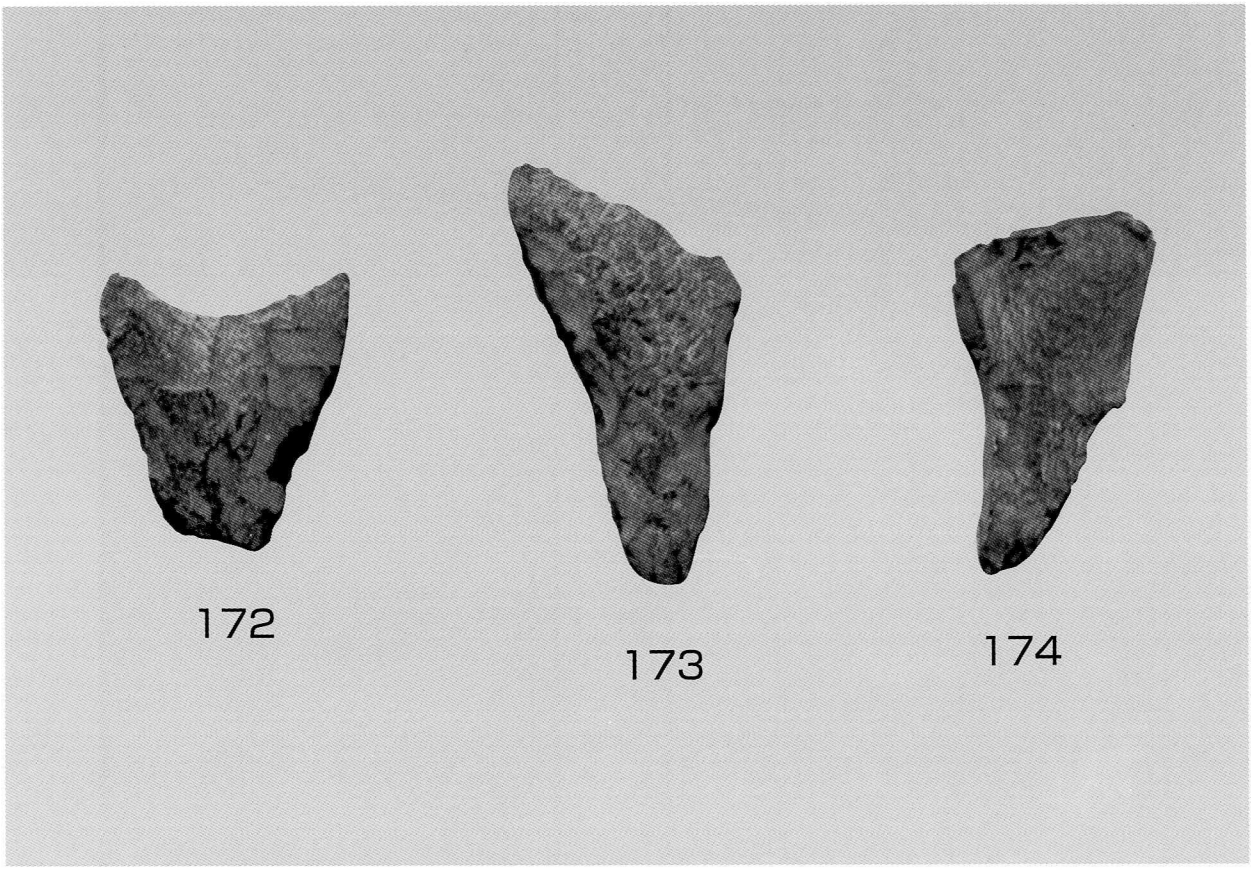
第6層出土縄文土器（148～151、161、166、167）
第5層（45）





石器　SD−609（168）、第6層（169〜171）





石鏃　第6層（172、173）、試掘、トレンチ（174）

貝塚市埋蔵文化財調査報告第45集

三ケ山西遺跡発掘調査概要

発行日　平成１１年３月３１日

編集・発行　貝塚市教育委員会
大阪府貝塚市畠中１－１７－１

印刷　タナカ印刷株式会社